原作通りにならない僕アカ

オリオリ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

チートな主人公によって大きく変わる物語。

ちょっと変わった僕アカの世界を読んでみませんか？

目次

第一話　想現アリス２８歳 ―― 1
第二話　オールマイト３８歳 ―― 14
第三話　神綺とイズくん ―― 28
第四話　何気ない日常 ―― 42
第五話　僕と師匠とオールマイト 60
第六話　イズくんとかっちゃん ―― 73
第七話　アリスの叫び ―― 87
第八話　約束の為に ―― 101
第九話　困ったモノだ ―― 114
第十話　やることが一杯だ ―― 128
第十一話　無防備すぎる！ ―― 144
第十二話　温泉旅行の朝 ―― 157
第十三話　温泉旅行の昼 ―― 171
第十四話　温泉旅行の夜 ―― 188
第十五話　温泉旅行の終わり ―― 202
第十六話　色々大変です ―― 217
番外　夢の中で ―― 236

第一話　想現アリス２８歳

？月！日　ハレバレ愉快だねー

どーも、皆さん。

俺の名前は想現アリスと申します。

あ、俺なんて書いてますけど、声に出すときはちゃんと私って言ってますから俺っ子じゃないですよ。

今日はある有名人に会った記念に日記を書くことにしました。

そのことを書く前に軽く自分のスペックでも書いとこうかな。

名前は想現アリス　女　２８歳

ヒーロー名：マジックヒーロー神綺　なんて呼ばれてる。

個性は想像を現実にするっていう超絶チート。対外的には魔法っぽい事ができる個性で通してる。

容姿は金髪、青目の美女　自分で書くものじゃないかなｗ

ヒーローコスチュームは病院とかに行くことが多いから、白衣、白いワイシャツ、黒のパンツだよ。

全然戦闘向きじゃないコスだわ。
一応転生者で、原作知識もちです。俺が高校生の時は主人公達はまだ生まれてなかったけどな！
と言うか、この年までに見た原作キャラもそう多くないし……。
後察してる人もいるかもしれないけど、俺、前世は男でした。
まぁ来世では女になってみたいなんて思ってたから、ＴＳに思うことはないんだけどね。
これくらいかな？
さて本題だけど、俺に会いに来た有名人ってオールマイトだったんだよね。
いやー、まさか前世から気になっていた人がわざわざ会いに来るとは思ってもみなかったね。
しかも俺って転移で世界中の病院飛び回ってるから捕まえるの大変だったろうに。
話を聞いてみれば、医神アスクレピオスと呼ばれてる私に治療を頼みに来たんだとか。
っていうか医神ってなにさ、初めて聞いたんだけど？
まぁいいんだけどね。
ある意味間違っちゃいないし。

トゥルーフォーム見たけど、怪我してからそんなに経ってないからか、全然筋肉落ちてなかったな。
いや、マッスルフォームに比べたら細いが、それでもいい感じに筋肉ついててすごい。
思わずぺたぺたと触ってしまったわ。
今は女だからいいけど、昔は筋肉に憧れてたわ……。
とまぁ、ここまで書けばわかると思うが、オールフォーワンだったか？
あれとの死闘で負った傷を治せないかダメ元できたみたいだね。
正直悩んだ。
だってこれ治したらきっと、主人公君、オールマイトの力受け継げないよね？
けど今まで人を治してきた俺からすると駄目とも言えない。
ええ、ええ、しましたよ、やっちゃいましたとも。
もう凄く真剣な目で『治らなくても構わない、どうか試してみてほしい』とか言われて……思わず頭叩いちゃったよ。
こちとら難病だろうが、末期癌だろうが、死んでさえいなければ命を全部救って来たってプライドがあんだよ！
原作知識の所為でちょっと悩んだけどな！
まぁ、その結果がオールマイトの完全復活ですよ、ハハ、オールフォーワンざまぁ！

施術後、目を覚ましたオールマイトに泣きながら礼を言われたよ。
『ありがとう！　ありがとう!!』
って号泣してた。
それ見て、やっぱり治せてよかったって思った。
原作は面白いけど、皆今を生きてんだもんな。
なら俺は、それをちょっとでも後押ししてやらなきゃ。
そう思って俺は命を救うヒーローになったんだからな！

？月〇日　曇りは晴れじゃない
はろー、ぼじゅーる、こんばんは。
アリスさんですよー。
今日は久々に治療じゃなくて災害救助に行ってきましたよ。
チクショウ、ヴィランめ。
よりにもよって空港火災起こしてんじゃないよ。
りりなのなのか、ナンバーズなのか、スカさんなのか。
どうもオールマイトが大怪我して、ここにきてるという情報が洩れてたらしい。
せっかく孤児院の子達が来てたのに怖がらせおってからに……!!

火災自体はすぐさま鎮火させて、ぶん殴りに行こうと思ったらオールマイトに止められた。
オールマイトがいる理由？
治療の報酬として孤児院の子達にサービスしてもらうつもりでしたが何か？
……誰かがこれ読んだら盛大に突っ込まれそうだな。
だが俺は後悔していない！キリッ
お金よりも大切なものがあるんだ！（金に困ってないから言える事）
とまぁ、ヴィラン自体はオールマイトがやってくれた。
本人としては完全復活してからの初めての戦いだから良いリハビリになるだろうからいいんだけどね。
ヴィランを退治してから皆を改めて迎えに行った。
マザー（孤児院の責任者で俺を育ててくれた人）と料理しつつ、オールマイトに子守を頼んだ。
マザー、俺とオールマイトは別に恋人とかじゃないから。
治療の報酬で皆に会ってもらっただけだって。
なんかわかってるわよみたいな顔されたけど、絶対にわかってない。
確かにオールマイトは心も強くて逞しい人で……（延々とオールマイトの凄さについ

て記載されている）

？月×日　晴れたね
グッナイ、今日は疲れた、おやすみ

▽月△日　雨も偶にはいいね
今日も今日とて病院巡り。
入院中の患者さんを全員治療して、病院から入院患者がいなくなったぜ！
まぁ、いつも通りですが。
そういえば今日は、オールマイトから連絡があったな。
今はどうやらアメリカで活動中らしい。
こっちは北海道ですよー、海産物がうまい。
それにしても国外通信なんて高いのに、結局雑談だけで終わったね。
もしかして、オールマイト、俺に気がある？
なんて馬鹿なことを書いてみる。
それにしても主人公君どうしようかな。
制限時間？なにそれなオールマイトが、主人公君が男気見せるまで待ってるわけない

し。
そうなるとある意味主人公君の人生をつぶしたことになるよね……。
本人はヒーローになりたがってたし、このままというのも……。
うーん、どうしたものかなぁ……
まだ原作開始の四年前……後継者探しに行く可能性はあるけども……。
んー……少し活動を減らして彼を育ててみようかなぁ……
流石にオールマイトと同じ個性は上げれないけど、似たような個性なら作ってもいいし。
鍛えてみて、どんなヒーローになりたいか聞く……必要もなさそうだなぁ……。
彼、オールマイトの大ファンだったし。
とりあえず、近い内に彼の居場所を探してみよう。

△月?日　酒の所為か頭が痛い。
うーん、頭痛い。けどもう痛くない。
ホントこの個性は便利だ。
昨日は久しぶりに、後輩の消太くんに会って居酒屋で飲んだ。
あ、消太君は原作に出てた抹消ヒーローの相澤消太先生だよ。

若いのに、学校の先生をやるなんてすごいよねぇ。しかも雄英。
俺も臨時教員として、席は置いてあるけど治療や修理でしか呼ばれないからなぁ。
まぁ色々と愚痴が出てきてたけど（笑）
やる気のない子を除籍処分にしたんだって。
俺の時に担当が消太君だったら除籍処分受けてたかもね。なんて言ったら、先輩の担当とかご免被りますっていわれた。
ちょっとひどくないかい？
そんなこと言うと、もう目薬作ってやんないよ？
だからご免なんですって言われたけど。
ちなみに、俺が作った目薬を使うと消太君の個性がフルで使えるようになる。
ドライアイを一時的に解消できるし、頑張れば瞬きしなくても平気だしね。
というか、いい加減俺の施術受けに来なよ。
いつまでも目薬じゃ合理的じゃないでしょうに。
何考えてんだか

ーーーーーーーー

彼女の噂は前々から聞いていた。
災害救助や医療現場に現れるマジックヒーロー神綺
その個性は物語の魔法の様な個性で、救助では瞬く間に人を完治し、治療では古傷さえもなくして見せるという。
救助や治療に携わる者で知らぬものはいないと言われるほどのヒーローだ。
その彼女なら、もしかしたらオールフォーワンにやられたこの傷を癒す事ができるかもしれない。
そう思い、彼女の元へ向かうことにしたのだが……
「申し訳ありません、神綺様は次の患者が待つ土地へと向かわれました」
「……ハハハハ、そうですか」
もう何度目かもわからない言葉に思わず項垂れる。
彼女は世界中を飛び回っており、中々捕まらなかった。
これが飛行機での移動ならまだ捕まりやすいのだが、彼女は転移魔法を使って一日に多くの病院を回っているらしい。
オールマイトが医神神綺を探しているという噂が回らぬよう、トゥルーフォームで探し回っているのだが、流石に傷に響く。

礼を言って病院から出たものの、どうしたものか。
考えても良いアイディアが浮かぶことはなく、今日はホテルへと戻ることにした。
しかし、運が悪いものだ。
私が入院していた病院は、彼女が巡回した後の為一年は確実に来ないと言われ、こうして探している訳だが。
こうもすれ違うと流石の私も縁がないのではないかと思ってしまう。
身体も少しずつ衰えている。
胃を全摘出してからは、以前の様に食事ができず、筋肉を維持するためのエネルギーが足りない。
このままでは私はいずれがりがりになってしまうだろう。
自販機で飲み物を買い、部屋へ戻る道中で私は彼女に出会った。
腰まで届く金色の長髪に、海の様に深い青い瞳、白いＹシャツと黒いパンツに白衣を着て、顎に手を当てて考え事をしているあの女性は間違いない!!
「……神綺君!」
私の声に反応して、彼女は私を見た。
理知的な瞳が私をとらえ、彼女は首を傾げる。
「オールマイ……ト?」

何故疑問形……と思ったらそういえば今の私はトゥルーフォームだったことを思い出した。

一瞬焦ったが、治療するならこの姿も見せなければいけないだろうと思いなおした。

周りに人がいないことを確認してから、少しだけマッスルフォームになると彼女は納得したように頷いた。

「私が「やっぱりオールマイトでしたね。しかし、先程の姿は恐らく個性を使った姿でしょうが、個性を使ってなくても結構筋肉が付いていますね」……し、神綺君!?」

いつものアレをやろうとしたらぶった切られて、何故かぺたぺたと体を触られている!?

「画風が違うと言われる姿も素敵ですが、こちらの姿も良いですね」

「あ、あぁ……そろそろいいかな?」

「えぇ、良い筋肉です。個性なくてもすごいですね」

満足しました、と実に良い笑顔だ神綺君。

しかし君、女性なのだから無防備に体を触るのはやめてほしい。

「神綺君、君に治療を頼みたい」

気を取り直して、彼女に治療をしてほしいと頼んだ。

「……」

彼女は目を細めて私を見て、難しそうな顔をした。
先程私に触れていたのは触診だったのか、私がどんな状態なのか理解しているようだ。
いかに医神アスクレピオスと呼ばれる彼女でも、この傷を治すことはできないだろう、せめて少しでも良くなってくれれば……。
「神綺君、君が察しての通り、私は胃袋全摘、呼吸器官も半壊している。流石に貴方でも完全に治療することはできないとわかっている」
「……」
「だが、それでもかまわない。どうか私を治療してくれないだろうか」
私は彼女に向かって頭を下げ……ペシンと頭を叩かれた。
「え？」
思わず顔を上げると、神綺君が私を睨んでいた。
「馬鹿にしないでください。私は多くの命だけでなく、人生も救ってきた。貴方を救うことだってできない訳がない」
「神綺君……」
彼女の言葉に、私は強い熱を感じた。
私は常に誰かを救ってきた。

私は常に救う側だと思っていた。
笑って、力づけて、そうしてここに平和の象徴として、悪に負けないものがあるのだと。
私は助ける側だった。
だが、私は助けられる側だった。
「……どうか、頼む。私を、救けてくれ」
何故かするりと言葉がでた。
それを聞いて彼女は綺麗に笑い……
「まかせなさい。私は医神アスクレピオスなんでしょ？　貴方の人生を救けてあげる」
力強くそう宣言したのだった。

第二話　オールマイト３８歳

まどろんでいた意識がゆっくりと覚醒していくのを感じた。
今までにないくらい穏やかな気分で目を開けると、見慣れない天井にどこか甘い香りのする部屋にいた。
視線だけで周りを見渡すと寝ているベッドの隣の椅子に座って、本を読んでいる女性がいた。
「……神綺君……？」
「目が覚めましたか、オールマイト」
ぽつりと呟いた声が聞こえたのか、神綺君は本を閉じて私を見た。
なぜ彼女が隣に……？とそこまで考えて、治療を頼んだことを思い出した。
「どうですか？　気分は悪くないですか？」
「……少しぼうっとする」
私がそういうと、神綺君は可笑しそうに笑った。
「それは寝起きだからですよ。私の施術はそういった副作用はありませんから」
寝起きが悪いんですね。と笑われて、どこか気恥ずかしい。

言い訳させてもらうなら、最近は寝起きが良いとかはなかったんだがな。
何せ傷が痛くて熟睡なんてあまり……？
そういえば、傷からまったく痛みを感じない。
それどころか、今まで辛かった呼吸が普通にできる。
「まさか、傷が！」
急いで体を起こして、来ている病衣をめくった。
目に入ったのは醜い傷跡……ではなく、少し薄くなったが鍛えられた胸筋。
見たことが信じられなくて、確かめるように傷を負った場所へ手を当てた。
そこにあるはずの醜い傷跡を手で感じ取ることはできない。
手から伝わる肌の感触は、あったはずの傷跡が完全に消えていることを感じさせた。
夢ではないのか。
思わず頬を思い切り引っ張った。
「……痛い」
神綺君に視線を向けると、彼女は優しく微笑んでいた。
今まで息をするのも苦しかった。
だが今は……なんの苦も無く、当たり前の様に呼吸ができるという事に、思わず涙が溢れた。

人前で涙を流したのはいつ以来だろうか……そんなことを頭の片隅で考えながら、神綺君に問いかけた。

「神綺君……施術は……」

こんなにも弱い姿を晒した私に、彼女は変わらず微笑んでいた。

「当然成功しました。半壊していた呼吸器官、切除された胃も全て復元させました。貴方の個性に関しても、活動時間は以前と同じ様になっているはずですが、これに関しては少し経過を見なければいけませんね。……ちゃんと、貴方の人生も救けて見せましたよ」

得意げに笑う彼女の姿に、心のどこかで張り詰めていたものが緩むのを感じた。

「……ッ……ありがとッう……神綺君……ありがとうッ！」

嗚咽交じりに彼女に礼を言う。

「フフッ……どういたしまして」

優しく気遣う声が、私の鼓膜に響いた。

神綺君が「食事の用意をしてきますね」と言って、部屋から出ていくのを見送り、私は頭を抱えていた。

「……」

もう元には戻らないと諦めていた体が治った感動のあまり……恥ずかしい姿を晒してしまった。
いつもの笑顔はどうした私!?
逆に彼女の笑顔に安心感を感じてどうする!?
「……Ｎｏッ!!」
私をオールマイトという一人のヒーローではなく、患者として見ていたのだろう。
あの見守るように優しい笑顔が何故か頭から離れない！
……なんだかすごく気恥ずかしくなってきた……考えない様にしよう。

ベッドの上でリクライニングを起こして、外を眺める。
体が治ったからか、見える景色ですら今までと違ってみえる。
今までよりも世界が煌めいているようだ。
そんなことを思っていると、コンコンというノックの音が響いて、扉が開いた。
それと同時に香ばしい香りが部屋を満たした。
「失礼します。久しぶりにがっつりと食べたくないですか?」
そう言って笑う神綺君の傍には、ステーキセットが浮かんでいた。
同時にお腹がぐぅとなって、口の中に唾液が溢れ、ごくりと喉を鳴らした。

「それは嬉しいが、いいのかい？　私はまだ施術して一日も経っていないのだが……」
胃を摘出した時は数日は何も口に出来ず、ようやく口に出来た食事も消化しやすい流動食で、それすらも吐いてしまう時もあった。
「ふふふ、私が施術したんですから大丈夫です。昔と同じように食べられますよ」
神綺君は近くにあった台座を私の前に用意して、その上にサラダ、スープ、白米、それから1ポンドステーキを目の前に置いた。
「私好みのドレッシングしかないですが好きな物を使ってくださいね」
ゴマ、シーザー、中華ドレッシングが目の前に置かれる。
「順番など気にせずに、お好きなようにお召し上がりください」
にっこりと笑って置かれたフォークとナイフと今までの言葉に、食欲が一気にわき出る。
クゥ！これは耐えられん！
震える手でフォークとナイフを手に取って、ステーキを切り分け、眺めてから口に入れた。
「……あぁ……美味い！」
口に広がる肉の味に、ニンニクの香り。
食事を楽しむ……今までできなくなっていた事が……またできるようになった。

気を抜けばまた泣いてしまいそうになるが、サラダにゴマドレッシングをかけて頂く。

シャキシャキとした触感、玉ねぎの辛み、キャベツの瑞々しさ、コーンの甘味、パプリカのちょっとした苦み。

なによりもそれを自分の糧に出来るという事。

気が付けば、夢中で食べていた。

当たり前を失って、当たり前を取り戻した。

それが何よりも幸福なのだとわかる。

最後の一口となったステーキを飲み込んで、フォークとナイフを置いた。

久しぶりのがっつりした食事に、心と腹が一杯だ。

「良い食べっぷりでしたね、お代わりしますか?」

そんな様子の私を見て、クスクスと笑いながら聞いてきた。

「いや、大丈夫だ。ありがとう、ご馳走様だ」

「お口に合った様でよかったです」

「あぁ、すごくおいしかったよ。病院でもこんな美味しい物を出せるんだね」

私が食べた病院食はまずかった。

いや、まぁ胃袋が無いし、施術後だったから当然なのだが。

そう思って聞いたのだが、返ってきた言葉は思ったものと違った。
「いえ、流石に病院ではこんな食事はないですよ」
「……？　では今の食事は？」
「私が作ったものですよ？」
首を傾げる彼女に改めて礼を言う事にした。
「そうだったのか、では改めて、非常に美味しかったよ、ご馳走様でした」
「お粗末様でした。デザートもありますが食べます？」
「それは嬉しいが……いいのかい？」
治療に、食事に、デザートまで……至れり尽くせりで申し訳ないな。
「せっかくオールマイトの為に作ったんですから、むしろ食べてほしいですね」
ふむ、態々準備してくれているのなら断る理由もない。
むしろ食べたい。
「ぜひとも頂きたいな」
私の言葉に彼女は綺麗に笑う。
「はい、畏まりました。飲み物はどうします？　コーヒーと紅茶がありますよ」
「ではコーヒーを頼むよ」
まるで喫茶店にいるようなやり取りに少し可笑しくなる。

「では」
神綺君がパチンと指を鳴らすと六芒星の円陣が浮かび上がり、ステーキセットの食器がその中に溶けるようにして消え、良い香りのするホットコーヒーが置かれていた。
思わず目を丸くして、台座を触ってしまった。
ふむ……恐らく先程のは魔法で言う転送陣みたいなものかな？
個性を知らなければまるでマジックでも見せられている気分になるな。
「凄い個性だね。物語の魔法の様な個性だとは聞いていたが、想像以上だ」
「そうですね、私自身かなり便利な個性だと思っています。
本当にいろいろできますからね、ミルクとシュガーいります？」
「あぁ、一つずつ頼むよ」
私がそういうと、先程と同じようにコーヒーの上に魔法陣が現れて、ミルクとシュガーが流れ出た。
魔法陣がそのまま回転すると、中身がゆっくりと混ざり合った。
それを思わず凝視する。
「とまぁこんな風にもできますよ？」
私の様子を見て、クスクスと笑う神綺君に思わず感嘆のため息が出た。
「……本当に何でもできるものだね」

入れて？もらったコーヒーは非常に美味しかった。

「ヴィランッ!!　よくも子供達を怖がらせてくれたわねッ!!」
「神綺君！　落ち着き給え!!　君、ヴィラン殺しそうな勢いなのだが!?」
「この雷の手で引導を渡してやるわ!!　離してオールマイト！　そいつらコロセナイ!!」
「物騒だな!?　私がヴィランを捕まえるからその魔法を止めないか!!」
神綺君は非常にご立腹だ。
掌からは凄まじい勢いで紫色の雷が走り、バリバリという凄まじい音がなっている。
しかも彼女の足元は凍り付き、ヴィランたちの首から下を氷漬けにして動きを止めていた。
彼女はそのまま引導を渡すべく、掌に雷を纏っていたわけだが、何とかそれを止めていた。
と言うか、神綺君を止めることに全力を尽くしていた。
何せ彼女は転移もできる。
魔法陣が出てから転移する時のタイムラグのおかげで、私は何とか彼女がヴィランに

手を下す前に止めることができていた。
と言うか、君、本気すぎるだろう!!
転移した彼女に追いつき、すぐさま手を掴んで止めて、転移されてを繰り返すという完全にイタチごっこ。
しかしこのままにしたら彼女はヴィランを殺してしまうだろう。
オールフォーワンの様なＤＥＡＤ（生死）ＯＲ（問）ＡＬＩＶＥ（わず）な犯罪者と違い、彼らを殺したら神綺君が捕まってしまう……今の時点でも殺人未遂だが……
よもや私がヴィランを守ることがあるとは思わなかった。
「頼むオールマイト!!　俺らの命はあんたに掛かってる!!」
……そして、ヴィランに応援されるとは思わなかった……こんなことは二度と経験できない……と、良いなぁ……
思わず遠い目になりそうだったが、気を抜いたら抜かれてしまう。
それから少しして、ようやく神綺君の動きが止まった。
「……わかった、私はこれ以上なにもしない」
どうやら私は神綺君なだめることに成功した様だ。
「ＨＡＨＡＨＡＨＡ、安心したぞ、神綺君！　……ふぅ……」
神綺君の言葉に、この場にいた全員が安堵のため息をついた。

「流石オールマイトだ！」
「あぁ、俺たちはオールマイトの事を信じてたぜ！」
「俺、出所したらまっとうな仕事に戻るぜ」
「「俺もだ」」
ヴィランたちの声援と更生の言葉にどこかがっくりしながらも、社会復帰ができるなら良い事だと思いなおした。

この現場に来てから私がしたのは神綺君を抑え込んだだけなのだが……。
天を突けとばかりに燃え上っていた炎は、神綺君の魔法によって一瞬で鎮火し、建物からあがっていた黒煙もまた、神綺君の魔法で払われた。
……私は本当にＮｏ１ヒーローなのだろうか？
彼女のできることが凄まじすぎて、私の存在が霞んでいるというのがよくわかる。
そう思っていたら、パキンという音と共にヴィランを拘束していた氷が壊れた。
「「え？」」
後は警察に引き渡すだけだなと思っていたら、予想外の出来事が起き、駆けつけてきたヒーローや一般人のみならず、拘束されていたヴィランの声も重なった。
私はそっと拘束している神綺君を見下ろした。

彼女は私を見上げて実にイイ笑顔を浮かべた。
「じゃあ捕殴まえて」
「「え？」」
またもやこの場にいる全員の声が重なった。
何故か理解できた神綺君から聞こえた言葉と違う副音声に思わず冷や汗が流れる。
「いやいやいやいや!!　俺たちもう抵抗するつもりないから!!」
「あぁ！　絶対にもうヴィランになんてならねぇ!!　約束する!!」
「迷惑かけてすいませんでした！　二度と人に迷惑かけません!!」
「俺は抵抗する気はないぞ!!　五体投地だ！　さあ！　捕まえてくれ!!」
ヴィランたちはその場に土下座して、許しを請い始めた。
「……神綺君、彼らも反省しているようだし」
「捕殴まえて」
実にイイ笑顔でヴィランを指さし、私を見上げて来る。
「し、神綺君」
「捕殴まえて？」
「お、落ち着きたまえ！」
手からまた紫電が走り始めた。

それを見たヴィランは目から光が消えた。
神綺君の目からも光が消えている。
私は投降したヴィラン達に軽く拳骨をした。
その時のヴィラン達の尊敬の目と、神綺君の光のない目はしばらく忘れられないだろう。

その後、ヴィランを警察へ引き渡し、治療のお礼として孤児院の子供達の面倒を見て一日が終わった。

それからしばらくして、ネットにある動画が上げられた。
神綺君の救助の様子が映された動画で、巨大な魔法陣が空港の上空で回転し、火を消し止め、黒煙を払い、救助者を転移で助け出す動画だった。
その動画は非常に評価され、神綺君の評価を大きく上げる事となった。
だが、上げられた動画はもう一つあった。
それは神綺君がヴィランを発見してから、警察に引き渡すまでの一連の流れを全て記録した動画だ。
投稿者が閲覧注意とした上で、上げられた動画を見た者は絶対に彼女の逆鱗に触れな

い様にしようと思ったとか。
この動画が上げられてから、彼女の活動地域では犯罪率が一気に落ちた。
一部の地域では、もう一人の平和の象徴だと言われており、私も一緒に映っていたからか、平和の双璧とささやかれているらしい。

……直正……それをなぜわざわざ教えに来たんだい？
他意はない？
ならば何故そんなにもにやけている!?
直正！直正!!
ええい！一体何を考えているのだ!?
どういうことか説明してくれ!?

第三話　神綺とイズくん

△月〉日　曇りは涼しい

ぼんそわーる

主人公君の住所がわかったけど、どう接触しようかね。

いきなり家を訪ねるのは常識的にどうかと思うし、かといって連絡してもなんで？ってなるよなぁ。

調べた所まだ小学生だし、いきなり接触したら事案が発生するよな。

それならあの辺でヒーロー活動するか？

そうすればヒーローオタクな主人公君に会えそうな気がする。

……少し読み返すととんだ犯罪者だよなこれ。

一人の少年に会うために、こうしてわざわざ活動地域まで限定しようとしてるんだから、どう考えてもストーカーですわ。

ぐぬぬ、しかし主人公君がヒーローになる可能性を摘んでしまったのも事実だし……

……仕方ない、もしストーカー扱いされたら甘んじて受けよう。

オールマイトの力を継がせることはできないけど、それに近い能力なら作ってあげて

もいいし。
いっそのこと、近々接触して二次小説でよく見る魔改造ってやつをやってみようかな。
今の時期からならある程度のトレーニングも問題ないし、というか俺が監督するなら関係ないか。
限界なんて取っ払えるし、その影響がないようにもできるし。
それになんだかんだで、無個性でも結構やれると思うんだよね。
消太君がいい例だと思う。
個性を消して、鍛えた技術と身体能力で勝負！だし、対異形戦に関しては無個性とほぼ変わりないもんな。
それなら今の時期に体を鍛えつつ、夢の世界で技術を磨くのもありだな。
と言うか、まだ出会ってすらいないのにこんな計画立ててるよ俺。
そういえば、思ったことを適当に書き連ねるこの日記は日記と呼べるのだろうか？

△月〆日　よし、今日はいい修行日和だ（曇り）
主人公君改め、イズくんとようやく出会えた。
なんでか知らないけど、ヴィランが全然出て来なかったよ。

おかげでイズくんとの出会いは、俺を見つけた彼に声を掛けられる形になったよ。
というか、なんで俺の事知ってたんだろ？
基本的に病院とか、災害救助でしか顔出さないからあんまり知られてないと思ったんだけど……って書いてるときに思い出した。
そういえば、メディアに全く出てない消太君の事も知ってたね。
それなら俺の事知っててもおかしくないか。
けど、俺のサインなんてもらってうれしいのかね？
きらきらした目でよければ！っていうから断れなかったよ……サインなんて書類に書くくらいだし
流石にそれじゃちょっと味気ないかなって思ったから、デフォルメした俺を書いてみた。
……今思い返すとないな、なんで書いたんだろ。
まぁ、それはともかく公園で少しイズくんとお話をした。
ようやく会えたわけだしね。
まさか自分の事について知らないことがあるとは思わなかったけど。
平和の双璧って何ぞや？いつの間に、そんなこと言われるようになったし。
あとオールマイトについても聞かれた。何で交流があるって知ってるのさ？

イズくん、オールマイトの事好きすぎ（苦笑）
彼のヒーロー像も大分オールマイトによってるね。
けど、あの自己犠牲まっしぐらな大馬鹿者を真似るのはやめてほしいな。
なんどあのヒーロー馬鹿を寝かしつけたことか。
疲労がたまる前に休めって何度言わせるんだあの大馬鹿者め。
おかげですっかりかかりつけ医みたいになっちゃったじゃないか。
直正さんも、なんか意味深に笑って聞いてくれないし。
ナイトアイも私に任せてないで、あのバカ止めてよ。
っていかん、日記まで書き方が女寄りになってる。
前世の名残だからせめて俺と男言葉を意識しないと。
とにかく、あのバカを真似るのはやめてほしいわけだよ、イズくん。
ってこっちに書いても意味ないか。
ちょっと意地悪な事しちゃったけど、彼のヒーローになりたい宣言も聞いたし、俺はそれを承諾した。
これで俺とイズくんは師弟となったわけだ。
さて明日からどう鍛えていこうかな。
あ、病院の方には分身の方を行かせておこう。

本体の方で修行はみたいし。

★月☆ミ日　さぁ修行だ！

とりあえず体を鍛えるために、原作で見たあの砂浜を走らせてる。

ゴミ運びするくらいなら俺が負荷掛けたるわ。

ちなみにあったゴミは全部魔法で回収してから直して、孤児院に持って行った。

必要ない分は孤児院のバザーで売ってお金にしてもらうことにした。

何かあれば、俺が直しに行きますよってサインしてあるから何があっても大丈夫さきっと。

とまぁ、それはさておき

イズくんの修行内容だけど、前世で見た『最強の弟子』やら『一歩』などを参考にして鍛えてる。

漫画（ヒーアカ）の世界だし、別漫画の世界の鍛え方でも問題ない。たぶん。

個性で彼の限界を測定して、限界ギリギリのノルマを課している。

小学生なのに砂地を４ｋｍ走り切るってすごいと思う。

流石漫画の世界。

後は拳法の型とか、姿勢維持とかを１ｋｇ負荷をかけてやってる。
まだ少ししかやってないから、この程度だけど将来的には某忍者漫画の努力の人みたいに超重い負荷をかけても普通に動き回れるようにしたい。
それにしても、イズくん、すごい根性だ。
もし前世の俺なら間違いなく途中で投げ出してる。
この世界に転生してからは孤児だったとはいえ、個性がチートだったから全然苦労とかしてこなかったんだよね。
個性で人を救ってきたっていう自負はあるけど、精神的な強さは恐らくこの世界の誰よりも弱い。
だからかな、こんな俺の事本気で尊敬してくれるイズくんが眩しく見えるのは。
最初は罪悪感から鍛えようって思ってたけど、少し接しただけで大分絆されちゃったなぁ。
イズくんが少しずつ、だけど確実にノルマを達成しているのを見ると嬉しくなる。
これが弟子を持った人の気持ちなのかねぇ。
そんな気持ちでいたからか、思わず電話してきたオールマイトに自慢してた。
無個性だけど、ヒーローになる為に頑張ってる子がいるって。

気弱なのに、オールマイトみたいに笑って助けれるヒーローになるんだって言ってる子がいるって。
イズくんが頑張る姿が眩しいとかいらないことまで言った気がする。
けど自慢したかったんだから仕方ないよね。
さて、そろそろ夢での技術修行の時間だから日記はこれでおわりっと。

＝月$日　イズくんもうすぐ中学生だねぇ

イズくん大分鍛えられてきたなぁ。
小学生なのに腹筋割れてるよ、シックスパックだよ。
おまけに二の腕カッチカチだよ。
ピンク筋を増やす様にしておいた方が良かったかな……
いや、けどイズくん自分の体を見て喜んでるし、いいのかな。
身長に影響が出ない様にしてるけど、鍛えすぎたかな……？
本日はイズくんの影を具現化して、対人戦闘を行った。
強さは本日のイズくんを保存して、次回からこの影と戦闘してもらう。
影を倒したら、また新しく更新して、それを繰り返せば癖とか対人のコツとか掴める

はず。

とまぁ、それを砂浜で行ってたんだけど……なんで来たのさ、オールマイト。
前から俺の弟子に会ってみたいとか言ってたけど、ついに来ちゃったよ。
イズくんは戦闘に集中してたから気づいてなかったけどさ。
オールマイトからみてイズくんがどう見えるか聞いたけど、概ね高評価だった。
自分の若い頃に似てるだって。
そういえば、オールマイトも元々無個性だったね。
イズくんは夢でも技術を高めてるから、体術はそこらの中学生にも負けないよ。
指導方針も心技体を心得るようにしてるし、時々気当たりとか殺気とかを当てて空気にも慣れさせてるからね。
けどやっぱり俺は師匠なんて柄じゃないね。
対戦相手も、効率のいい鍛え方も個性に頼ってるだけだし。
本当にいい師匠はちゃんと自分の経験したことも言葉にするんだろうけど、俺にはできないな。
なんて弱音吐いたら、オールマイトに笑われた。
こちとら真剣に悩んでると言うのに。

イズくんに聞いてみたらいいって、聞けるわけないだろ。
彼は優しいからきっと俺が師匠に向いてないって言っても否定する。
それがわかるくらいには濃密な日々を過ごしてきたし。
けど、師が弟子に弱いところ見せたら駄目だろ。
しかもよりにもよって『心』の部分でとか。
こればっかりは弟子に晒す訳にはいかない。
俺が考えているイズくんに渡す個性も、強い思いが重要になってくる。
師匠が揺らいじゃいかんだろ。
うん、俺は大丈夫。
イズくんの強い師匠でいれるさ。

ーーーーーーーーーーーー

その人に会えたことで、僕の人生は大きく変わったんだ。
僕はその日の事を絶対に忘れない。
師匠にヒーローになれると認められ、弟子にしてもらったその日は僕の人生で一番大

切な日だ。
僕の師匠はマジックヒーロー神綺
災害救助や治療において、師匠ほど凄まじい成果を上げる人はいない。
ＮＯ１ヒーローのオールマイトですら、災害救助においては師匠にかなわないと笑っていた。
治療では死んでさえいなければ、どんな傷も、傷跡も、失った手足でさえも治してみせる医神と呼ばれている。
戦闘でさえも、あのオールマイトでさえも戦いたくないと言わしめ、彼女が活動してる地域ではヴィランがいなくなることで有名だ。
事実、師匠が僕の町に来てから、ヴィランは彼女の滞在を知らない者以外姿を消した。
そんなすごい人に、僕は弟子として認められた。
その時のやり取りはいくら時がたってもきっと覚えている。
それくらい、あの時の師匠は……うん、鬼だった。

「無個性でも、ヒーローになれますか」
偶然出会って公園で話をして、ずっと聞きたかったことを、オールマイトに並ぶヒーローに問いかけた。

「どうしてヒーローになりたいの？」
　僕の問いに答えず、真剣な目でそう問い返してきた。
「オールマイトみたいに、笑いながら誰かを助ける……皆に希望を与えるようなそんなヒーローになりたいんです！」
「……じゃあ、緑谷君」
「はい！」
「君はヒーローになれないわ」
　神綺さんのその言葉に、僕は唇をかんでうつむいた。
　わかっていたことだ。
　無個性でヒーローになった人なんていない。
　それでもこうしてプロのヒーローから言われると、足元が崩れていく気がした。
「そう言ったら、諦めるの？」
「えっ……？」
　思わず顔を上げると、神綺さんが真剣な目で僕を見ていた
「君はヒーローになれない、無個性だから無理、すぐ泣いちゃうから無理、気弱みたいだから無理、私がそう言ったら君はヒーローになることを諦めるの？」
　神綺さんの言葉が胸に刺さった気がした。

今までも無理だって言われてきた。
皆に馬鹿にされてきた。
それでも、ヒーローになりたいって夢だけはずっと捨てられなくて……。
カバンの中には色んなヒーローの事を纏めたノートがある。
将来の為にってこんなものを作るくらい、ヒーローになることを諦めることができなくて……。
「……いやです、僕は……諦めたくない……!!」
「どうして？　君は体格的にも恵まれていない。個性があっても大怪我してしまう人だっているわ。無個性の君なら死んでしまうかもしれない。なのに諦めないの？」
「それでも……それでも、僕は諦めたくないんです……！　皆を笑顔にするような……そんなヒーローに!!」
唇を強くかんで、神綺さんを睨んだ。
神綺さんの言葉は僕の心を切り刻む。
それでも、諦められない……違う、諦めたくない!!
そんな僕に、神綺さんは僕の心を折るかのように言葉を放つ。
『英雄は英雄になろうと思った瞬間に失格である』
「……ッ……」

「この言葉の通りなら、君は英雄失格だよ？　諦めないの？」
「……ッ諦めません!!　僕は！　絶対に、オールマイトの様なヒーローになる!!」
僕は大声でそう宣言して、唇を思いっきり咬んだ。
「それなら君はヒーローになれるわ」
「え!?」
先程までの冷たい言葉が消え、温かい優し気な声が聞こえた。
「酷い事言ってごめんね。でも、無個性でヒーローになるなら絶対に諦めない心が必要だわ」
神綺さんは申し訳なさそうに僕を見ていた。
「私が思うヒーローの条件はね、諦めないこと。どんなに辛くても、どんなに苦しくても、心が折れてしまっても、最終的にはその折れた心を叩きなおして、立ち上がることができる。そんな馬鹿みたいに諦めの悪い人がきっと英雄になれるの」
そこまで言って神綺さんは小さく笑った。
「無個性？　人の技術は時に個性すらも上回るわ。『英雄は英雄になろうと思った瞬間に失格である』それがなに？　英雄になろうと思うのは悪い事なの？　例え、英雄になりたいと言う思いからの行動だったとしても、その為に行動した全ては無駄になるの？
違うわよね、英雄を志す『モノ』が何であれ『笑いながら誰かを助け、皆を笑顔にす

る英雄になりたい』と思って行動した貴方の思いは決して無駄じゃない。貴方が誰かの為に『英雄』を目指して『成した事』はきっといつか英雄と呼ばれるものになるから」

「……神綺さん」

「柄にもない事言っちゃった。あーぁ、顔が熱いわぁ」

僕から目を離して、赤くなった頬をパタパタと扇いでいる。

けど、神綺さんが言ってくれた言葉は、切り刻まれた僕の心をより強くした。

泣いても、怖がっても、折れてしまってもいい。

その度に折れた心を叩きなおして、また立ち上がれ。

決してあきらめるな。

「僕、頑張ります！　絶対にヒーローになります！」

「なら、私はその後押しをさせてもらおうかしら」

「え？」

神綺さんの言っていることがわからずに、その時の僕はぽかんと神綺さんを見上げていた。

「私の弟子にならない？　緑谷出久君」

それが、僕と神綺さんの師弟の始まりだったんだ。

第四話　何気ない日常

「今日はいい天気だ」
サンサンと照り付ける太陽に、初夏の若々しい緑の香り。
美味しい朝食を食べて、栄養もしっかりと摂った。
二時間くらい眠れて、意識もすっきりしている。
今日はどこをパトロールしようか。
「もう何度言ったかもわからないんだが……アンタはいい加減休むと言う事を覚えろ！
このヒーロー馬鹿!!」
「ぐはっ!?」
声が聞こえたと同時に頭に凄まじい痛みが走った。
こ、この最近慣れ始めてきた鈍痛と声は……！
「し、神綺君……毎度毎度ッ……非常に痛いのだが……ッ!!」
視線を向ければ、いつもの白いワイシャツに黒のパンツ、白衣と言ったヒーローコスチュームに見えないコスチュームを着た彼女がいた。
彼女は私の抗議など全く気にせずに、ぎろりと鋭い視線で私を睨んできた。

マッスルフォームである私の胸に届くかどうかと言うくらいの身長だと言うのに、凄まじい威圧感だ。

「……今度はどれだけ休みなしで働いた？」

「……あー……」

物理的な圧力すらも伴いそうな視線から逃げるよう目を逸らす。

するとそれを阻止するかのように、細く白い手が私の顎を掴んで、目を合わせるように動かされた。

じっと私を見る目には小さな魔法陣が浮かんでいる……これは逃げられない、いつものパターンだ……

観察が終わったのか、顎を掴んでる手に力が強くなっていくのを感じ、冷や汗が流れる。

「身体を見た所、最後に会ってからずっと休んでないな？　画風で誤魔化してるみたいだけど目にクマが浮いてる。夜も動き回って寝てないのかアンタは……!!」

言葉がきつくなり、顎を掴んでいた手が頬へと移り、思いっきり引っ張られる。

……凄く痛いんだが……何気に個性で浮いてるし、筋力も絶対強化してるね……

しかも目線が同じくらいになっている……なんだか落ち着かない……

「し、神綺君……ほ、頬が千切れてしまいそうなんだが……」

私の言葉に彼女はにっこりを笑みを浮かべた。
……目は全く笑ってなくて、非常に怖い。
どこか師匠を彷彿とさせる笑みだ。
「気にするな、千切れても私が治してやるからな。そろそろ堪忍袋の緒が切れそうなんだが……まだ私の言う事を聞くつもりはないのか？」
「そ、それは勘弁願いたい……で、できるだけ善処する」
私がそういうと、頬を引っ張る力が強くなった。
千切れる！　千切られてしまう!?
「それは前も聞いた。確約しろ」
「わ、わかった!!　約束する!!　これから絶対に休息日を作る！」
笑っていない目に殺気が宿り始めるのを感じて、急いでそう告げた。
「最低でも週一で休め」
「それは多すぎ……いや、わかった！　わかったから!!」
頬を掴んでいない方の手から紫電が走り始めたのを見て、すぐさま降参する。
……何故か彼女の言う事にはあまり逆らえない……なぜだ……？
「……はぁ……オールマイトはもう少し肩の力抜きなさいよ」
神綺君はため息をつくと、近くのソファへとふよふよと移動していき、そのまま落ち

る様に腰かけた。
私の呼び方がようやく元に戻ったのを聞き取って、小さくため息をついた。
神綺君は怒ると言葉遣いがかなり荒くなる。
手が出てきたらもう猶予は全くない。
それがわかるほど怒られていると言うのは情けない限りだが……
「……神綺君の言い分もわかるのだが……」
「ヒーロー飽和社会で、絶対にオールマイトが必要なんてことは早々ないわ。周辺地域には私の使い魔を飛ばしておく。何かあれば教えてあげるし、ついでに転送してあげるわ。だから今日は休みなさい」
そう言って彼女は魔法陣から本を取り出して読み始めた。
「……仕方ないか」
個性を解除して、トゥルーフォームになってソファに座る。
テレビを適当に眺めて、ふと隣に座る神綺君へと視線を向けた。
腰まで届きそうな長い金髪は、傍目から見てもさらさらとしている。
特に縛ったりもすることなく、神綺君が動くたびに流れるようにして落ちる。
理知的な青く綺麗な瞳は、時に力強さを、時に優しさを、彼女の感情を鮮やかに映し出す。

顔も非常に整っており、男性に人気も出るだろう……んん??
何か胸の奥がざわざわするような……?
思わず胸を押さえて首を傾げるが、そのまま観察を続ける
私はよく画風が違うと言われるが、彼女もまた別の方向で画風が違うと思う。
それくらい、彼女は美しく見える。
肌も白く、全体的に細いが、数か月前のやり取りで何気に力が強い事もわかっている。
強化の魔法でも使っていたのだろうと思うが、それでも私が本気で対応しなければいけないくらいだった。
どう見ても高校生くらいの少女にしか見えない。
制服を着れば、例え本当の年齢を言われても信じられないだろう。

「……そんなに見詰められると穴があきそうなんだけど」
「む、不躾だった。すまない」
苦笑しながら私の方を見た神綺君に謝る。
確かに女性をじっと観察するのは失礼だったな。
「まぁいいけど……何かあった?」
「いや、神綺君は美少女だねと思っていたのだ」

「……もう少女って言われるような年でもないんだけどね」
神綺君ははきょとんと眼を丸くして、次いで苦笑した。
「美、と言う所は否定しないのだね」
私がそういうと、彼女は可笑しそうに笑った。
「まぁね。自分で言うのも変だけど、私は私の容姿を客観的に見ることができるから、私も美人だなぁって思う事が……って、これじゃナルシストみたいだけどね」
自分を客観的に見れるとはどういうことだろうか？
彼女の言葉に首を傾げてると、また可笑しそうに笑われた。
「気にしなくていいわ。理由は……そうね、まぁ、秘密なのよ」
そう言って楽しそうに笑う神綺君を見て、思わず私の口にも笑みが浮かぶ。
「なんだいそれは。教えてくれないか？」
「だぁめ。女は秘密を着飾って美しくなるっていうらしいから」
クスクス笑う神綺君に胸の奥が熱くなる。
神綺君といると、こうして胸が熱くなる時がある。
一体何なのだろうか。
ナイトアイや直正君に聞いても、何故かにやにやと笑われる。
そういえば、携帯で連絡とるようになったのも彼らの所為だったな。

そのおかげで　今では神綺君も友人と呼べるほどの仲になった。
この数カ月で親友と言ってもいいくらいに遠慮もなくなった。
電話で連絡を取っている内に、徐々に敬語が無くなり、色々と話せるようになった。
時々ちゃんと休んでいるかと聞かれて、私はそんなに軟じゃないさと返していたら、ある日突然拠点に現れて強制的に寝かしつけられた。
思えばあの時から神綺君は完全に遠慮しなくなった。
心配されていると言う事はよくわかる。
だからか、彼女の言う事に逆らう気が起きず、こうして従ってしまう。
これも言うと直正君たちはニヤニヤとするんだが……本当になぜなんだ？
「オールマイト」
「なんだい？」
思考に耽っていたら、名を呼ばれたので声がした方に顔を向けると、神綺君が冷蔵庫を漁っていた。
「食材は色々あるみたいだけど、何か食べたいものはある？」
「これと言ったリクエストはないな。君が作る料理はどれも美味い」
そういえば、こうして食事を作ってくれるようになったのはいつからだったか。
気が付けば、彼女が来る日は必ず食事を作ってくれるようになっていた。

神綺君の料理はどれも一級品で美味しいから、私としては嬉しいのだが……なんだか申し訳なくなってきた。
「それが一番困るのだけどね……なら、野菜たっぷりのクリームシチューにしようかな。野菜の傷み具合から見て、食事もおろそかにしてるみたいだし」
「……ＨＡＨＡＨＡ、言われるほどではないと思うぞ！」
呆れたような目で言われて、思わず乾いた笑いで反論する。
「へぇ……今日の朝食は？」
「……ジャムパンとコーヒー」
私の言葉に彼女の視線がジトッとしたものに変わる。
「昨日は？」
「……朝にチョコパンとコーヒー、昼にメロンパンとコーヒー、夜にアンパンとコーヒー」
「全部菓子パンとコーヒーだけじゃないの」
「ぬぐぅ」
完全にジト目で思いっきりため息を吐かれた。
違うんだ、最近菓子パンにハマってしまってだな。
心の中で反論するが、最近まともに食事をした覚えがないので口を閉じる。

「食事が楽しめるようになって嬉しいのはわかるけど、バランスよく食べないとだめよ。平和の象徴が不養生で倒れるとか笑えないから」
「……すまない」
完全にお見通しだった。
体が治ってからの私はそれはもう色々と食べた。
自分で色々つくりもしたし、食べにも行った。
だが最近はあんまり手の込んだものは活動の邪魔になってしまうので、どうしても片手ですぐ食べれるものにしてしまうのだ。
……結果、こうして怒られるわけだが。
「食事の時間くらいちゃんと取りなさい」
「……はい」
思わず正座して頷いてしまったのは、いつもの事だからではない……はずだ。
クリームシチューは非常に美味だった。

神綺君と最後に会ってから数日後、私は携帯を片手に立ちつくしていた。
ヴィランを捕まえて、警察に引き渡したら直正君に、神綺君にちゃんと連絡するように言われてしまった。

前回から一週間も経ってないんだが……そんなことを思いながらも神綺君と話をするのは楽しいので、とりあえず言われたように電話をした。
「君が弟子をとった!?」
『えぇ、緑谷出久君っていう子なんだけど、あの子凄いわよ』
聞こえてくる声はすごく楽し気だ。
「君が言うほどなのかい？」
神綺君が凄いと言うくらいの個性を持った弟子なのだろうか。
『無個性の子なんだけどね　でも、心が凄く強いの。まだ小学生なんだけど、私が課したギリギリのノルマを死に物狂いでクリアするの。オールマイトみたいに笑って人を助けるヒーローになるんだって。貴方みたいな自分の体も大事にしないヒーロー馬鹿になったら困るけど、そこは私がうまく導いてあげればいいしね』
「無個性なのか!?　それと、ヒーロー馬鹿は酷くないかい？」
その少年は凄く運に恵まれたな。
『事実でしょ。私の思うヒーローになる条件は諦めない事、個性のあるなしなんて関係ないわ。ただ……心を試すために、ちょーっと意地悪しすぎた気がするけど、それでも彼はヒーローになるって私に宣言したわ。だから私も手伝ってあげることにしたの』
「意地悪と言うのが凄く気になるが……神綺君が認めたのだ、きっとすごいヒーローに

なるだろうな」
　少し先代との事を思い出したよ。
『もしかしたら貴方よりもすごいヒーローになるかもよ？　意地悪した後、彼の心はもっと強くなったし』
「本当にその少年は大丈夫なのかい!?」
　神綺君が心を試すときに手加減する様子が全く浮かばないのだが!?
『大丈夫だったから、弟子にしたのよ。……ちょっと危なかったかもしれないけど』
「最後にさらっと聞き流せないこと言ったね!?」
『何言ってるのかわからないわね』
　白を切る神綺君に思わずため息が出る。
『……あそこまで直向きに頑張ってる姿は、私からしたら少し眩しすぎるけどね……』
「……神綺君？」
　少し力のない声に、何故か胸の奥がざわついた。
『いけない、もうこんな時間ね。次の準備があるから、今日はもう切るわね』
「あぁ……神綺君」
『なに？』
　何かを言わなければいけない。

そんな思いに駆られて、何も考えずに言葉が口に出た。
「私はずっと君の味方だ」
『……ぷっ、なにそれ。いきなりどうしたの？』
クスクスと笑う声に、顔が熱くなるのを感じた。
「いやなに！　なんとなく言いたくなっただけさ！　ＨＡＨＡＨＡＨＡ！」
『変な人……でも、まぁ……ありがと……』
「お、おう」
なんだろうか……何故か心にグッときた。
『それじゃあまたね、おやすみ』
「あぁ、おやすみ」
プツッ、と言う音と共に途切れた携帯を見る。
何故か胸の奥が熱いし、顔も熱を持っているようだ。
「……私は風邪でも引いたのだろうか？」
吹き付ける夜風が凄く気持ちよかった。

神綺君に言われて作った休養日。

あまりにも暇だったので、神綺君が育てている弟子を見に行くことにした。
地図アプリを使って、神綺君が弟子の修行場として使っているという海岸まで来た。
「ふむ……確かこのあたりだったと思うが……」
夕焼けに染まった海岸を見渡すと、端の方に二つの動く影が見えた。
……というか、一つは影そのものだった。
「神綺君の魔法か」
もう対人戦闘訓練までしているのか。
入れ込みようが半端ではないな。
今回はトゥルーフォームで来ているので、誰かに話しかけられることもないだろう。
歩み寄れば、階段に座って少年の様子を見ている神綺君がいた。
「やぁ、神綺君」
「……オールマイト？　もしかして、私の弟子の様子でも見に来た？」
神綺君は私の姿を見ると目を丸くした。
「その通り。それで、彼がそうなんだろう？」
目をやれば、影の攻撃を受け流し、そのまま相手をつかみ取って投げていた。
投げられた影は、空中で身体をひねって体勢を整え、少年へと攻撃を加える。
どちらも動きが似通っている……？

いや、あれは同じ動きではないか？

「どう？　見た感じ」

「影も少年も良い動きだ。力で抑えるではなく、技術で受け流し利用する。合気を交えた総合格闘技か」

「ただのごちゃまぜ流派だけどね。あそこまで混ぜ込んだらもう我流みたいなものかしら？　合気柔術、空手、中国拳法、ムエタイと色々と仕込んだのは私だけど、それを纏めてうまく形にしたのはあの子。すごいでしょ？」

得意げに笑う神綺君に頷く。

「それだけの武術をあの短期間で教え込むとは……彼の才能は相当なものだね」

「……まぁ、そうかもね。彼自身は天才じゃないけど、言葉を借りるなら努力する才能があるのよ」

ドゴンッと言う音と共に、彼と影の拳がぶつかり合い砂浜の一部がはじけ飛び、一方がよろけた。

「まだまだあああ!!」

どうやら押し負けたのは彼の方だったようだ。

動きも大分鈍くなっているが、それでもあきらめずに影へと挑んでいる。

がむしゃらにひたむきに挑戦する姿に、昔の自分を思い出した。

無個性でもヴィランを抑制する正義の柱となる、と決めて走り続けたあの日の私がそこにいるのを幻視した。
「……昔の私を見ているようだ」
「随分高評価ね」
「身体能力も悪くない、技術はまだ粗削りだが小学生であることを考えると驚愕物だよ」
「彼の努力の結晶ね。体には常に負荷をかけて効率的に身体を鍛えてるし、技術においてはスペシャリストがいたからね。技術指導の時間はかなりのものよ。今の彼に勝てる人は、中学生も含めてそう多くないと思うわ」
神綺君の言葉を聞きながら、顎に手を当てながら考える。
神綺君の言葉通りなら、このまま効率よく鍛えて行けば、素の身体能力ならワン・フォー・オールを継ぐ前の全盛期の私を超えるかもしれない。
そんな彼にワン・フォー・オールを渡したらどうなるか……。
見た所、個性がない分より技術を鍛える方針の様だ。
それならワン・フォー・オールを渡しても、その技術をうまく使う事もできるだろう。
神綺君曰く、彼は決してあきらめない強靭な心を持っているらしい。
平和の象徴として……候補の一人になり得るな。
しかし、彼は神綺君の弟子。

何も説明せずに、彼を後継者とするわけにもいかないだろう。
……今はまだ様子見だな。
ナイトアイも後継者候補を探すと言っていたが、まだ連絡はない。
私の怪我も完治しているから、まだまだ時間はたくさんある。
「けど……私でいいのかな」
「うん？」
考え事をしていたら、どこか弱ったような声が聞こえた。
「私はさ、強い個性をもって生まれてきたから、イズくんの様に挑戦したことがないんだ。言ってしまえば私は個性特化型だからね。私よりもずっといい師匠がいるんじゃないかって思うの」
技術指導すらも個性任せだからね、と弱々しい笑みを浮かべる神綺君に内心で驚く。
正直、個性特化型とは言え君は素でも強いと思うのだが。
そんなことを思ったが、初めてしっかりと聞く彼女の弱音を黙って聞く。
「オールマイトは戦闘経験も豊富だし、あぁ言った武術に関しても自分の経験を教えられるでしょ？　その言葉にはちゃんと重みがある……けど私の言葉にはそれがない。だから彼の師匠でいてもいいのかって思うことがあるの」
はぁ、とため息をつく神綺君に私は思ったことを言う。

「君は弟子の事をすごく大事に思っているじゃないか」
「え？」
　きょとんとした顔で私を見上げる神綺君に笑ってやる。
「だから彼は君の教えを忠実に守っているのさ。そうして弟子の事を大切に思ってくれる師匠だからこそ、文句なんてでないのだろう。事実そうして彼は強くなった。そしてこれからも彼は強くなる。それでも不安に思うなら聞いてみればいいさ」
　にっこりと笑って親指を立てた私を見て、神綺君は呆れたように笑う。
「ふふふ、聞けるわけないでしょ。あの子ならどういうかわかるもの」
「ならば、神綺君も彼を信じるのだ」
「……良い弟子は師を育てるってやつかしら」
「そういうものだ」
　私はまだ弟子を持ったことないからわからないがな！
　最後の最後で情けない事を思いつつも、地平線へと落ちようとしている夕日を見る。
　修行もそろそろお開きだろう。
「……愚痴……聞いてくれてありがと」
「何か言ったかい？」
「なんでもないわよ」

べっと舌を出して笑う彼女は、どこか子供の様だった。

第五話　僕と師匠とオールマイト

僕が師匠こと神綺さんに弟子入りして半年以上が立つ。

……まだ半年しか経っていないんだね。

僕的には半年どころか数年以上修行している。

何せ僕の師匠の個性は非常に万能だ。

攻撃、防御、支援、治癒、幻惑、変化などなど、本当になんでもござれな個性だ。

僕はこの個性なら、個性を作ることも可能なんじゃないかと思っている。

魔法っぽい事ができる個性にしては、用途が広すぎるし、そのデメリットも見たことがない。

動画に映っていた空港火災の時には巨大な魔法陣を構築、炎と黒煙を消して、人を転移で助ける。

つまり、建物の構造を把握し、火元を検知し、人の居場所を探り、保護し、転移させるという効果を一つの魔法陣で行っていることになる。

師匠が使う魔法陣はいつも同じ陣で、効果が変わっても陣に変化はない。

このことから、師匠は個性を偽っていると推測できる気がする。

……まぁ、それはどうでもいいんだけね。
出会った時は心をバッキバキに折られたけど、心をより強くすることができた。
それで師匠が僕を認めてくれて、こうしてヒーローになる為に鍛えてくれている。
……鍛え方が半端じゃないけどね!!
現実世界では学校が終わったら砂浜へと向かい、そこで僕の影と延々と組手をする。
基礎鍛錬の時間が全くなくなったからどうしてかと聞いてみると。
「基礎鍛錬が必要ないくらいに実戦をやればいいから大丈夫」
それって大丈夫じゃないです師匠。
組手の時も僕には全身に5kg以上の負荷がかかっている。
対して僕の影にはそういった負荷がないから、僕よりも動きが早い。
僕はより技術を研ぎ澄ませなければならない。
そうすると更新したばかりの時は、影と僕の力量は完全に同じになるので負荷がかかっている僕が不利。
けど、諦めずに何度も挑戦する。
力を使い切ったときにこそできることもあるのだ。
事実そうして、何度か乗り越えてきた。
そうして学校が終わってから、日が沈むまで組手を行った僕は、師匠に勉強をするく

らいの体力を回復させてもらって宿題を終わらせる。
夕ご飯は、師匠が僕のお母さんに頼んだレシピ。
力をつけるために肉を多めにして、野菜もしっかりと取る。
お母さんと今日の出来事や師匠の修行の話をして、お風呂で疲れをとって就寝。
だけど、僕の修行はここで終わりではない。
「では始めようか」
「よろしくお願いします！　先生！」
師匠が夢の中に来て、先生を呼び出し技術指導に入る。
最初は柔術の達人の先生だ。
名前と流派は教えてもらえなかった。
けど、指導は凄まじい。
最近は終始先生との組手で終わる。
師匠が作った夢の世界では、現実と同じように疲れたりする。
しかも時間の操作もできるのか、何日もここで修行している気がするのだ。
「お疲れ様、今日はゆっくりと……休めたらいいね？」
「先生……そこは言い切ってほしいです」
そんな言葉と共に、柔術の先生が消えて、新しい先生が現れる。

「お、今度は俺の番か。んじゃ、早速やるぜ出久」
「はい！　よろしくお願いします！」
今度は空手の達人。
顔に大きな傷があって、見た目は怖い人だけどなんだかんだで優しい先生だ。
この人以外にも、アパアパ言うムエタイの達人。時折師匠にエロいことをしようとする、あらゆる中国拳法の達人。武器の使い方や対処法を教えてくれるくノ一みたいな恰好をした武器の達人。そして、その全ての武術を修めたどこか気弱だけど、親身になってくれる武術の達人が僕の組手の相手をしてくれる。
夢の中でこの人たちの指導をそれぞれ二回ずつ受け終わったら、意識が暗くなる。
そうして起き上がったときには、疲れは綺麗さっぱりなくなり、夢の中で鍛錬したことで僕の技術は、師匠の個性によって僕の体へとしっかりと反映される。
僕にとって一日は２４時間じゃない、どれくらいの時間を技術指導に当ててるかは知らないけど
そんな反則的なことを可能とするのが僕の師匠なのだ。
修行の一幕をオールマイトに言うと、一筋の汗を流して師匠の方を振り返って指さした。

「道理でこの短時間で技術の成長が凄まじいと思ったよ……やりすぎだぞ、神綺君!!」
「無個性がヒーローを目指すなら、武術の達人にならないとだめじゃない？」
　師匠は何がおかしいの？とでも言いたげに首を傾げている。
「緑谷少年の精神が既に小学生の域を脱しているのだが!?」
「そりゃあ夢での修行時間も計測するなら既に１８歳くらいにはなってるからね」
「あ、だから最近大人っぽくなったね、とか言われるんですね」
　僕の発言を聞いたオールマイトが、師匠の肩を掴んで顔を近づけた。
　わわっ、顔が凄く近いよオールマイト！
「君いいい!!　緑谷少年のお母さんに謝りに行きなさい!!」
「顔が近い。とっくに挨拶に行ったわよ。イズくんが明るくなったし、毎日楽しそうってお礼言われたわ」
「ンゥゥゥゥ～～！　私か!?　私がおかしいのか!?」
　ぐいっと近づいた顔を押し返されて、オールマイトは頭を押さえて天を仰いだ。
　きっとオールマイトは可笑しくないと思うけど、これも僕が望んだことだ。
　師匠はその手伝いを個性を使って最大限してくれてるんだ。
　……先生たちには武術の才能はあまりないって言われたけど、先生たちの弟子ほどじゃないんだって。

そのお弟子さんも達人となったらしいから、その人よりも恵まれてるならあきらめるわけにはいかないよね。
「けど、あくまで組手でしかないから、実戦経験がないのよね。実力は既に準達人級になってるから、少なくとも中学、高校でうまく立ち回れば個性持ちを相手にしても負けなしで居られると思うわ」
師匠の言葉に僕は目を丸くした。
「僕ってそんなに強くなってるんですか？」
「イズくんは既にコンクリートくらい簡単に粉砕できるでしょ？　他の人たちから見たら増強型の個性を使っていると思われるんじゃないかしら」
「……実際そう見えるだろう。私は今日の緑谷少年の動きを見て、個性に目覚めたのかと思ったからね」
オールマイトがハァァァァと、大きくため息をついた。
師匠はオールマイトの言葉を聞いて頷いた。
「そっか、ならもう大丈夫ね」
「え？」
大丈夫？もしかして、ここで師弟関係の終わり!?
「い、嫌です師匠!!　僕はまだ師匠に鍛えてもらいたいです!!」

「あ、ごめん。そういう意味じゃないわ。技術試験みたいなものよ」
師匠は立ち上がると、波打ち際に立った。
「オールマイト」
「なんだい？」
「貴方は海を割れるわよね？」
師匠の言葉を聞いたオールマイトは納得したように頷いた。
僕には何のことかわからない。
「見せてやればいいのかい？」
「えぇ、お願い」
「ＨＡＨＡＨＡ、お安い御用だ。緑谷少年！　よく観ておくことだ！」
「え？　は、はい！」
よくわからないけど、オールマイトは海へと入っていき、水が腰くらいまで来たところで止まった。
「……身長高すぎ……遠過ぎて見づらいわよ。オールマイト!!　少しそこで待ってて！」
「了解した！」
「イズくん、私の後についてきてね」

「わかりました」
師匠は僕が頷いたのを見てから、海を歩く。
僕もその後に続くと、師匠と同じように水面を歩くことができた。
……師匠といると、驚きへの耐性がどんどん上がっていく気がするよ。
「……ずるくないかい？」
「普通に来たら首まで水に浸かるわ！　アンタがでかすぎるのが悪い」
「理不尽な!?」
「相変わらず仲がいいですね、師匠たち」
きっとこれが夫婦漫才って奴なんだね。
「これならよく見えるわよね？」
「はい、大丈夫です」
「よし、じゃあやって見せて」
「任せたまえ」
オールマイトはゆっくりとした動きで、拳を動かして海を割った。
１５ｍ先まで海を割って、海底まで見えた。
あんなゆっくりとした動きでこんなことができるなんてすごい!!
「わきゃあ!?」「うわっ!?」

なんて感心している場合じゃなかった。
海の上に立っていた僕と師匠は割れた海が元に戻ろうとする水流に足元を流されて水の中に落ちた。
「おおっと!?　大丈夫か君たち!?」
海に落ちた僕たちは、すぐさまオールマイトに抱き上げられた。
「ごっほ、ごほっ！　ぐっ、迂闊だった……！　水の上を歩くんじゃなくて、魔法陣の上を歩くべきだったわ」
「神綺君にしては珍しい失敗だね？」
「うるっさい。ごめん、イズくん。大丈夫だった？」
「大丈夫です」
そうして、オールマイトに運ばれて僕たちは砂浜に戻ってきた。
「はぁ、濡れちゃったわね」
「……私は謝っておくべきかね？」
「そんなわけあるか。私のミスよ」
師匠は水が滴る髪を後ろへとかき流した。
「イズくん、何が試験かわかった？」
「はい！　あのぎ、じゅつ……を……」

師匠の問いに答えようとして、言葉に詰まった。
師匠の着ている白いワイシャツが、海水の所為で肌に張り付いて透けていた。
白い綺麗な肌に、薄いピンク色のブラが大きすぎない胸を強調している。
思わず、それをぼーっと眺めていた。
「どうかしたの？」
「緑谷少年？　……ぶはっ!?」
僕の視線の先を追ったオールマイトが噴出して、視線を空へと向けた。
僕もようやく理解が追いついて、顔が赤くなるのを感じて、目を逸らした。
「し、神綺君!!　し、下着が透けているぞ!!」
「え？　あぁ……なるほど……」
足元で魔法陣が展開されるのを感じた。
それと同時に、僕の服が海に落ちる前と同じ状態に戻った。
「もう大丈夫よ」
「そ、そうですか」「そ、そうか」
オールマイトを横目で見てみると、顔が赤い。
きっと僕も同じように赤いんだろうな、と思いつつ師匠を見ると、先程まで透けて見えていた下着と肌は見えなくなっていた。

つい視線が胸に向かっていることに気が付いたのか、師匠が胸を手で隠すような仕草をした。

「……えっち」

「「ぐふっ」」

思わず僕は手と膝を地面についていた。

すごい破壊力だった。

隣を見れば、オールマイトも同じような格好で項垂れている。

そんな僕たちがおかしかったのか、師匠がクスクスと笑っていた。

「ほら、今回は事故だったから気にしないで？　私もちょっと油断してた、ごめんね？」

そう言って、僕たち二人に手を差し出す師匠は女神か何かですか。

中国拳法のエロ先生と過ごした事と精神年齢だけは上がってる所為で、意識してしまって凄く恥ずかしい。

手に付いた砂を払って師匠の手をとって立ち上がる。

大丈夫、さっき見たことは脳内に永久保存した。

ごめんなさい師匠。

「いえ、僕もすいませんでした」

「すまない神綺君、配慮が足りなかった……」

そんなことを思いつつも、師匠に頭を下げると、オールマイトも同じように頭を下げていた。
なんか、僕とオールマイトって似ているのかもしれない。
「ほら、もういいから。……なんだかんだで君達も男の子だね……」
師匠は聞こえない様に呟いたつもりかもしれないが、ばっちりと聞こえた。
また膝から崩れ落ちそうになるが、ぐっと堪える……けど膝が震えてる。
似てるかもしれないと思ったオールマイトに目をやれば、いつも通り笑みを浮かべているけど、膝が震えてた。
やっぱり僕たちは似ているのかもしれない。

気を取り直して、先程見せてもらったのは水切りと言う一つの技術らしい。
やり方は自分で模索する事、期限は1週間。
その間は修行を少なめにすることになった。
師匠とオールマイトの会話を聞いた所、僕ならできると判断されたんだろう。
技術試験と言う事は、身体能力はあまり関係ないはず。
オールマイトの動きはゆっくりだったし、力をうまく伝播させる方法があるのだろう。

それを会得するのが今回の試験という事かな？
師匠曰く、この試験をクリア出来たらご褒美があるらしい。
……エロ先生とさっきの師匠の姿の所為で煩悩が……
エロ先生には会ったら文句を言っておくとして、今は水切りに集中しなくちゃ。
オールマイトも手本ならいつでも見せると言ってくれたから、遠慮なく見せてもらおう。
さて、今日もまた頑張ろうかな！
後、どうでも良い事だけど、エロ先生にその事を話したら滂沱の涙を流して悔しがっていた。

第六話　イズくんとかっちゃん

ω月Π日　おめでとうイズくん
イズくんが技術試験最終日に水切りに成功した。
いやぁ、すごいね。
無茶振りかなって思ってはいたけど、彼ならきっとできるって思ってたよ。
水の中と言う事でいつもより疲れたと思うけどお疲れさまだね。
さて、試験を突破した彼に、個性を上げようと思う。
正直な話……魔改造やりすぎたかもしれない。
彼に渡すつもりの個性を纏めておこう。
個性名は心力強化
効果は、強い思いに呼応して身体能力を強化していくこと。
通常発動でも出力は２倍以上。
強い思いを込めれば１０倍以上の力を発揮することもできるはずだ。
彼にぴったりだと思うんだよね。
誰かを守りたいって強く思えば、その分身体能力が強化されるわけだし。

ある意味、ワン・フォー・オールにも似てるかもね。
けど、やっぱりデメリットもあるわけで……強化すればするほど疲れるって所だね。
なれてない状態だと１０分が限界かな。
そこは使い続けて慣らしていくしかないけど。
……正直、オールマイトといい勝負ができるんじゃないかなと思ってるだけど、どうかな。
今度オールマイトに組手を頼んでみようっと。
後、俺の本当の個性の事も教えておこう。

○月―日　マジか
イズくん、君すごいね。
中学に入って最初の身体測定でぶっちぎりの一位をとったようだ。
その所為でかっちゃんに喧嘩を売られて、つい無力化してしまったらしい。
それからは毎日襲い掛かってくるそうだ。
……原作見てた時から思ってたけど、彼の言動はホントにヴィランよりだよね。
ヒーロー目指してるのに、それでいいのかな。
それにイズくんの身体能力は大分高くなった。

その技術も既に準達人級になっているイズくんに勝負を挑むなんて、かっちゃんがいくら天才的とはいえ、素人では勝てるはずもない。
これは油断でも傲慢でもなく、ただの事実だ。
何せイズくんには個性なしでも戦える様にと武術を仕込んだ。
更に言えば、特A級の達人達に武術を伝授されて、その達人たちに認められているんだ。
精神的にも成熟しているイズくんが、今更子供の脅し程度で怯えるとは思えない。
結果、イズくんが負ける要素はゼロ。
これを機に、かっちゃんも変わってくれるといいけど……まぁ、それは私が考える事じゃない。
かっちゃんが勝手にどうなるかは、かっちゃんしだい。
俺が踏み込む様なことじゃないね。
そういえば、オールマイトとの組手についてはまだ書いてなかったかな。
見返したら書いてなかったので、書くことにした。
結果だけ言うなら、まぁ当然負けた。
平和の象徴は伊達じゃないし、読み合いでもかてないだろうし。
ただ、オールマイトからの評価は凄く高かった。

本人曰く、出力６０％で戦っていたらしい。
最初は２０％くらいでいいと思ってたらしいから、評価としては絶賛に近いだろう。
中学生になったばかりのイズくんが、オールマイトに６０％も力を出させるなんてやるね。
個性も与えてまだ数カ月程度だけど、特Ａ級の達人にならった技術はちゃんと活かすことができているみたいだ。
これなら、あの達人達にも褒められるだろうね……まぁ、素直に褒めてくれるかはわからないけど。
個性もまだ使うことに慣れてないだろうし、イズくんはまだまだ発展途上。
身体もまだ大きくなるだろうし、彼が高校三年生くらいになればオールマイトも全身全霊で戦う相手になるんじゃないかな。
高校三年生でオールマイトに全力を出させるってすごいよね。
彼はもっと強くなる。
だから頑張ってねイズくん。
『Ｐｌｕｓ　ｕｌｔｒａ！』だよ。

？月☒日　　なんかきた

イズくんが走ってきたと思ったら、その向こう側から汗まみれで猛ダッシュしてきた少年が、目の前で倒れるようにして崩れ落ちた。
慌てて調べて見たら酸欠だった、しかも意識がなかったので速攻で回復させた。
聞けば、イズくんを追って最初から全速力で走ってきたらしい。
デクに負けるかぁぁ！と叫びながら、意地で追いかけてきたようだ。
いや、まぁその叫びは俺に届くくらい魂の籠ったものだったけどね。
常に体に負荷をかけて鍛錬してきたイズくんを追いかけるなんて凄い執念だね。
イズくんって自動車並みのスピードで流すように走るのに。
で、この負けず嫌いの彼は予想通りかっちゃんだった。
酸欠になるまで走り続けるなんて凄い執念だ。
うーん、彼も鍛えてみようかな……イズくんをライバル視……って言うより敵視してるみたいだけど、イズくんのいい刺激になるかも。
そう思って提案したら、苦虫を噛み潰したような顔でお願いしますって頭下げた時は目を疑ったよ。
彼の身体能力値をデータ化してみたら、凄まじかった。
どうやら、イズくんを鍛え始めた時から鍛錬を繰り返してたみたいで、基礎修行は必要なさそうだった。

なので、早速１ｋｇの負荷をかけて、爆豪くんの影と個性なしの対人戦闘訓練をさせた。

彼は天才だった。

少し影と戦って自分のくせに気が付いたみたいで、あっという間に自分の欠点を修正、影を打倒した。

１ｋｇの負荷を全く物ともしていない。

その後、２ｋｇ、３ｋｇと増やしてみたけど、全戦全勝。

確かに周りの事をモブっていうだけのセンスがある。

最終的に５ｋｇの負荷で影に負けたけど、イズくんの時の事を考えると凄まじい。

イズくんの様子を見たけど、やっぱり流石だなっていう気持ちはあったみたいで驚いてはなかった。

けど、こっちも負けるかとばかりに影を打倒していた。

ちなみにイズくんの負荷は全身３０ｋｇだ。

しかし……どうしようかな。

彼の性格的に、合いそうな師匠が思いつかない。

イズくんは身体能力を強化するっていう増強型の個性だからそのまま武術を修めさせたけど、彼の個性は爆破。

正直、どう鍛えていいかわからない。
今しばらくは、そのまま影と戦ってもらおう。
かっちゃんはホント化け物レベルの才能の持ち主だよ。

？月！日　かっちゃんワラエナイ
かっちゃん凄まじい。
あれからかっちゃんの対人技術が凄まじい事になってる。
個性ありの戦闘にしたらもっとワラエナイ。
片方だけ爆発させて空中での旋回力と衝撃力アップ？
なんでそれでバランス崩さないの。
っていうか、最近戦闘場所が徐々に空中になりつつあるんだけど。
影じゃあっという間にやられてしまうので、ドッペルゲンガーに作り直した。
全ての能力が常に更新され、実力は常に拮抗する。
それはまさしく、影ではなくもう一人の自分だ。
かっちゃんが負ける時もあるが、ドッペルゲンガーが負ける時もある。
この子、師匠いらないんじゃないかな。
勝手にどこまでも上り詰める、恐ろしい天才だ。

たまに違う対戦相手と戦うフィールドを用意するだけで良いなこれ。

そして、イズくんも影ではなくドッペルゲンガーと戦うようになった。

イズくん、なんだかんだでライバル視してるのかな。

頑張れイズくん。

一番弟子として負けるなよー。

それとかっちゃん、雑魚でいいから対多戦をしたいって……君すごい上昇志向だね。

囲まれた時の判断力を上げたいとか……ほんとに私ただのステージ準備係にされてるよ。

▼月▽日　色々あったけど

今日は一言だけ、救けてくれてありがとう、オールマイト

ーーーーーーーー

あいつは無個性だったはずだ。
役に立たねぇ『デク』がいつの間にか、俺よりも先を走ってた。
クソがッ！
なんでテメェが俺の前を走ってやがる！
ふざけんじゃねぇ!!
俺の前を走るな！
そう思って、デクに喧嘩を売ったこともある。
……情けねぇ話だ……俺はデクに負けた。
最初は個性を使わないで、殴りかかった。
けど、俺の攻撃は全部見切られて、掠らせることもできなかった。
ふざけるな、ふざけるなふざけるな!!
デクは俺の中で一番凄くない奴だった。
おどおどして、身の程知らずにもヒーローになりてぇなんて思ってる馬鹿な奴だと思ってた。
それがどうだ。
馬鹿だったのはどっちだ。
個性も使った。

今までと違って全く加減なしに使った。
……それでも届かなかった。
気が付いたら俺は保健室で寝ていて、大々的に個性を使ったことを怒られた。

それからデクに喧嘩を売る毎日が続いた。
俺はデクを観察した。
デクが何らかの武術を使っていることはわかった。
けど、その技術の練度がおかしかった。
あんな風にできるくらいあいつは強かったか？
身体能力で負けた。
喧嘩で負けた。
学力で負けた。
気がつけば俺はあらゆる面であいつに負けていた。
俺とあいつの立場が逆になっていた。
……許せねぇ
放課後になってあいつの後をつけようとしたら、自動車並みのスピードで走っていった。

速さが必要だ。
あいつに追いつけるくらいの速さが。
許せねぇ
その日から、俺は走りまくった。
家から学校まで毎日ダッシュして、帰りも同じようにダッシュする。
より早く走れる方法が必要だ。
本で、ネットで一番効率のいい走り方を調べて実施した。
許せねぇ
学校から走り去っていくデクを追いかけた。
体力が足りず、途中でバテて見失った。
全速力で走り続ける体力が必要だ。
毎日走った。
いつものようにダッシュで学校に向かい、走り去るデクを追いかけ、見失ったら日が暮れるまで走る。
速さも体力も足りない。
飯は体力と筋力をつけるための食事に変えてもらった。
そうして、毎日を繰り返した。

デクには依然として追いつけない。
けど、どうにか付いていけるくらいにはなっているが、体力が足りずに見失っちまう。
それが許せねぇ。
あいつはいつから、あんな風になった。
いつの間に追いつかれて、追い抜かれて、置いて行かれたんだ。
まるで『うさぎとカメ』みてぇだ。
俺は、自分はすげぇって思っていて、あいつが走っているのを見逃したのか？
いつの間にか、追いついていて、追い抜かれて、姿が見えないくらいに遠くなっていた。
調子に乗って負けている自分が、何よりも許せねぇ！

だから負けねぇ。
そこをどけ、デク！
テメェに負けていられねぇ!!
俺はＮｏ．１ヒーローになるんだ!!
テメェにも、オールマイトにも、神綺にも、ヴィランにも！
誰にも負けたくねぇ!!

まずは最初にテメェだ!!
その次に俺よりも前を走っている奴らに追いついて、追い抜いてやる!!
俺が！　一番になってやる!!
だから、いつまでもデクに置いて行かれるわけにはいかねぇんだよ!!
「待ァァちやがれエェェ!!!　デクゥゥゥウ!!!」
俺が追いかけているのに気が付いてたはずだ。
デクは俺を振り返ると、汗もにじませない顔で言い放った。
「僕は君に負けたくない」
そうして、デクはまた前を向いて走る。
いつものと同じペースだ。
テメェはもっと早えだろ、なんだ調子に乗ってんのか!?
それとも追いついて見せろとでも言ってんのか!?
フザケテンジャネエゾ、デク!!
「デクに負けるかあああああああ!!!」
心臓がバクバクいってる。
足も動かすのがつらい。
だが、あいつがそこにいる。

そこで待っている。
俺はようやくあいつの背中に追いついて、気を失った。

そうして、俺は神綺……チッ、師匠の二番弟子になった。
いつか追い越す相手だが……師匠……の修行は俺にはちょうどいい。
最初は身体能力だけの対人訓練だったが、今では相手は俺自身。
自分自身を乗り越えて行けば、俺はもっと強くなれる。
師匠の回復能力が反則級のおかげで、個性で怪我してもすぐ治療して、再度訓練を積める。
影による一対多の戦闘訓練も積める。
こればっかりは他の連中にもできない事だろ。
……まぁ、一応感謝はしといてやる。
俺は強くなる。
だから、デク!!
覚悟してろ!!
すぐに追いついてやるからな!!

第七話　アリスの叫び

走る。
口を思いっきり噛み締めながら、今までにないくらいの速度で私は走っている。
そのはずなのに、いつもよりも遅く感じる。
いつもの笑みすらも浮かべることができず、気が付かなかった自分への怒りが募る。
なぜ気が付かなかった。
何という失態！よもや頭を潰されて生きているとは……!!
だが今、そんなことはどうでも良い。
今はなによりも早く神綺君の元へ行かねば!!
「待っていてくれ、神綺君!!」
神綺君の異変に気が付いたのは、情けない事に私がいつものように電話をかけてからだった。

いつものように私は神綺君へ電話をしていた。
今日は忙しいのか、珍しく電話に出るのに時間が掛かっている。

これ以上のコールは迷惑だなと思い、電話を切ろうと思ったら通信が繋がった。
「やぁ、神綺君。今日は忙しいのかい？　忙しいならまた今度電話するが」
『……』
「神綺君？」
通話口の向こうで、神綺君の雰囲気がおかしいのに気が付いた。
「神綺君、どうした？　なにかあったのかい？」
『……おー…る、まいと……』
ようやく聞こえた声は、弱々しく怯えと不安にまみれた泣き声だった。
その声に、私は思わず走り出していた。
「神綺君、私の拠点に来られるかい？」
できるだけ優しく、ヒーローオールマイトとして力強く声を掛けた。
『……や、だ……いま、あいたく、ない……』
「駄目だ。こないなら私が向かう。今どこにいるんだい？」
『……』
神綺君は黙り込んでしまった。
あの彼女がこんなにも怯えるとは……一体何があったと言うのだ。
彼女がどこにいるかわからない。

もし海外なら空間移動系ヒーロー事務所に出向いて、転移させてもらおう。
それなら、一度私の事務所に向かった方が良いな。
何があってもすぐ動けるように頭で次の行動を纏めつつ、神綺君に声を掛けようとし、聞こえた言葉に考えていたことが全て吹っ飛んだ。
『……おーる…ふぉ、わん……に、あった……』
「……生きていたか……ッ!!」
思わず携帯を握りつぶしそうになったが、何とか湧き上がる気持ちを抑える。
オールフォーワンの事も一大事だが、今は神綺君をどうにかしなければと言う思いが強かった。
『わたしの、せいで……ひと、がしん……じゃった……ッ!!』
嗚咽交じりのその言葉に、頭をガツンと殴られた気分になった。
オールフォーワンは恐らく、自身の体を治すように神綺君に迫ったのだろう。
そしてそれを断った神綺君への報復として、どこかに襲撃を掛けたか!!
『もっと、よくかん、がえていれば……きっと、しな、せない、です、んだの、に……っ……ご、めんな、さいッ……ごめんなさっ……』
「神綺君!　今どこにいる!?　今一人になってはっ……クッ、通話がっ!!」
私が言葉告げる前に、通話が切れた。

このまま彼女を放っておいたら、取り返しのつかないことになる。
そんな予感に駆られて、私はすぐさまナイトアイへ秘匿通信を繋いだ。
『どうしました、オールマイト』
「すまない、私の通話記録から神綺君の居場所と転移できる空間操作系ヒーローを調べてほしい」
『わかりました。少し待ってください』
少しの無言の後、再び彼の声が聞こえた。
『それで一体どうしたんです？』
「オール・フォー・ワンが神綺君に接触した様だ」
『なっ!?　奴は2年前に倒したはずでは!?』
「どうやら生きていた様だ。ナイトアイ、何処かでヴィランの襲撃があって死傷者が出たと言う情報は上がってないかい？」
『あの糞共がッ……少し待っていてください……ありました。広島の病院がヴィランの襲撃を受け、死者が5名負傷者が多数出ています。負傷者は、襲撃直後に駆け付けた神綺さんによって治療済みの様です。その後、神綺さんは姿を消したようですが……』
「……そうか、やはり……」

『オールフォーワンが絡んでこれだけの被害で済んだのは奇跡的だ。彼女はよくやったと思います』
「私もそう思うが、神綺君は大分ショックを受けた様だ」
死者五名
オールフォーワンによるヴィランの襲撃を受けたにしては、被害は少ないほうだ。
恐らく、神綺君は死んでいく様を見せつけられたのだろう。
【これは貴様の選択の所為だ】と言わんばかりに。
『発信場所がわかりました、データを送ります。この距離なら、転移系ヒーローを呼ぶより、貴方が走った方が速い』
「ありがとう、ナイトアイ」
『これくらい当然の事です。神綺さんをよろしくお願いします』
「あぁ！」
通話が切れて、すぐさまデータが送信されてきた。
その住所を確認した私は、高く跳躍して空中を蹴って走り出す。
一人で抱え込まないでくれ、神綺君!!
会いたくないと言っていたが、確かに聞こえたのだ。
その言葉に隠れていた【救けて】という君の声が！

大事な人一人救えないで何がヒーローか！
十数分で私は彼女がいる拠点へと駆けつけた。
すぐさま扉を開け放ち、笑顔を意識して暗い部屋の隅で蹲っている神綺君を見て、いつものセリフを言い放つ。
「もう大丈夫！　なぜかって？　私が来た！」
「……なんで、きたのよ……ばか……あいたくないって言ったでしょ……」
顔を上げずに、弱々しい憎まれ口をたたく神綺君に笑って見せる。
「ＨＡＨＡＨＡ！　もちろん聞いたさ！　君の救けてっていう声をね！」
神綺君が膝に押し付けていた顔をわずかに上げた。
彼女の瞳は感情を良く映す。
その涙に濡れた瞳に映る感情は、後悔、恐怖、怯え、不安、罪悪感、苦しみが見える。
「神綺君」
「……あ、いや、ちかづか、ないで……」
神綺君へ歩み寄ると、私から離れる様に動くが、それよりも早く神綺君の手を取った。
「……おねがい、さわら、ないで……あなたが、よごれちゃう……」
弱々しい力で、離れようとする神綺君の手を痛くない程度に強く握った。
「神綺君、君は汚れていない。悪いのは全てオール・フォー・ワンだ」

「……」

「話してくれないか？　君に何があったのか」

神綺君は私から目を逸らすと、小さく語り始めた。

「病院に爆弾を仕掛けた、爆破されたくなければ指定の場所へ来いって手紙を渡されたの。そこに行くと、黒霧っていう転移系個性を持ったヴィランにオールフォーワンのいる場所へ送られた」

何故大人しく着いて行ったのだろうか？

彼女の本来の個性なら、それだけの時間があれば爆弾解除など容易だっただろう。

「……馬鹿だったの。私は自分の個性を過信しすぎてた。いくら個性が強くても、私自身は強くないのに、強くなった気でいたんだ。オールフォーワンのいる場所についてから、私は酷く精神的に追い詰められて……もしかしたら、精神干渉系の個性持ちに攻撃を受けてたのかもしれない。今なら冷静に回る頭も、その時はまともに動いてなかった」

ギリィと歯を噛み締める音がする。

「オールフォーワンはオールマイトを治療したのが私だと知っていて、同じように治療をさせようとした。私はそれを咄嗟に拒んだ。そしたら、病院の看護師の頭が吹き飛ばされる映像を見せられて、よりにもよって思考を止めてしまった」

握っている手に力が入るのを感じた。
私は黙って神綺君が続きを語るのを待つ。
「私が呆けてる間に二人、三人と殺された。そこで正気に戻った私は、すぐさま映像の病院に転移して、場に干渉、病院関係者１２３名に埋め込まれていた小型爆弾を即座に無効化して、襲撃してきたヴィランを撃退。負傷者を治療して今に至るっていう訳……そして……死んだ人は生き返らせなかった」
「……そうか」
私の言葉にビクっと震えた。
「軽蔑したでしょ……私は……死者の蘇生は絶対にしないっていう私のルールを守るために、私の所為で死んだ人たちを見殺しにしたの……いいえ、私が……殺したようなものよ。今考えれば、連れていかれる前に本来の個性で病院を調べるべきだった。爆弾を無力化しておくべきだった。なのに私の慢心はよりにもよって最悪な形で思い知らされた！　私本人ではなく、他の人たちの命によって!!」
彼女は顔を上げて、悲痛な叫び声をあげて私を見る。
「オール・フォー・ワンが憎い。私本来の個性を使えば今すぐ殺すことができる。消すことができる！　それなのに、私は自分で誰かの存在を消すのが怖いなんて思ってる!!　ばかだ……大馬鹿なんだよ私は!!　なんでこんな個性を持って生まれてきたのって！

この個性のおかげで、私はこうして生きてきたのに、この個性がなければなんて思って、責任転嫁して現実逃避して！　今から私の個性を消し去ったって、私は絶対に後悔する。今までの自分を作ってきたのは、この個性だ！　多くの命と人生を助けて来れたのもこの個性のお蔭で、オールマイトを助けたのもこの個性、イズくんを強くできたのもこの個性!!　私自身は何もしていない！　ルールを曲げることで理不尽に奪われた命を、人生を救う事ができるのに！　……それなのに……私は……自分で決めたルールを曲げられない……曲げたくない……」

その叫びは、神綺君の心の吐露だった。

大きすぎる力に振り回され、彼女は叫んでいるのだ。

ヒーロー神綺ではなく、想現アリスが苦しんでいるのだ。

個性で何かをなすのではなく、想現アリスが何かをなしたいと。

彼女は疲れたように、項垂れる。

「……私の……いえ、個性の力を使えば、オール・フォー・ワンはいなくなる。ヴィランによる犯罪も、世界から戦争だって消せるわ。争いのない平和な世界。『悪』がなく『善』しか存在しない、そんな荒唐無稽（こうとうむけい）の理想郷を作ることができる。……ねぇ、オールマイト……そんな世界になってほしい？貴方が願うなら、それを叶えてあげる……私はもう、疲れた……」

儚く笑いながら言う彼女の言葉に私は……。

「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ!!」

大きく笑って見せた。

突然笑い出した私を、神綺君はぼーっと見ていた。

私はトゥルーフォームへと戻り、そんな神綺君……いや、想現アリスを私は抱きしめた。

「アリス君……これはオールマイトではなく、八木俊典として言わせてもらうよ」

腕の中にいるアリス君がビクッと震えた。

「オールマイトの人生は確かにアリス君の個性に救われた。だけど、私は個性だけに救われたわけじゃないんだ」

あの時を思い出す。

確かに彼女の個性はオールマイトとしての私の人生を救ってくれた。

だが、その個性だけではできないことだってあった。

「私はアリス君の言葉にも救われてるんだ」

「……うそ……わたしはそんなことしてない」

即座にとんできた否定の言葉に思わず苦笑する。
そんな彼女をなだめるように、髪を撫でた。
『貴方の人生を救けてあげる』そういってくれたじゃないか」
「だから個性で救けて「違うんだよ、アリス君」……何が違うの……？」
アリス君が私を見上げてくる。
「私の『心』を救ってくれたのは『君の言葉』だ」
「……」
「私だけじゃない、緑谷少年だって『君の言葉』を受けたからこそ、強く強靭な『心』を持つ事ができた。それは君の個性は関係なかったはずだ」
「……そう……かも、しれない……けど……」
私の言葉に彼女は戸惑ったような顔をし、私はそれに苦笑した。
「だから、改めて言わせてくれ。私を助けてくれて、ありがとう。アリス君」
「……」
「そして、理想郷の事だが」
何も言わないアリス君にそのまま言葉を続ける。
「君一人で世界を背負う必要はない！　私がいる！　緑谷少年がいる！　他のヒーローたちもいる！　君一人でも世界を変えられるかもしれない。だが私達だって力を合わ

せれば世界を変えることができる！」
「……でも、私一人の方がずっと早く……」
「それは否定しない、いやできない」
確かに彼女が力を使えば、一瞬で平和になるだろう。
私はヒーロー失格なのかもしれない。
たった一人の心を救うために、犠牲者が出るかもしれない未来を容認するのだから。
「だからアリス君、私達がより早く理想を実現できるようになるために、サポートしてくれ。君がオールマイトの人生を救け、より強く立ち上がれるようにしてくれた。緑谷少年が不屈の心を手に入れ、立派なヒーローになれるように導いてくれたように」
「……おーるまいと……」
「君一人で辛い思いをしなくていい。君一人で世界を背負わなくていい。私達にも世界を背負わせてくれ」
私の言葉を聞いて、アリス君は額を押し付けてきた。
「……なんだそれ……サポートしろとか、導けとか……そんな大層な役、私にできるかっての……」
「君にしかできないと、私は思っているがね！　ＨＡＨＡＨＡＨＡ！」
笑いながら、私よりも小さな体を抱きしめる。

「……私は、私のルールを変えられない……」
「それでいい。死者蘇生なんて神の領域だ。侵すべきじゃない」
「……ヴィランと積極的に戦おうって思えない」
「構わない。先ほども言っただろう、私たちのサポートと若い世代を導いてくれればいい」
「……オール・フォー・ワンとの戦いで、貴方や他のヒーローがまた大怪我したり……死んじゃうかもしれない。私なら誰も傷つくことなく彼を……消すことができる」
「奴との戦いはワン・フォー・オールを継いだ私の役目だ。たとえ君でもその役目は譲らない。他にも何かあるのか？」
「……この、ヒーロー……馬鹿……」
「何をいまさら」
　出てきた悪態に笑って見せると、腰に手を回された。
「……仕方ないから、サポート……してやる」
「あぁ、よろしく頼むよ」
　ようやく声に力が入ってきたのを感じて、息をついた。
「……世界……」
「うん？」

小さく聞こえた声に、アリス君の顔を見る。
泣いたせいで濡れた瞳と少し赤くなった頬で私を見上げていた。
その姿に胸が高鳴った気がした。
「一緒に世界を背負ってくれるんでしょ……？　死んだら許さないからな」
そう言って、彼女が腕の中から消えた。
後ろからパタパタと走っていく音が聞こえたので、どうやら言い逃げした様だ。
そして私はと言うと
「……」
熱い顔を手で押さえて、しゃがみこんでいた。
胸の動悸が収まらず、彼女の最後に見えた嬉しそうな笑顔が脳裏から離れない。
それを凄く嬉しいと思っている自分がいるのに気が付いた。
この感情……もしかして……私は彼女に……

第八話　約束の為に

▼月?日　できることをやろう

気分新たに今日から頑張った。
前から言われていた雄英高校に教師として働いてくれないかと言う打診にＯＫを出した。
来年から俺は雄英高校の教師となる。
オールマイトと約束したから、俺は新しい世代を育てる。
俺の本来の個性を最大限利用する。
より現場に近い経験を積ませることもできるだろうし、今から色々と考えないといけない。
イズくんとかっちゃんには内緒。
高校に来た時に驚くがいいさ。
オールマイトには報告してある。
彼に認められて、心が軽くなった気がする。

それに甘えすぎるのはよくないけど、俺は俺でできることをしようって決めた。
もし原作通りに襲撃が来たらちゃんと本気で守る。
教え子を殺されるわけにはいかない……って、今からこんな風に考えなくてもいいよね。
消太君に連絡を取って、教師ってどんな風にしたらいいのか聞いておこう。
年齢では私の方が上だけど、先生としてはあっちの方が先輩だからね。
今度、先輩って呼んでやろうかな。
まぁ、何言ってんですかアンタはって返されるだろうけど。
なんか、転生してから一番清々しい気分だよ。
オールマイトには感謝してもしたりないね。
凄くカッコいい奴だった。
思い出すとちょっと顔が熱を持つって事は、俺も少し意識してんのかね？
もしかしたら、オールマイトに恋をすることもあったのかもしれないな。
けど、俺はオールマイトをサポートするって決めたんだから、浮かれたことなんて考えてられない。
オールマイトの為に、俺は何ができるんだろう。
それも考えないとな。

▼月Θ日　オールマイトがなんか変だ

結局何をすればいいかわからなかったから、本人に聞いてみた。
頭を抱えて蹲ってたけど、一体どうしたんだ。
聞いても「何でもない」って言うから、念のため、頭の機能を正常に回復させておいた。
結局何をしてほしいかわからなかった。
とりあえず、少しは休めるように掃除と洗濯して、しっかりと栄養を取れる様に食事を作っておいた。
こんな家政婦みたいな真似で、オールマイトのサポートなんてできてるのかわからないけど。
一応後日、許可をもらっておこう。
ヴィラン退治は特に手伝う必要性を感じない。
何せ、彼が苦戦するような個性持ちなんてオール・フォー・ワンくらいだ。
原作に脳無なんて奴がいたけど、弱っていないオールマイトが負けるはずがない。
……念のため、オールマイトの周りに使い魔飛ばしとくか？

いや、でもそれだとストーカーみたいだと悩む。結果をオールマイトに聞くことにしよう。

一応案としては、体力回復と索敵効果を持った鳥型タイプの使い魔を渡そうかな。

オールマイトの見た目に合わせて、大鷲にしておこうかな。

その方がきっと見栄えがいい。

けど、体力回復の効果を持つ鳥って不死鳥みたいだよね。

いっそのこと魔法学校の不死鳥みたいに死んだら灰から新しい雛が出るタイプにしてみようか。

考えてみれば、結構いい案な気がする。

オールマイトは怪我人を治療する事ができないし、索敵の力も使い場所を選べば人命救助に使える。

おぉ！考えれば考えるほど良い案だ！

まぁオールマイトが良いって言ってくれないと意味がないけど。

そういえば、消太君と連絡が取れた。

教師の仕事について教えてほしいって言ったら「何の冗談ですか」って言われた。

失礼な奴だ。正式に来年から教師として働くことになったって説明したら「適当に纏めときますんで、都合がいい日に取りに来てください」とのこと。

適当なんて言いつつ、しっかりと纏めるのが消太君である。
君ってツンデレなの？
今日明日じゃ流石に迷惑だろうから、今週末に向かうことになった。
その日の修行は分身を向かわせておこう。
流石に準備してもらって、分身を向かわせるのは失礼だ。
そういえば、そろそろ新しい目薬も用意しないと……っていうか、いい加減施術させてほしい。
ヒーローのサポートをするって決めたんだから。

▼月φ日　わかりやすいけど過激

今日は約束通り、書類を受け取りに行った。
雄英高校でする行事や授業について詳しくまとめられてた。
見た所既存のマニュアルとかじゃなくて、消太君が自分で纏めたものみたいだ。
まさかここまでしてくれるなんて本当にありがたい。
ずるいけど個性で理解力上げて、内容を一回で記憶するためにさっと読む。
……なんか、ここは少し苦労した、みたいなコメントもあって読むのが面白い。

個性のおかげで5分ほどで読み終わったら、知識確認の為か消太君がレクチャーしてくれることになったんだけど……すごいね、消太君。
いや、消太先生。
消太君がまとめてくれた書類を覚えてること前提だったけど、凄く分かりやすかった。
けど、見込みなければ退学で良いってそれはちょっと過激すぎやしませんか？
どこの食戟料理学校ですか。
雄英に受かるくらいだから十分優秀だと思うよ？
甘い？　甘いのかぁ……。
半端な奴を卒業させても殉職するって言いたい事もわかるんだけどね。
でも頑張って入学したんだから、卒業させてあげたいじゃん。
とりあえず否定はしないで、消太君の考えは一つの考えとしておく。
俺も同じようにする必要はないよね。
お礼に近い内に何か奢ろうと思ったんだけど「先輩の作ったビーフシチューでいいです」って言われた。
彼が後輩だった時に作った奴だけど、そんなに気に入ってたのか、ビーフシチュー。
そういえば初めて食べた時も、個性使ってるの？ってくらい目を見開いて、髪が逆

立ってたね。
だから食べたくなったのかな？
俺の拠点で食べる？って聞いたけど「弁当みたいに、容器に入れといて貰えますか」って。
昼ごはんの準備をする手間を省くための合理的判断？
仕方ないから、個性で出来立ての状態を維持するようにしておこう。
あと、パンも焼いてあげよう。
これから色々と迷惑かけるだろうし。
そんなことを思いながら帰路についてたら、ばったりと校長先生に会った。
「昔よりいい顔するようになったね」って言われたんだけど……そんなにわかりやすい顔になってるんだろうか？
何やら恥ずかしかったので、早々に逃げちゃったけど。
でも、そっか。
変わったんだな、俺は。
だとしたら、それはやっぱりオールマイトのお蔭なんだろうな。
流石はＮｏ．１ヒーローだわ。
かなわないなぁ。

あ、消太君に施術させろっていうの忘れた。

▼月？日　とりあえず許可はもらっている

そういえば書き忘れていたけど、家政婦の真似事と使い魔に関してＯＫもらったので、大体一日置きにオールマイトの拠点に来てお手伝いさんをやってる。

毎日来ないのは、ほら、オールマイトも男だからね？

色々と処理しなきゃいけない事もあるだろうし、流石に言わないけど。

使い魔に関しては最初は戸惑っていたみたいだけど、今は楽しそうに世話もしてるみたい。

この間は、怪我人の捜索や治療で大いに役立ったようだ。

使い魔が活躍したことを凄く嬉しそうに話すオールマイトが、なんだか可愛いと思った。

流石は原作でヒロインなんて言われてるオールマイトだ。

病弱設定がなくてもヒロイン力は衰えていないと言う事か。

この俺に可愛いと思わせるとは。

それは置いといて、俺としても用意した使い魔が役に立ったのなら嬉しい。

見た目は大鷲だけど、頭にオールマイトみたいなＶ字型に飛び出た羽がある。

使い魔の能力は『治癒』『索敵』『再臨』の三つの効果を持たせた。
一応、使い魔の能力を書いておこうかな。
『治癒』
不死鳥の涙は傷を癒すってやつだね。
『索敵』
敵や救助対象を探すためのもの、きっとオールマイトの役に立つ力だ。
『再臨』
致死ダメージを受けたら、一気に体を燃やし尽くして灰から蘇る能力。
まさしく不死鳥の能力である。
雛の状態で復活するとオールマイトの邪魔になっちゃうから、成鳥状態で復活するようにしてある。
これならいざと言う時は、盾にもなれる。
我ながらいい仕事をしたと思う。
不死鳥がオールマイトと共に居れば、オールマイトは死なずみたいな印象も着くかもしれないし。
そういえば、二人目の弟子をとった事をオールマイトに言ってなかった。

弟子と言えるほど、修行に口出ししてないし、勝手に強くなってるけど。
明日になったらかっちゃんの事を教えておこうかな。
物凄い才能の塊で、イズくんをライバル視している二番弟子がいるって。

ーーーーーーーーー

あの先輩は昔から無茶苦茶な人だった。
「君が相澤消太君？　私は想現アリス、よろしくね。早速だけど一緒にトレーニングしない？」
初対面から引っ張り回されて、色々と振り回された過去がある。
「私は個性特化型だから、消太君の個性は私にとって致命的だな……なんとか、防ぐ方法とかないかな」
なんて言って、個性に干渉する独自のエネルギーがとか言って、俺の個性が先輩には効かなくなった。
未だに、どういった方法で干渉を阻害しているのかわからないが、あの人にだけは俺の個性が効かない。
けど、まぁ……優しい人だ。

俺の個性が異形系の個性に効果がないって悩んでたら
「なら自分の身体能力と技術で捕まえれる様になればいいのよ」
なんて言って、一緒にどういう戦法で捕縛すればいいか考えたり
「身体能力高めるために負荷掛けよっか？　とりあえず全身５ｋｇでいい？」
とかいきなり全身に重い負荷をかけてきたりする、とんでもない先輩だったな。
けど、異形型の同級生を倒せた時は「流石未来のプロヒーロー！　やったじゃない！」と自分の事の様に喜んでくれた。
その時にお祝いだ、と言って先輩の孤児院で、子供達にもみくちゃにされながら食べたビーフシチューは忘れられない記憶だ。
そんな無茶苦茶で明るい先輩だったが、時々どこか苦しそうにしていた。
何かに悩んでいるのはわかった。
世話になった事もあって、何度か力になりたいと尋ねてみたが、先輩が卒業しても教えてくれることはなかった。
そんな何かを抱え込んでいた先輩が、教師の事を教えてほしいとか一体何があったんだ。
この高校で来年から教師として働くことになったと聞いた時は、自分の耳を疑った。
自分らしくもないが今までの恩もあったので、できるだけ先輩がやり易くなるよう

に、一からデータを纏めた。
学校行事から普段の授業、自分が苦労したことまで書いている事に、苦笑した。
どうも自分はあの先輩に入れ込んでいるらしい。
自分がこうして、プロヒーローとして動けるのは先輩がいたからだと思っている。
２０代から教師を務めているのは、異形型個性に苦労している時手伝ってくれた先輩と同じことをしているだけだ。
見込みが薄くても、除籍処分にしないのはあの時の自分を重ねているからだ。
「異形型個性にはただの無個性じゃねぇか」そう言われていた俺を、腐らせずに手伝ってくれた。
「流石未来のプロヒーロー」と認めてくれた。

合理的じゃない。
今まで何人もの生徒を除籍処分にしてきた。
強い個性に胡坐かいて、他人を見下して、努力を怠った生徒たちだ。
何度も注意を促した、それでも彼らは変わらない。
これではヒーローになったとしても、あっさりと殉職して命を落とすだろう。
そうなる前に、俺が切り落とす。

個性のデメリットに悩んでいる生徒を確認しては、他の先生と情報を共有して、どうすればいいか話し合った。
先輩風にいうなら、諦めない奴がヒーローにふさわしい。
そんなことを考えている自分に笑う。
やっぱり自分はあの先輩に大分影響を受けているのだ。

週末には先輩が来る。
それまでに、しっかりと纏め上げておこう。
合理的じゃない自分の感情に笑いながらも、あの先輩に報いる為に。
「久しぶりに、あの時のビーフシチューが食いたいな」

第九話　困ったモノだ

私はある建物の屋上にて人を待っていた。
まさか私が……その、恋をするなど、全くの想定外なのだ。
気が付いてしまったこの感情に、私は振り回されている。
アリス君の一挙一動に、私の心は酷く掻き乱されている。
流石にヒーロー活動に支障が出るほどではないが、ふと時間に余裕ができると、アリス君の事を考えている事がある。
厄介な感情だと思う。
だが、同時に心地良くもある。
ガチャッと言う音がして、扉が開いた。
どうやら待ち人がやって来たようだ。
「待たせたね、オールマイト」
そう言って手を上げてきたのは、私の親友である直正だ。
「いや、私の方こそ突然済まない」
忙しい中、相談したいことがあると言って彼を呼び出したのだ。

というか、相談できそうな相手が直正しかいなかった。
「それで相談があるって言ってたけど、どうしたんだ？」
直正はビニール袋から昼食を取り出しつつ、ベンチに腰掛けた。
「あぁ、それなんだが……」
いざ相談しようと思うと、なんだか非常に気恥ずかしい。
その気恥ずかしさを誤魔化すようにベンチに座って、弁当を取り出しつつ切り出した。
「その……だな……今まで全く意識していなかったが……私はどうやら神綺君に……その、好意を持っているらしい」
「あ、ようやく気付いたの？」
「……ん？」
聞こえた言葉がうまく認識できず、直正を見る。
なにやらニヤニヤと見覚えのある笑みを浮かべているではないか。
そこまで認識して、ようやく直正の言葉が理解できた。
「な、なっ、なぁ!?」
「おう、落ち着け、オールマイト。君は人間だ、人間にわかる言葉で話そう」
取り乱す私をニヤニヤと笑いながら、直正は袋からコーヒーを取り出していた。

その反応に、私は思わず立ち上がって、ビシッ！と音がしそうな速さで指さした。
「私がぁぁぁあっと!!」
「ブハハハハハハッ!!」
立ち上がった勢いで、弁当が地面に落ちそうになっているのを見て、慌てて回収する。
あ、危なかった……というか、そんなに笑うな直正!!
片手で弁当をもって、腹を抱えながら笑っている直正を改めて指さす。
「私が！　神綺君の話をする度に！　にやけていたのはそう言う事か!?」
「ナイトアイも一緒に笑ってるよ」
「彼も!?」
何故当事者である私より早く気付いた!?
知らぬは本人のみと言う事か!?
もしかして私はわかりやすいのだろうか……ッ!?
そこまで考えて、ふとある考えが頭を過った。
「……まさか、神綺君にも気付かれているのだろうか……ッ!?」
気持ちを自覚する前から、本人に気づかれているとか気まずいなんてレベルじゃないんだが!?
「多分だけど、気付かれていないと思うよ。彼女の様子を見た感じ、親友とかそういう風

に思われてるみたいだ」
「……そうか……」
よかった……これ以上恥ずかしい思いをしないですんだ。
小さく息をついて、ベンチに座る。
ほんの数分しか話していないのにどっと疲れた。
「まぁ、オールマイトは大分信頼されてるみたいじゃないか。それだって、彼女が作ってくれた弁当だろう？」
「……確かにそうなのだが……」
直正の視線が私の手に持つ色鮮やかな弁当に注がれる。
この弁当はアリス君が態々用意してくれたものだ。
私用に大分大きな弁当箱を使い、野菜や肉料理がバランスよく入っている。
私が誓いを立ててから、アリス君は私の身の回りの世話をしてくれるようになった。
1日おきだが必ずやって来て、掃除、洗濯、家事をしてくれている。
その事を思い出したからか、余計なことまで思い出してしまう。

あの事件から数日が立ち、落ち着きを取り戻していたアリス君の様子が何やらおかし

い。

私の隣に座って、時々私を見て「お、おー……」とか「……うぁぁぁぁ」とか謎の言語が飛び出す。

私に何か言いたい様だが、無理に聞き出すのも悪いと思い、話しかけて来るのを待っているのだが……。

もうかれこれ３０分ほど様子を見ている。

流石にこれは助け船を出すべきかと思い、私から話しかけることにした。

「アリス君？　さっきからどうしたんだい？」

「ッ!?　な、なにが!?」

ビクッとして、視線がキョロキョロと激しく泳いでいる。

その顔を見ていると、今度は頬を少し赤く染めて恥ずかし気に目を背ける……これ以上見ていると、私もおかしな気分になってしまいそうだ。

「何か私に言いたい事でもあるかい？」

「えっと……その……ね？」

少し高揚した気持ちを抑えて、話を促した。

アリス君の様子を伺っていると、唐突にその姿が消えて背後から肩に手を添えられた。

「アリス君!?」
いきなり接触されるとこちらもドキッとしてしまうのだが!?
突然の接触に身を固くしていると、更に予想外の言葉が降ってきた。
「わ、私……オールマイトの役に立ちたいの！　だから私にできる事ならなんでもいって!?　オールマイトの言う事ならなんでもするから！　ね!?」
「な、なんでも……」
聞こえた言葉を思わず小さく繰り返してゴクリッと唾を?んでしまった。
幸いアリス君も一杯一杯みたいで、気付かれなかったようだ。
「なんでも」と言う言葉に思わずあらぬ想像をしてしまった自分を殴りたい……
自分の好意を自覚しただけに、何でもと言われて思考が暴走してしまった。
決して、砂浜で見た透けた服の事など思い出していない。
服が張り付いて透けて見えた肌が煽情的だったとか思っていない。
……もっと見ればよかったとか、断じて、断じて！　思ってない!!
そんなことを考えてた私は頭を抱えていたらしい。
「オールマイト?　大丈夫?」
頭が痛そうだとでも思ったのか、ゆっくりと頭を撫でられる。
……凄く心地よかった。

「大丈夫だ。今は特に思いつかないな」
「そっか……じゃあ、家政婦の真似事でもしてようかな」
そう言ってアリス君は、部屋の掃除を始めたのだった。

「顔がすっごいニヤけてるぞ」
「ニヤけてなどいない！」
可笑しそうに笑う直正を軽く睨む。
「で、何を思い出していたんだ？」
「……黙秘する」
相変わらず笑みを浮かべた直正から目を逸らす。
「大方、彼女のあられもない姿でも想像していたんじゃないか？」
「っ!?　ごほぉ!?　ごっほっ!!」
な、なんてことを言うんだ直正ァ!?
あながち間違っていない所が辛い!!
「おや、図星か？　オイオイ、オールマイト。いくら彼女が美人だからって盛りすぎじゃないか？」
「誰が盛るか!?」

「彼女には興奮しないのかい？」
「そういう話ではないだろう!?」
君いつもよりも性格が可笑しくなってないか!?
追求から逃れる為に弁当を食べる事に集中する。
直正の言葉は聞こえん、と自分に暗示を掛けつつようやく食にありつく。
結構時間が経っているにも拘らず、まるでできたての状態だ。
アリス君が個性を使って状態を保存していたのだろうか。
直正によって乱されまくった心が、ゆっくりと落ち着いていくのを感じた。
美味しい弁当を用意してくれた上に、こんな気遣いまで。
胸の奥から温かくなるのを感じた。

「またすっごいにやけてるぞ」
「……」
「幸せで一杯ですって顔だな」
揶揄うような直正の言葉は黙殺する。
顔が熱いのはきっと太陽が照り付けている所為だ。
「今日は曇りだぞ」

「えぇい!!　私を観察してる暇があるなら飯を食べないか！」
「もうとっくに食い終わったよ」
相変わらずニヤニヤとした笑みを浮かべながら、頬杖を突く直正から目を逸らす。
駄目だ！　このままでは非常に食べにくい!!
無視するなんて最初から無理だったのだ!!
ならばと考え、私はポケットからケースを取り出した。
「ん？　なんだいそれ？」
「暇ならこれでもあげててくれ」
「あげる？」
直正が首を傾げているのを見ながら、腕を高く上げた。
それと同時に、私の腕に朱い鳥が腕に止まった。
「でかっ!?」
「翼を広げたら２ｍ以上あるからな」
直正が珍しく目を丸くして声を荒げた。
「凄いな！　赤い巨鳥！　炎を纏えばフェニックスみたいだな！」
「君ってそういうの好きだったかな？」
今まで見たことないくらい興奮した直正がそこにいた。

私の使い魔である不死鳥のヴィクトリーを傍の手すりに移動させる。
V字の羽がチャームポイントだとアリス君が言っていた。
これなら追及からは逃れられそうだ。
「君そっくりのV字の羽があるぞ。これも彼女からの？」
……逃げられなかったようだ。
軽くため息をついて頷く。
「神綺君は自動人形みたいなものだと言っていたな」
「自動人形？　彼女の魔法の様な個性で作ったなら、魔導人形と言ったところかな？」
魔導人形……ふむ、確かにしっくりと来るな。
ヴィクトリーに機械は全く使われていないし、次からはそう呼ぶか。
直正が不死鳥の魔導人形を触っているのを見ながら弁当を食す。
ミートボールが美味い。
「凄いな、これが作り物か……確かに血は通っていないみたいだが、動作はまるで生き物だ……色んな個性を見てきたが、彼女ほど多彩な個性は見たことないな」
想像できることならなんでも実現させる事ができるからなと思いつつ、言葉には出さない。
また何か揶揄いの言葉が飛んでくると思ったが、大丈夫そうだ。

ある程度観察が終わったのか、今度は渡したケースの中に入っている物をマジマジとみている。
「これは……飴玉みたいだな……」
「餌みたいなものらしい」
「ふむ……おぉ!?　不死鳥が啄んだら簡単に千切れたぞ!?」
「初めて上げた時は私も驚いたな」
アリス君曰く、この飴玉みたいなものはエネルギーの塊で、ヴィクトリーを動かす為の電池みたいなものだと言っていた。
こうして餌をやらないと、能力が発動しなくなり、終いには動かなくなるらしい。
……動かなくなったら、口の中に餌を入れれば勝手に補充されると言っていた。
……アニマルセラピーみたいな事ができればいいと思ってこうしたと言ってたが、余計生き物にしか見えなくなるな。
実際嬉々としてヴィクトリーが餌を啄む様子を見ている直正を見るとそう思う。
「動作まで鳥みたいだな。オールマイト、彼女に魔導人形展でも開くように言ってくれないか?」
「ククッ……展示するのは伝説上の生物かい?」
直正の言葉を聞いて、ドラゴンや過去に絶滅した生物が自由に動き回る動物園の様な

人形展を想像し、笑った。
「あぁ！　ドラゴンの様な個性を持つ人もいるだろうが、餌付けなんて失礼だろう？　けど、彼女の魔導人形ならまるで本物の様な人形に餌をやることができるし、何より安全だ」
「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！　それは凄く平和的な個性の利用の仕方だな！」
戦いや救助と言ったものだけではなく、人を楽しませる娯楽として個性を使うか。
アリス君の個性なら確かに可能だな。
「それでだな！　彼女なら餌の形を肉の様にしたりもできると思うんだ、そうすればよりリアリティが……」
まるで子供の様にはしゃぐ直正をみて、そんな未来が来ればいいと思う。
そうすればアリス君も笑顔で居られるだろう。
そこまで考えてふと思った。
……そういえば、アリス君は来年雄英で教師をすると言っていたな……。
その時によりリアルな現場を体験させるって言っていたが、まさか？
未だ夢心地に人形展の事を語る直正をしり目に、ヴィクトリーをじっと見る。
本物にしか見えない作り物……災害救助……アリス君なら命のタイムリミットも再現し、活動を停止する人形を作れるだろう……そうなると……訓練なのに、現場と同じ

臨場感を味わえる授業？
救命措置や個性の使用による要救助者への影響もリアルに再現できるだろう。
人形でやるなら、災害救助でなくヴィラン想定戦も可能だろう。
しかもヴィクトリーを見るに、個性戦すらも再現できる。
来年の生徒たちは凄く恵まれているかもしれない……というか、絶対に恵まれている。
人形とはいえアリス君が作るものだ。
本当の現場に近い経験ができると言う事は普通ありえない。
本当に心停止させるわけにもいかない、呼吸停止させるわけにもいかない。
だが、彼女が作る魔導人形ならそれができる。
実戦さながらの経験を積んだ生徒達は、大きく成長するだろう。
……アリス君は、本当に次世代を育てようとしているのだな。
私との誓いを本気で守ろうとしてくれているのだ。
直正の語った未来……そんな笑顔が溢れていそうな未来をつくる。
アリス君にあれだけ大見得をきったのだ。
オール・フォー・ワンは私が絶対に倒す。

今度こそ。
そして、アリス君が個性を使って未来の人々を楽しませる。
そんな未来をこの目で見たいと思った。
できる事ならば……その隣で……な。
私は心新たに、弁当をかき込んだ。
「さて、直正。その未来予想図もいいが、まずはやらなくてはいけないことが多いぞ」
「勿論わかっている。まずはパトロンを見つけて……」
「違うぞ!?」
喧しく過ぎていく、そんな何でもない平和な昼下がりの事だった。

第十話　やることが一杯だ

！月！日　天才って……

天才ってホントに怖い。

なんで技術指導とかなしの戦闘経験だけで準達人級に踏み込んでんの？

自分で調べて『観た』ことなのに、自分が信じられないんだが……

イズくんが準達人級に入るのに時間換算で４～５年くらいかかったんだよ？

なのに数カ月でその域に至るって……かっちゃんマジ半端ない。

しかも好戦的過ぎるし。

普通Ｎｏ．１ヒーローに「俺と戦え！」っていうか!?

イズくんもかっちゃんに影響されたのか静かに闘志を燃やしつつ「僕もお願いします」とか言うし。

それを笑って受けるオールマイトもおかしいと思うんだが……俺がおかしいのか？

ランク分けするなら超人級に当たるオールマイト。

流石に勝つことはできなかったけど、オールマイトをして「鍛えていけば私より強くなるかもしれない」とか言わせるとか……

イズくんも準達人級だったはずなのに、なんか壁越えた？
それともライバル効果？
君も達人級に踏み込んでるんだけど……これが原作キャラの力？
イズくんたちの努力を否定する気は全くないけど、ここまで急激に成長するものなのか？
……駄目だ、俺にはわからない。
そもそも個性一つでここまで来た俺には壁を超える感覚もわからない……あえて言うなら、自分の感情が一番の壁だけど……それとは全く関係ないし……
もしかして、イズくんたちに個性を使ったのかな？
いや、でも個性を使いながらイズくんたちが強くなるような想像はしてないよな。
常時発動型の個性でもないし……寝ぼけて使ったことはないし。
ってことはやっぱり、イズくんたちが壁を越えたってことだよね。
原作キャラだからって言葉で片付けるつもりは一切ないけど、すごいなぁ二人とも。
お祝いとして何か作ってあげようかな。
ほしい物があるか聞いておこう。
まぁ、とにかく
二人とも昇格？おめでとう！

！月？日　草案の完成

消太君からもらった資料を読み終わったので、自分の個性を最大限に使って最高の環境を作れるように草案を考えてみた。

ＵＳＪが無くなっちゃうかもしれないけど、それ以上に良い物が用意できたと思ってる。

俺が用意するのは『仮想現実空間訓練所』と『仮想現実管制ＡＩ』の二つ。

仮想現実空間訓練所は、前世で見たマトリ○クス的な物で、俺が用意した転移門から仮想現実空間へアクセス。

管制ＡＩとの連携によって、様々な状況を作り出すことができる。

管制ＡＩは教師の要望を聞いて無数にある情報から最適な空間を作り出す。

ただ、これはかなりヤバい。

管制ＡＩが仮想現実空間を１００％把握するように作ってあるとはいえ、痛みは現実と変わらない。

仮想現実内で死ぬようなダメージを受ければ、管制ＡＩが即座に情報を遮断し、現実に戻せるけど……

痛みに関する所は要相談だな。

ヒーロー目指すならそのままでいいと思うけど、トラウマ製造機になりかねない。
近い内に消太君に体験してもらって意見を聞こう。
消太君なら色々欠点とか気が付きそうだし、その都度修正していけばより良い案になるはずだ。
……考えてたら近い内と言わず、明日にでも連絡しようかな。
消太君にはいろいろと迷惑をかけてるなぁ……
何かお返しができればいいんだけど。

！月★日　なんか超展開

消太君に相談したら、あっという間に緊急会議が始まった。
まさかの教師全員集合で、俺の持ち込んだ草案について色々と聞かれた。
色々と話していたが最終的に見せることになった。
試作状態ではあるけど、実際に体験した皆さんの反応が凄まじかった。
俺の個性をフルに使って作り出した仮想現実空間は、現実との相違が全くない。
現実と全く変わらない経験をさせる為の施設であり、その為にあるのが管制ＡＩだ。
あらゆる情報を検索して、起こり得る可能性を想定し、それを仮想現実として作り出

す。

一般人も、警察官も、ヒーローも、ヴィランも。

仮想現実で作られたモノは全て、現実世界と何ら変わりはない。

育てることに妥協しないとは言ったけど、やりすぎた感があるなぁ。

教師の皆さんに実際に体験してもらったけど、仮想現実と言うのが信じられないらしい。

スペースヒーロー13号さんと俺が、仮想現実空間のレスキュー隊の人に協力要請を請われた時はみんな動揺していた。

俺の個性で作った仮想現実空間は、ある意味でもう一つの世界だ。

その後に管制ＡＩに頼んで、俺たちの姿が見えないようしてもらい、『要請を受けた』と言うデータを消して改めて見学してもらった。

世界を再構成して、飲食物を食べる、建造物に触れたり、ヴィランの襲撃、災害、事故などあらゆるシチュエーションを体験してもらった。

皆、本物にしか見えないこの空間は素晴らしい教材になると言ってくれた。

ただ心配なのは場合によっては『死』に近づく経験をしてしまう事である。

話し合った結果としては、命が保証されているのだから痛みくらいは乗り越えろ。

と言う事になった。

ヒーローたる者、その程度できなくてどうする！だってさ。
俺、個性のお蔭で怪我とか全くした事ないから痛みに全然強くないんだけど……
……お蔭でショック死寸前で強制送還されました。
もう真冬の海でダイブなんてしたくない。
ちなみに施設名は『シミュレータールーム』で管制ＡＩは『ナビィ』と言う呼び名になった。
特に呼び名とか考えてなかったので、俺もそれに賛成した。
ＡＩ……もとい、ナビィも喜んでいたな。
どうでもいいけど、ナビィっていうと前世でやったゼルダ○伝説が浮かぶんだけど……こっそりと見た目も変えておこう。
雄英の生徒が使うのは来年からだけど、先生方の要望で警察、消防、救急、ヒーロー事務所の方々が訓練として使いたいとのことで、早々に設置する事になった。
ついでにオールマイトにも話をして、俺の個性でオール・フォー・ワンの情報を全部登録したシュミレーターを作ってそこで対オール・フォー・ワン訓練をしてもらうことにした。
なんか、オールマイトが乾いた笑い声をあげてたけど、どうしたんだろう？
でもこうすれば、オール・フォー・ワンとの戦闘時に起こり得ることは全部把握でき

るだろ。
万が一でもオールマイトが負ける可能性は排除しておかなきゃ。
こういった手助けなら大丈夫だよね？
余計な事だったかな……でもやっぱりオールマイトには怪我をしてほしくないし……（以下惚気の様な文章が続いている）

Ｄ月Ａ日　まじでか!?
オールマイトが近くにいるから、原作通りに雄英で先生をするつもりはあるのかなって聞いたらその予定はないと言われた。
後継者はどうするんだろう？
仮に原作通りにイズくんにワン・フォー・オールを渡したとしたら……今の段階でも達人級の技術＋心力強化＋ワン・フォー・オール＝超人級ＩＺＵＫＵさんの誕生？
心力強化とワン・フォー・オールだけでもオールマイトの倍以上の身体能力になるのに？
更に特Ａ級の武術の達人になったら？
……ヴィラン終わったな。
っていうか、そうなった場合地球上でイズくんに勝てる人っているのだろうか？

今のオールマイトでも拳圧で天気を変えるんだぜ？
その倍の強さになったら……え、どうなるの？
想像できないんだけど？
そういえば、最近のイズくんってワンピースの『月歩』みたいなことやり始めたんだよね……
空中で戦える様になったかっちゃん対策って言ってたけど……既にＩＺＵＫＵさんと化してきているのか……
これ、雄英高校に入ったらどうなるんだろ……
今度シミュレータールームで個性把握テストみたいなことやってみようかな。
俺は個性チートだけど、イズくんはいつの間にか肉体チートになってるし。
ハンターハンターの世界みたいに空気にプロテインでも入ってるのかな。
……あれ？ふと思ったんだけど……
もしかして俺って既にイズくんに勝てなくね？
正々堂々とした立ち合いだったら……個性使う前に一瞬で意識刈り取られそうな気が……
……このことは心の棚の奥深くにしまい込んでおこう……
イズくん……早くも師匠越えか……いや、だから考えるなっていうに!!

Ｖ月Ｅ日　なんでや

なんか、警察、消防、救急から感謝状貰った。

いやシミュレータールームの事で感謝状を貰ったと言う事はわかる。

わかるんだけど、なんで？

なんで総理大臣からも会談の要請がきてんの？

そんなお偉いさんに会いたくないんだけど……あ、お腹痛い。

俺は良いからオールマイトでも連れて行ってくれませんか、駄目ですかそうですか。

俺は表に出たくないんです、勘弁してください。

社会に貢献したから表彰？

いらないです。

俺をその気にさせたオールマイトを表彰してください。

精神的プレッシャーが凄まじい……

個性使って図太くなりたい……いや、ダメダメ。

この個性は自分の為じゃなくてサポートの為に使うって決めたんだから。

うぐぅ……おなかが痛いいいい……

や、やっぱり使っちゃおうか……くっそう、意志弱すぎんぞ俺。

『絶対遵守』でも使って自分に使えないよう……あ、やっぱ怖いから無理。
ど、どうにかオールマイトを引っ張っていけないかな……もしくは消太君。
あ、でも流石に迷惑だよな……うぅ……か、覚悟を決めろ俺！
高名なドクター達に会うのと変わらないと思えば……!!
……どっちもいやだわ。
個性で治療してるんです、そんな先進的な医療知識なんてありませんから、俺に意見を求めないで!!
全部個性のお蔭なんだよ!!
そもそも一人で活動するのが楽だからこうして一人で活動している訳で、組織に入ったら色々と責任が（以降ネガティブな文章が続いている）

★　★　★　★

先輩は無茶苦茶な人だと思っていたけど、どうやら俺の認識はまだ足りなかったらしい。
今の俺は豪華客船で食事をしている。
他の教師たちも真剣な目で食事をしたり、周りの人に話しかけたりしている。

「皆楽しんでるかーーー!!俺のライブはまだまだ続くぜぇ!!」
……山田が壇上で楽しそうにしているのが見えたが無視する。
俺達が今いる豪華客船は冬の太平洋を航行している。
そう設定されて作られた仮想現実空間だ。
俺達は客人設定でこの客船に乗っている。
作られている料理を食べれば、肉の柔らかさ、繊細な味付けがされた味を感じる。
水を飲めば喉が潤うし、酒を飲めば胃の中からカッとした様な感覚に陥る。
これが現実ではないというのが、経験しても信じられない。
「仮想現実だからって酒を飲んだら酔うわよ。ＡＩ、消太君のアルコール分解しておいて」
『了解しました』
先輩が管制ＡＩにそういうと、熱くなっていた胃が一瞬で冷めた。
「……先輩って本当に規格外ですね」
一体どうやってこの仮想現実を作り出したのか。
やっぱり抱えていた何かを吹っ切る事が出来たんだろう。
「うん、次世代の子達を育てるために全力を尽くすって決めたからこれを作ったんだ」
先輩はそういうと、時計を見た。

「ＡＩ一度時間を止めてくれる？」
『了解しました』
管制ＡＩが声を返すと、周囲の人間の動きが止まった。
「うおーい!!　神綺さん!!　今良い所だったのに止めないでくれよ!!」
「ごめんね、プレゼントマイク。そろそろ時間だから一度集まって話しておこうと思って」
あいつ、ここが仮想現実だと言う事忘れてないか？
先輩に言われて渋々とこちらに向かってくる山田の頭を叩いておく。
「いて!?　なにすんだよイレイザー？」
「遊んでないでこの空間をちゃんと調べろ」
「ちゃんと見てたさ。リスナーの反応が完全に現実と変わんねぇ。ほんとにここが仮想現実なのかわからなくなりそうだ」
なんだかんだでちゃんと見てたのか。
完全に遊んでいるようにしか見えなかったが……
「皆さん、この仮想現実はどうでしたか？」
「やはり現実と全く変わりありませんでした。この世界で再現された人達も、こうして止まっている所を見なければ、偽物だと思えませんね。素晴らしい技術です」

「ありがとうございます、校長先生。このシステムを使うことで学生の内から現場と同じ経験をさせ、より高い指導を行う事が目的です。皆さんも色々と試したと思いますが、現実で起こり得る事は仮想現実でも同じように起きます。最後に、管制ＡＩによる生命保護システムを体験して頂いて、今回の見学を終えようと思いますが……」

そこまで説明して、先輩が口を噛む。

「どうしたんですか、先輩」

「……この生命保護システムは、ＡＩが助かる見込みがないと判断した場合、転移門まで強制送還するシステムです。つまり『死にかける』ほどのダメージを経験させてしまうんです」

「成程……貴方が言っていた『トラウマ』級の精神ダメージを与えてしまう可能性があるわけですね」

校長先生の言葉に先輩は頷いた。

「今からこの船は沈みます。つまり私達は冬の海に投げ出される。体温が低下してショック死寸前で強制送還か、水の中で水死寸前で強制送還か……どちらにしても『臨死体験』となるわけです。一応管制ＡＩが全てを管理していますので、実際に死ぬことは絶対にありません」

……先輩、本当に規格外すぎます。

だが、ヒーローをしている以上逃げるわけにはいかない。
生徒達にこのシミュレーターを使わせるなら、自分たちも絶対に体験しなければいけないだろう。
そうでないと、合理的ではない。
「一応聞いておきます。今なら臨死体験をせずとも、現実世界へ戻すことができますが、一度始めたら全員が強制送還されるまでシミュレーターから出れない上、個性も使えなくなりますので、辞退する方がいましたら今のうちにお願いします……まぁ、予想はしていましたが、誰も居ませんね」
先輩は周りを見渡して小さく息をついた。
よく見れば少し震えている。
けど、それを恥じる必要は全くないと思う。
何せ、俺も怖い。
助かるとわかっていても、態々臨死体験をしたいとは絶対に思わない。
だが教師として、これからこのシステムを使う者として避けて通れない。
だからこそ、他の先生方も顔を青くしながらも覚悟を決めた顔をしている。
「生きて臨死体験をすることになるなんて思わなかったぞ、俺は」
「奇遇だな、俺もだ」

山田と軽口を叩いて少し気を落ち着ける。

「……では、始めます。ＡＩ、お願いね」

『畏まりました。シーケンスＤを開始します』

ＡＩがそういった直後に、客船のどこかで爆発が起き、船が傾き始めた。

「私達は既に周りから見えなくなっていますので……うん、臨死に向かう私達は大人しくしていましょうか」

そうして、俺達は沈みゆく客船と一緒に冬の海へと沈んだ。

無事……？臨死体験を終えた俺から言える事はただ一つ。

命が保証されていても、臨死体験はもうしたくない。

冬の海はとても、とても冷たかった。

身体が徐々に動かなくなって、意識があるまま水底へ向かうあの絶望感は間違いなくトラウマ物である。

できるだけ、生徒には臨死体験をさせない様に心掛けるが、これをうまく使えば馬鹿共の矯正にも使えるな。

自分を過信した結果どうなるか。

そう考えるとやはりこれは良い教材となる。

……そういえば、先輩の姿が早い段階で見えなくなっていたが何があったのだろうか？

第十一話　無防備すぎる！

「アリス君、ナイトアイと直正からの届け物だよ」
いつもの様に私の拠点にやってきたアリス君に、直正から預かった封筒を渡した。
「ナイトアイと直正さんから？　なにかしら？」
アリス君が首を傾げながら封筒を受け取って中身を見始めた。
私も中身は知らされていないので、個人的な物だろうと推察している。
あまり見ているのも悪いので、ソファに移動してテレビをつけた。
「ねぇ、オールマイト」
「ん？　なんだい？」
少しして斜め後ろから声が聞こえて、そちらを見やるとソファの後ろから身を乗り出して、手に持っている物を見せてきた。
「温泉旅館の宿泊券もらったんだけど、一緒に行かない？」
……ん!?
今、アリス君の口から信じられない言葉が飛び出した気がしたんだが、うまく認識できない。

「……いま、なんと？」

「ナイトアイと直正さんが、色々と頑張って疲れてるだろうから良ければどうぞって。ペアチケットらしいからオールマイトも一緒にどうかなって。私も結構ここにきてるけど、オールマイトって連休とかとった事ないじゃない？　二泊三日ってなってるから丁度いいし、この機会に少し休むのもどうかなって」

行かない？といって首を傾げるアリス君の仕草に、いつもなら胸が高鳴る所だが、今はそれより大きな爆弾を投げられててそれどころじゃない。

宿泊である。

泊りである。

男女一組で温泉旅行である。

しかもペアチケットと言う事は同じ部屋である可能性が高い。

意識すればするほど顔が熱を持ちそうになる。

アリス君がこんなに近くにいるのに、顔を赤くするわけにはいかない。

と言うかアリス君!!

君、無防備すぎやしないかい!?

好意を持っている相手にこうして誘われたのは非常に嬉しいのだが！

内心ではすぐさま了承したい気持ちで一杯だが、涙を呑んで忠告する事にした。

「し、しかしアリス君、一応私は男だ。流石に年頃の女性が男と二人で旅行に行くというのは、流石に無防備すぎると思うのだが……？」
脳内ではこれを用意したであろう二人がため息をついている映像が浮かんだ。
口がヘタレと動いているのは、自分でもそう思っているからだろうな！
それでももうちょっと異性に対して警戒心をだな……
そんなことを思っていた私は、アリス君の言葉にあっけなく撃ち抜かれた。
「オールマイトだから大丈夫よ。……それとも、我慢できなくなって、襲っちゃう？」
少し顔を赤くして、上目遣いでそんなことを言うアリス君から顔を逸らす。
「そ、そんなことするはずがないだろう!?」
あぁ、もう顔が熱い……！
自分でも真っ赤になってることがわかるくらいだ。
ちらりとアリス君を見ると、ソファの背もたれに腕を乗せて顔を伏せていた。
……髪の隙間から見える耳が真っ赤になっている。
どうやら自分で言ってて恥ずかしかったようだ。
それを見て、更に自分の顔がさらに熱くなるのを感じる。
……まだ赤くなるのか!?
アリス君から視線を逸らして、片手で顔を覆う。

今のアリス君を見ているだけで、私の顔もどんどん熱くなってしまう。
せめて顔の熱が引くまで時間がほしい。
アリス君……できれば、もう少しそのままでいてくれないだろうか……？
「……ねぇ」
そんなことを考えていた直後に、アリス君から小さな声が聞こえた。
……どうやら神は私を助けてくれる気はないようだ。
「……なんだい？」
観念してアリス君の方を向くと、伏せていた顔を少し上げて私を見ていた。
真っ赤な顔で若干涙目だ。
心臓の鼓動が凄まじく速くなり、顔がさらに熱を持つのを感じた。
何という破壊力……！
ここでさらに追撃が来るのか……！
私の心は既に白旗を上げているのだが、それに気が付かないアリス君は更なる口撃を放った。
「……一緒に、いこ？」
恥ずかしげに私を見上げなら放たれた言葉に、完全に撃ち抜かれた気がした。
「わかった」

何かを考えるよりも早く口から言葉が出ていた。
そして、勝手にアリス君を抱き寄せようとする腕を何とか抑える。
だが、良かったと言って嬉しそうに笑うアリス君を見て、つい腕が動いてしまい、咄嗟に頭を撫でる事で何とか誤魔化した。
まさか、自分を律する事が出来なくなるとは……恋、とは恐ろしいものだな。
なんてことを考えても、顔はずっと熱かった。

あの後は、アリス君とある程度日程を決めて、温泉宿に電話したところ1週間後に予約を取る事が出来た。
予約を取った後は、いつも通りの日常……多少ぎくしゃくしていたが……を過ごして、アリス君は帰っていった。
それを見送った後に、私は寝室に駆け込んで、枕に顔を押し付けて叫んだ。
「あれは反則だろおおおおおおおお!!」
勘違いしていいのか!?
勘違いしてしまっていいのだろうか!?
少なくとも嫌悪感は見えなかった。
無防備だと忠告しても一緒に行こうと誘ってくれたのは、そう言う事だろうか!?

くっそう!!　可愛かった！
思わずギュッと抱きしめてしまいそうになった!!
予約の時に「想現アリスと八木俊典でお願いします」と言っていた時は、またドキッとしてしまった。
当日はヒーロー名ではなく名で呼び合うことになったが、アリス君はなんと呼んでくれるのだろうか……？
八木？俊典？
どっちでもいいが、ヒーロー名ではなく名を呼ばれると思っただけでここまで胸が高鳴る私は乙女か!?と思わないでもないが、実際に私の名を知っている人たちはそんな多くないから仕方ないのだ！
それが意中の人ともなれば、こうなるのもわかるはずだ！
君達もわかってくれるだろう？
脳内でナイトアイと直正に問いかけると、ニヤニヤと笑いながら『そうだね』と言う幻聴が聞こえる。
普段ならそのニヤニヤ笑いをやめろと言う所だが、今の私はそんなことは気にならない。
いかん、私のキャラが激しく崩壊している。

いったん落ち着かねば……！
大きく深呼吸をして、自分を落ち着ける……事ができない!!
旅行前の子供よりひどいな今の私は！
そんなことを考えていると、端末に着信が入った。
取り出してみると相手は直正だ。
そういえば、彼らが用意してくれたんだったな。
礼を言わねば。
『やぁ、今時間は大丈夫かい？　神綺くんに誘われて一人悶々としていたオールマイト』
「君は私を監視でもしているのか!?」
端末と通信を繋ぎ、聞こえた第一声に思わず周りを見渡してしまった。
『いや、最近の君ってすごく分かりやすいからね。その反応から察するに実際悶々としていたみたいだね』
「うぐぅ!?　な、直正、最近、意地が悪くないかい……？」
『失礼な。僕とナイトアイは君の事を応援しているというのに』
心外だと言った感じの声が聞こえるが、それならこんなにも弄らなくてもいいじゃないか。
『僕たちが何か言わないと、オールマイトは何もしないじゃないか』

「……」

その言葉に何も言えなくなる。

確かに、今回の旅行も直正たちのお蔭ではある。

今思えば、ああやって揶揄っていたのも私の気持ちを自覚させるためだったのかもしれない。

……教えてくれなかったのはなぜだろうか？

『まぁ、いいさ。せっかくいい宿を手配したんだから楽しんできなよ』

「……ありがとう、と言っておく」

揶揄われた後の所為だけあって素直にお礼が言い難い！

『せっかくの宿泊デートだ。いっその事、思いっきり押してみたらどうだ？』

「なぁ!?」

直正の言葉に、アリス君の言葉が脳内に再生される。

【我慢できなくなって、襲っちゃう？】

い、いかん!!

今これを思い出してはいかんのだ!!

思わず過剰反応してしまった私に、直正が驚いたような声を上げた。

『え、何その反応？　何言われたの？』

「なんでもない!!　追求しないでくれ!!」
直正の宿泊デートと押してみろと言った言葉の所為で、ある妄想をしてしまった。
寝巻の浴衣を着て、顔を赤らめて涙目で私を見上げるアリス君。
畳敷きの布団に横たわるアリス君は、上半身だけを起こして私に先程と同じ言葉を……
そこまで妄想して、思いっきり頭を殴った。
ガスンッ！と言う凄まじい音がするが、痛みのお蔭で何とか先程の妄想を振り切る事に成功した。
『……オールマイト、もしかして……』
「……後生だから、何も言わないでくれ……」
『……まぁ、君も男だからね』
「……」
何も言わないでくれと言ったのに、察したみたいだ。
と言うか、私は思春期の中学生か!?
もう４０だというのに、自分の感情を全く制御できないのだが!?
痛む頭を軽く揉み解しながら、何とか冷静さを取り戻す。
『……ナイトアイに頼めば、過去は無理でも未来の事なら……』

「やめろ!?　なんてことを考えるんだ君は!?」
小さく呟かれた恐ろしい言葉に戦慄する。
この友人、どこまで私の事を追い詰める気だ!?
『やだなぁ、冗談だよ……2割くらいは』
「ほとんど本気ではないか!?」
私がそういうと、直正は楽しそうに笑った。
『本当に冗談だよ、オールマイトは前よりも生き生きしてきたな』
「……そうだろうか？」
自分の感情に振り回されていることは自覚しているが……
そんなことを思っていると、直正は機嫌よさげに言った。
『あぁ。オールマイトは、もう少し自分の幸せと言うものを知った方が良いと思うぞ』
……心配をかけていたのだろうか？
直正の言葉には、どこか安心した様な気持ちが込められている気がした。
「……そうだな。もう少し考えてみるよ」
『お、前向きな発言だな。その言葉を聞けただけでも、やっぱり変わったと思うよ』
「ＨＡＨＡＨＡ、そこまで言うかね」
このいつまでも変わらない親友に感謝を。

友の幸せを願える彼も、幸せになってほしいと思った。
『さて、それじゃあ早速お節介だ。実はお勧めの温泉をピックアップしておいたんだが、この情報はいるかな？』
その言葉に私は小さくため息をついた。
「君たちは本当に準備が良いな。一体どこまで仕込んでいるんだい？」
『それは教えられないな。けどまぁ、良い効能の温泉だ。楽しんでくると良い』
「あぁ、温泉なんて初めてだからね。楽しんでくるよ」
私は直正から温泉の情報を聞きつつ、一つ一つメモを取った。
女性向けの効能の温泉もあるらしいので、それもメモに取っておいた。
……一週間後が待ち遠しいな。
きっと楽しくなるだろう。
★　★　★　★

V月D日　やってしまった
ナイトアイと直正さんから、温泉旅館の宿泊チケットを貰った。
最近色々と頑張ってるが、根を詰めすぎないで偶にはゆっくりと休めってさ。
あの二人、凄く優しいよね。

二泊三日で旅館は結構有名な所らしい。
ペアチケットなので、オールマイトも誘う事にした。
ちゃんと週一で休んではいるから、二泊三日も拘束するのはちょっと迷惑かなって思ったけど、行くって言ってくれた。
断られたら一人で行くことになってただろうから、一安心だ。
流石にイズくん達は誘えないし、消太君の仕事は3日も抜けることができないだろう。
他に一緒に旅行行くような友達はいないし……あれ？
……いま、気が付いたんだけど、俺ってもしかしてボッチか？
……いや、学生時代はちゃんと友達居たし。
ただ、プロヒーローになって疎遠になっただけだし。
……やめよう、これ以上は自爆するだけだ。
まぁ、何はともあれ温泉である。
パンフレットには多種多様な温泉があるらしいから、実に楽しみだ。
年寄り臭いと言われるかもしれないが、海とか山よりも温泉でのんびりしてる方が好きだしな。
二人には感謝しないとね。

オールマイトも居るから、一人で退屈って事もないし、一緒に何かを共有できるのは嬉しいよな。

……しかし、あれは少しやりすぎた。

前世でやったゲームみたいなシチュエーションだったから、つい真似してしまった。

何だよ襲うって。

オールマイトがそんなことするわけないだろ、常識的に考えて。

まぁ前世の俺が言われたら、喜んでただろうけどさ。

しかし、あれを言うのは割と恥ずかしかった。

イメージ的にはちょっと小悪魔的にさらっというはずだったんだがな。

あまりに恥ずかしすぎて、オールマイトがどんな反応してたかよく覚えてないし。

もしかしたら真っ赤になってたりしたかもしれない。

あ、なんかもったいないことした気分。

でも、正義のために心を捧げたオールマイトが誘惑とかされるのかね？

ある意味では某正義の味方みたいな生き方してるよね、オールマイトって。

凄いとは思うけど、ちゃんと人としての幸せも掴んでほしいな。

俺はそんなオールマイトをサポートしていきたいね。

第十二話　温泉旅行の朝

遂にこの日が来た。

昨日は興奮してあまり眠る事ができなかったが、一日程度の徹夜ならどうにでもなる。

……もしかしたら、今日から二日間眠る事ができないかもしれないがな！

今日から3日は完全にＯＦＦだ。

ナイトアイが本当にオールマイトの力が必要だと思ったら連絡するとの事なので、その言葉に甘えることにした。

普通のＴシャツにジーパンを履いて、一週間前から用意してあるカバンを持つ。

「……いざ、行かん。温泉旅行へ」

今回は駅前で待ち合わせだ。

個性は使わない。

今日はオールマイトではなく、八木俊典として過ごすことになっているのだから。

駅まで歩く道中では心臓がバクバクとしていた。

好きな人と温泉旅行……ＨＡＨＡＨＡＨＡ……

いつもの様に笑おうとして、ふはっと変な笑いが出て思わず口を押えた。
いかん、今の顔は見られたくない。
きっとにやけすぎてて変な顔になっているはずだ。
「落ち着け私……いくら何でもはしゃぎすぎだろう」
自分に言い聞かせながら、待ち合わせ場所に行くと……思わず隠れたくなった。
馬鹿か私は!?
何故こんな普通の服装で来た!?
もう少し考えるべきだろう!?
視線の先にはアリス君が居る。
待ち合わせ２０分前に来たというのに私よりも先に来ていた様だ……だが、問題はそこじゃない。
アリス君の服装だ。
麦わらのカンカン帽に、カーキ色のカーディガン、白色のＴシャツ、ネイビー色をした踝丈のスカート、白いサンダルを履いていて……お洒落をしている様に見えた。
それに比べて私はいつもの普段着である。
これは、まずいんじゃないだろうか？
自分を着飾るような服は自宅にもない。

ならば、急いで買い物をすれば……！

そう思って行動しようとした瞬間、アリス君と目が合った。

ふわりと言う音が付きそうな笑みを浮かべて、私の方へと小走りで駆け寄ってくる。

……その仕草だけで、私の心臓はオーバーヒートしているのだが……。

「おはようございます、俊典さん」

「ッ!?」

名前を呼ばれた瞬間、体に電流が走った気がした。

俊典さん……なんて甘美な響きなんだ……！

感動に打ち震えていると、アリス君の表情が少し曇った。

「あの……名前呼びじゃ馴れ馴れし「そんなことはないぞ！　是非ともそう呼んでくれたまえ！」よかった……俊典さん、なんか固まってるから失礼だったかなって」

安心したように綻ぶ顔をみて、自分を叱咤する。

挨拶すらもしてないじゃないか!!

どれだけ私は浮かれているんだ!?

私の内心を悟られない様にして、できるだけ普通に返す。

「ハハハ、すまない。アリス君の姿に見惚れてしまっ!?」

「え？」

しまった!!
普通に返すつもりがつい余計なこと口走ってしまった!!
むしろそこまで口に出たならそのまま全部言えばよかったものを!!
アリス君を見ると、そこには顔を赤くして照れたように笑う彼女の姿が……
「よかった。マネキンが着ていた一式そのままなんだけど、少し不安だったから」
こういう格好するのは初めてだし、と言ってスカートのすそを摘まんでいる。
ここはもうそのまま褒めて、アピールした方が良いのではないだろうか。
そう考えると『行け！　いったれ！』と叫んでいる元部下と親友が脳裏に浮かぶ。
「その……なんだ……すごく、似合っているよ」
流石に面と向かってはいえず、視線を逸らしながらになったが、これが私の限界だ！
だから『そこは目を見てしっかり言えよ』とか言うな脳内の二人!!
「……見惚れるくらい？」
「ぐぬっ」
思わず言葉に詰まると、アリス君は悪戯気に笑った。
「俊典さんも緊張してたんだ。私もちょっと緊張してたからお相子かな」
「……そういえば、いつもと言葉遣いが違ったね」
私がそういうと、アリス君は少し恥ずかしそうに笑った。

「俊典さんと一緒の旅行だからね。私だって少しくらい緊張するよ」
私は一週間前からずっと緊張しっぱなしだがな!!
内心でそんなことを叫びつつ、笑顔がこぼれる。
「俊典さんの荷物、収納しておくね」
「あぁ、頼むよ」
「ふふ、畏まりました!」
アリス君は楽しそうに笑いながら、私の荷物を魔法陣へと収納した。
「まだ少し時間があるけど、どうする?」
「そうだな……」
正直言えば、アリス君の隣に並んでも恥ずかしくない服を買いに行きたい。
温泉街直通列車が出発するまで、後一時間ほどだ。
荷物はアリス君のお蔭で預ける必要もない。
……ここはやはり、服を買いに行くか……?
「服が気になるの?」
アリス君の言葉にドキッとした。
なぜわかったのだろうか……?
「さっきから自分の服を気にしてるから、そうかなって」

「……いま、私は何も言わなかったよな……？」
「わかりやすい顔してるよ？」
アリス君の言葉に思わず顔を触る。
直正にもそう言われたのだが……あれ？
そこまで私はわかりやすい顔をしているのだろうか？
もしやアリス君を想っていることも……？
そう考えると冷や汗が吹き出る。
「今度は何か隠し事がバレてるのでは!?って顔してるわよ」
アリス君がクスクスと笑いながら言うが、内心を見事に当てられては困る！
直正は友人と思われているようだと言っていたが、いつバレるかもわからないのだ。
誰かに恋をするなんて初めての経験だが、男である私としては気付かれる前にちゃんと思いを伝えたい。
……いっその事開き直って伝えてみるべきだろうか……？
「ど、どうしたの？　なんか凄い真剣な顔してるけど……？」
アリス君を見ると、少し後ずさっていた。
いかんいかん、怖がらせては意味がない上に絵面が悪い。
開き直って伝えるにしても、今は伝えるべきではないな。

フラれてしまえば、この旅行も楽しむことができなくなってしまう。
言うとしても、この旅行が終わってからだな。
……しかし、アピールくらいはするべきだろうか？
アピール……休みの時にぼーっと眺めていた恋愛ドラマぐらいしか思いつかない。
……いや、しかし……ドラマみたいなことをするのは流石に恥ずかしいが……
ええい！男は度胸!!
当たって砕けろ!!
そう決意して、私は恋愛ドラマの内容を思い出して、アリス君に出来そうな事を思い出す。
……羞恥心を今は捨てよう！
「あ、アリス君」
「な、なに？　どうしたの？」
アリス君に声をかけて、少し顔を近づける。
近距離でアリス君の目を見つめる……アリス君は落ち着かないのか目が泳いでいる。
顔も少し赤い……と言う事は照れているのだろうか？
そんな情報を自分で収集しながら、これからの予定を告げた。
「できれば、君の隣にいてもおかしくない服を買いに行きたいのだが」

「……えっ？　ちょ……えええええ？　ど、どういうこと？　え？　一体どういう事!?　何が起きた!?」

私の言葉に動揺しながら狼狽えるアリス君

……あまりにも直球的過ぎたかもしれない……

視線が私の目を見て、すぐさま逸らされてを繰り返しているアリス君は可愛らしいが、

実に可愛らしい仕草だが、私自身、自分の言葉で精神に凄まじいダメージを受けている。

普段の私からは想像できない言葉だ、血を吐きそう。

しかしアピールするならガンガン押していくべき……と登場人物が言っていた。

アリス君が嫌がらない範囲でアピールをしたいが……それほど精神的に余裕がない。

だがやると言ったらやる男なのだ私は！たとえ恥ずかしくてもな！

「せっかく綺麗な女性といるのだから、私も恥ずかしい格好はできないと思ってね」

「ほ、本当にどうしたんだ俊典さん!?　恥ずかしい!!　恥ずかしいから!!」

ついにあわわわと言い始めたアリス君にほっこりしながらも、津波の様に押し寄せて来る羞恥心を押し殺す。

今だけは羞恥心など意識してはいけない。

例え後でのた打ち回ろうとも、今だけは押すのだ私よ！

アリス君の忙しなく動いていた手を掴んで、耳もとで呟いた。

「だめかい？」

「わ、わか、り、ました……ぅぅ……顔が熱い……」

「ありがとう」

アリス君の了承を得ることができたので、できるだけ優しい笑顔を意識して礼を言った。

「ぅぅ……なにこれ……すっごい恥ずかしい……」

小さな声でそう呟いたアリス君は、両手で赤くなった顔を隠しながら俯いた。

ＨＡＨＡＨＡＨＡ!!

言うなアリス君!!今の私は羞恥心を宇宙の彼方へ追いやってこんなナンパな事をしているのだ!!

あまりにも似合わない私の姿に、内心でゴフッと血を吐く気分になりながらも目標を達成した。

アリス君の手を取って、駅前のショッピングモールへ向かう。

アリス君の顔は真っ赤だ。

私の顔も真っ赤だろう。

逃避の限界も近い。
店に移動して、アリス君に服を選んでもらって、更衣室に入った。
そして鏡に映った顔が真っ赤になった私の姿を見て、我慢も限界を迎えた。
鏡から目を逸らすために、手で顔を覆い隠した。
何を言ってるんだ私はーーーーーー!!!!??
耳もとで「だめかい」だと!?
駄目に決まってるだろう!!なんでそこをチョイスした数十分前の私!?
どこの恋愛ドラマだ!?参考にしたのは恋愛ドラマだったな!!
なに影響受けてるのだ私は!?馬鹿なのか!?
筋肉モリモリの私がやっても違和感全開……ってそうじゃないだろう!!
うわあああああああ!!
早く着替えねばならないのに、ここから出たくない!!
お、落ち着けぇ私。
これ以上時間を浪費してはいけない。
「HA、HAHAHA、大丈夫だ、私は大丈夫」
「俊典さん？　何か言った？」
「いや！　なんでもないよ！」

そうだ、この記憶は封印しよう。
今は服を買いに来ただけだ。
そういえば、耳もとで囁いた時、アリス君が顔を赤くして実に可愛かったな……
だから、さっきのやり取りは忘れよう、忘れろ、忘れろって言ってるだろう!!
ぐあああああああ!!!

何とか落ち着いた私は、アリス君と同じようにマネキンが着ていたものをそのまま購入して、着替えて列車へと乗り込んだ。
上がポロシャツになったくらいで、あまり大きな変化はないのだが……これでいいのだろうか?
「私もファッションはよくわからないから……ごめんね?」
「いや、もともと私が選ぶべきものだったからね。むしろ付き合ってくれてありがとう」
「どういたしまして……いつもの俊典さんだ……」
アリス君がぽつりと呟いたことは聞こえなかったことにしておく。
そうでないと、またのた打ち回る。
「温泉街までの直通列車か……すごいな」
温泉街は初めて行くが、普通直通の列車はないのではないだろうか?

「パンフレットには、温泉街の温泉はどれも財閥の社長の個性で見つけた物みたい。何もない状態から温泉街まで開発したって書いてあるね」
アリス君が駅に置いてあったパンフレットを見ながら笑っている。
「温泉を見つける個性か……一体どういう個性なんだろうか」
水を感知するとか、お湯を感知するとかだろうか？
「温泉を見つける個性だって」
「そのままだった!?」
「でもいい個性よね。この個性で温泉同好会の名誉会長になったんだって」
確かに凄く平和的な個性だと思うが。
そんな話をしていると、発車時刻になり列車が動き始めた。
「こうして乗り物に乗るのは久しぶりね」
アリス君が景色が流れる窓の外を見ながら呟いた。
「アリス君の個性だと距離は全く関係ないからね。どうだい久し振りに乗った列車は？」
「時間がゆっくり流れてる気分。こんなにのんびりするのはいつぶりかな」
世界中の病院を文字通り飛び回っているからね。
アリス君を探していた時は中々に捕まえる事ができなくて大変だった。

弟子二人の育成や雄英高校で教師をする準備、施設の管理など、今のアリス君は凄く忙しいからな。

今日から三日は分身を作ってそちらに任せているようだが。

……私よりもアリス君の方がゆっくりと休む必要があると思うのだがな……

私はオールマイトの姿でパトロールしたり、要請があればそちらへ駆けつけたりと、言うほど大変ではない。

最近はアリス君の言いつけ通り週一では休むようにしているから、疲労もほとんどない。

……今日は徹夜の所為で少し眠いが……

落ち着いたら眠くなってきた。

「眠い？」

「いや、大丈夫だ」

「嘘、目の下に少しだけクマができてる」

アリス君の指摘に、内心でしまったと思った。

アリス君が私の体調不良を見逃すわけがなかった。

駅前で言わなかったのは、恐らく私が押せ押せ状態だったからだろう。

「少し眠ったら？　温泉街につくまで1時間はあるんだし」

アリス君がパチンと指を鳴らすと、私達が座っていたボックス席が広くなった。
私でも足を延ばして寝転がれる広さになった。
「この席だけ空間を拡張して、認識阻害を掛けたわ。眠ってても誰にも分からないから、少し眠りなさい。幸い乗客は全然いないし」
ぬぅ……先手を打たれてしまったか……。
ここまでしてもらったのだ、少し眠るとしよう。
「すまない、では少しだけ眠らせてもらうよ」
「えぇ、どうぞ」
せっかく広くしてもらったが、流石に横になって眠るのは恥ずかしいので、深く腰掛けて目を瞑った。
予想以上に眠かったのか、睡魔はすぐにやってきた。
「――――――」
意識が深く落ちる前に、アリス君の声が聞こえた。
何か、やわらかいものを後頭部に感じながら、私の意識は深く眠りについた。

第十三話　温泉旅行の昼

「……ん……りさん……俊典さん」
優し気な声が聞こえて、徐々に意識が覚醒する。
思ったよりも深く熟睡していた様だ。
目を開けると二つの丘と、その向こう側にアリス君の顔が見えた。
何やら悪戯気に笑っている……？
まて、何故アリス君の顔がこんなにも近い!?
「ッ!!!??」
「はい!、いきなり起きないでくださいねー」
跳び起きようとしたら、アリス君に額を押さえられた!?
しかも個性を使っているのか逃げる事ができない!?
「あ、アリス君!?　こ、この体勢は!?」
「膝枕だよ？」
「ぶはっ!?」
ニヤニヤと笑いながら言うアリス君に現実を突きつけられた。

意識してしまえば、一気に顔が赤くなるのがわかった。
何せほんの少し先にはアリス君のやわらかそうな胸が……!!
しかも後頭部には太腿の感触!!
さらにどこか甘い香りが……!!
こ、これはまずい!?
というか、なぜ私は横になっているのだ!?
「アリス君!!　お、起きたいのだが!!」
周りに聞こえないように声を抑えつつ、アリス君にそういった。
「まだ、駄目」
「なぜ!?」
予想外の返答に私が問いかけると、アリス君は楽しそうに笑いながら言った。
「駅前ですっごい恥ずかしかったから、仕返し」
語尾に音符が付きそうなくらいご機嫌そうに仰られた。
「そ、それはすまない!!　だが、起こしたと言う事はそろそろ降りる時間なのでは!?」
「違うよ?」
「え?　で、ではなぜ?」
アリス君は相変わらず笑みを浮かべるだけで、答えてくれない。

一体何故？
そう考えていると、少し離れた席から声が聞こえた。
「切符を拝見します」
ドキッとした。
声のした方へと視線をやる……ボックス席で横になっている所為で見えないが、間違いなく車掌だろう。
いや、まさか……まさかな？
アリス君を見上げると、今度はニヤっと笑った。
「風情があると思わない？　乗る時に切符渡されたでしょ？」
あ、アリス君の笑みが今だけは悪魔の様に見える!!
ついでに背後に悪魔の翼みたいなのが見える!!
「た、頼む!!　アリス君!!　今直ぐこの拘束を解いてくれ!!」
「……私は、駅前で、人に見られながら、あんなこと、されたわけだが……」
あれ、これって怒ってる!?
足音がだんだんと近寄ってきている！
もう猶予はない!!
「すまない!!　だが嘘は一切ないんだ!!　後生だから解放してくれ！」

「え」
!!
身体が動くようになった!!
私はアリス君にぶつからないように、瞬時に体を起こし対面の座席へと腰かけた。
「切符を拝見します」
「……あ、こ、これです」
ま、間に合った……!!
九死に一生を得た気分だ……
車掌が切符を確認して、去っていくのを見て、人心地着いた。
本当に危なかった……流石に人前であんな姿を晒す訳にはいかない。
……人前でなければいいと言う訳でもないが……ほんとだぞ？
脳内で騒いでいる二人に言い訳するようにそう思った。
「アリス君、駅前では本当にすまなかった」
対面に座ったままアリス君に向けて頭を下げる。
まさかそこまで怒るとは思わなかった。
……先程の状態だと、彼女にもダメージが行くと思うんだが……
「……？」

返事がない……ま、まさか話をしたくないほどに怒らせたというのか!?
恐る恐る顔を上げてみると、顔を真っ赤にしたアリス君が居た。
やはり怒らせたか!?と思ったが、怒りの表情ではない。
これは戸惑い……いや、恥ずかしがっている……？何故だ？
「アリス君？」
「ッ!?　な、なに？」
私が声をかけるとビクッと反応して、目を逸らした。
予想外の反応にどうしていいのかわからない。
「その……すまない。不快にさせて」
「ぁ……ううん、大丈夫。ただ、ちょっとした意趣返しのつもりだっただけだから」
もう一度謝ると、アリス君は小さく微笑んでくれた。
その姿にホッとする。
「それに認識阻害をかけてるって言ったでしょ？　だから、俊典さんを膝枕してても車掌さんは気にしなかったよ」
「あぁ、そういえば……」
成程、だから意趣返しか。
タネを知らなければ非常に焦るだろう。

「ところで」
「ん？」
なんだかんだで、ちゃんと配慮してくれている事に安心していると、アリス君がまだ赤みの残る顔で問いかけてきた。
「その……どう、だった？」
「うん？　あぁ、正直生きた心地がしなかった……凄まじいドッキリだったよ」
本当に、人前であのような姿を堂々と晒せる恋人たちは凄いな。
「そっちじゃなくて」
「そっちじゃない？」
アリス君の言葉に首を傾げるが、次に飛び出た言葉に私は思わず噴き出した。
「……膝枕、気持ちよかった？」
「ぶはっ!?」
そっちか!?
よりにもよってそっちの話をするのかアリス君!?
しかもそんな赤くなった顔と潤んだ目で私を見ないでくれ!?
後頭部に感じていた柔らかな感触と甘い香りを思い出してしまう!!
「……よく、なかった？」

煩悩と戦っている私にさらなる追撃が放たれた
やめてくれええ!!
君の今の表情はただでさえ煩悩を思い起こすのだ!!
その言葉も良くない!!
凄まじく脳内を巡る妄想を必死に振り払う。
「……やっぱり私の事を……?」
アリス君が小さく何かを呟いているが、どうする私!?
今の私はどうすればいいのだ!?
ライフカ○ド!!ライフカ○ドを私に!!
そう思った私の脳内にあの二人が出てきた。
その手には正直に言え!と書かれたプラカードを掲げている。
……二人が出てきたことで、何故か冷静になれた。
しかし、なぜこの二人はやたらと脳内で出てくるのだろうか?
そんなことを思いつつ、アリス君を見れば赤い頬に手を当てている。
「あ、アリス君!」
「ひゃい!?」
突然声を掛けたせいか、アリス君は間の抜けた声で返事をした。

恥ずかしかったのか、さっきよりも顔が赤くなっている。
だが、私の顔も負けず劣らず赤いだろう。
小さく深呼吸して、感想を言った。
「凄く、気持ちよかった」
「……そ、そっか……」
この後、私達は会話する事なく温泉街へと到着した。

「すごい」
「あぁ、すごいなこれは」
思わず二人してぽけーっと見上げる。
温泉特有の匂いに、あちらこちらから湯気が昇る町。
どの建物も趣のある和風建築で、マンションの様な建物が一切ない。
この町だけ前時代に迷い込んだ気分だ。
「とりあえず宿にいこっか」
「そうだな。やはり温泉街を巡るときは浴衣だろうか」
「私はその方が良いかな。せっかくの温泉街だし」
楽しそうに言うアリス君に、私も思わず笑みを浮かべる。

列車内では気恥ずかしさから会話ができなくなってしまったが、ようやく普通に会話できるようになった。
パンフレットの地図を見ながら辿り着いた宿にチェックインして、部屋へと案内された。
案内された部屋は二人には少し大きめの和室だった。
畳で寝るのはいつ以来か……なんて考えながら、現実から目を逸らす。
「……寝るところは一緒みたいね」
「まぁ、ペアチケットだったからね」
「……」
ちらりとアリス君を見てみると顔が赤い。
どうやらちゃんと男として意識してくれているようだ……いまはそれがありがたくない。
「……屋内露天風呂があるみたい」
「そ、そうか」
流石にそれを使う事はないだろう。
「じゃ、じゃあ着替えるね」
「う、うむ」

アリス君が脱衣所へと着替えに行ったので、私もさっと着替える。
「……落ち着かない」
……この部屋で、私とアリス君が寝るのだな……
……別に変な意味はないがな！
そんな風に自分に言い訳をしていると、アリス君が着替えを終えた様だ。
「お待たせ」
「いや、そんなにまって、いない」
「俊典さん、意外と浴衣にあってるね」
「アリス君も似合っているよ」
「そう？　ありがとう」
可笑しそうに笑うアリス君と同じように何とかそう返した。
青い花が描かれた浴衣に紺の帯。
私と変わらない浴衣だというのに、アリス君が着るととても綺麗に見えた。
普段はそのまま流されている髪も、今はまとめられている。
確か……お団子と言う髪型だったか……普段は隠れている白いうなじが見えてドキッとする。
視線が思わずうなじへと流れてしまいそうになるが、鉄の意思で抑える。

「それじゃ、行こっか」
「あぁ」
用意されている下駄を履いて、私達は外湯へと出かけた。
早速活躍する直正からもらった情報の温泉へと向かった。
道中は遠目にどんな店があるか眺めつつ、目的地へと向かう。
「ちょっと意外かな。温泉の効能について色々調べてると思わなかった」
アリス君の言葉に苦笑する。
「私も直正たちが教えてくれなければ気にしていなかったと思うよ」
「健康にいいとか、美容にいいとかいろいろ書いてあるわね。効能とか全然気にしてなかったわ」
「せっかく薦めてくれたんだ。どうせだから書いてあるように巡ってみようと思うんだが、どうだろう?」
私の言葉に、アリス君は笑顔で頷いてくれた。
「賛成。せっかく教えてくれたんだから試してみようよ」
「まぁ、私に美白やら美容やらは全く関係ないと思うがね」
「美容を気にする俊典さんも面白そうだけどね」
そんなたわいもない話をしながら、目的地へと着いた。

「それじゃあ、またあとでね」
「あぁ、ゆっくりしてくると良い」
「俊典さんもね」
「そうだったな」
軽いやり取りを終えて、脱衣所へと入る。
私もゆっくりと温泉を楽しむとしよう。
入った温泉は美容関連だった為か、少しぬるっとしている気がした。
そういった成分なのだろうか？
温泉も数多くある所為か、入浴客はあまりいなかったので、ゆっくりとできた。
サウナなどもあったが、これから色々と巡るならのぼせないように早めに上がった方が良いだろうと判断して、あまり長湯はしなかった。
時間にして一時間も立たぬうちに外へと出た。
「あ、俊典さん」
隣から声がアリス君の声が聞こえた。
どうやら彼女も今出てきたばかりの様だ。
「アリス君、もういいのかい？」

女性は準備なども含めるともう少し時間が掛かるものだと思っていたのだが。
「色々と浸かりたいから、あまり長湯しないようにしただけだよ」
どうやら考える事は一緒だったようだ。
「私も同じようなものだ」
「ふふふ、出てくる時間が一緒ってすごい偶然だね」
微笑むアリス君を見つつ、何とか冷静さを保つ。
今のアリス君は何というか……凄く色っぽい。
白い肌は湯上り故にほんのりと赤く色づいているし、湯上りで熱いからか鎖骨が見える程度に浴衣が開いている。
……私は耐えられるのだろうか？
「それじゃあ次に行こうよ。温泉ってすごく気持ちよかったから、次にも期待だね」
「そうだね、私も心地よかったよ」
お互いに先程の温泉の感想などを話しつつ、次の温泉へと向かう。
私と言えば、多少緊張はするものの穏やかに過ごせていた。
二人で色んな温泉に浸かりながらふと思った。
ヒーローとして働き始めてから、こんなにもゆっくりとした時間を過ごすとは思わなかった。

オール・フォー・ワンとの戦いで重傷を負った時は、正直もうダメだと思ったこともあった。

こうして、何気ない平和な日常を楽しめるのも、全て君のお蔭なんだ。

ヒーローで在れるのも、こうして八木俊典として君に恋する事が出来たのも。

全部君がいてくれたお蔭なんだ。

君が居なければ、私は屈していたかもしれない。

君が居なければ、直正たちの気持ちに気が付かなかったかもしれない。

私の、ヒーローとしてではなく人としての幸せを、願ってくれている人がいると言う事に気が付かなかったかもしれない。

……何より、護りたいと思える人ができた。

共に居たいと思える人ができた。

なぁ、アリス君。

私は誰かと共になるなんて考えたことがなかったんだ。

平和の象徴として、私の人生（いのち）を捧げるつもりだった。

今の私にそのつもりはない。

君がいてくれたからだ。

私は最初の平和の旗となった。

そして、次代の旗を担う可能性を君が見せてくれた。
君が見つけて育てた弟子達。
君のシミュレーターを使って強くなったヒーローたち。
私は平和の旗を自分の命と共に燃やし続けながら果てなくていいのだと。
一人で世界を背負う必要はないのだと、いつか君に言って聞かせた言葉は、私自身にも当てはまったのだ。
私がするべき事は、平和の旗と共に燃え尽きる事ではない。
平和の旗を誰かへと引き継ぐ事なのだ。

……温泉に浸かりながら変なことを考えてしまったな。
直正が、ナイトアイが、アリス君が、私個人の幸せを願ってくれている。
だから幸せになる努力をしてみよう。
そして、私の隣にアリス君がいて、笑っていてくれればとても嬉しい。
誰よりも強い個性を持って居ながら、その個性ゆえに苦しんだ彼女が。
苦しみながらも誰かの為に行動できる彼女が。

とても愛おしいのだ。

いつか、君にこの思いを伝えたい。
ありったけの感謝と、ありったけの想いを。
その時、君は笑ってくれるだろうか？
それとも泣いてしまうだろうか？
未来の事はわからない。
けれども、その未来を君と共に歩みたい。
まるで詩人の様な事を思っているなと苦笑して、それでも彼女を思う。
あぁ、アリス君の事が好きだなと。

そんな私の想いは、早くも報われる形となった。
だがしかし、これは試練だ!!
というか、なぜこんなことになっているのだ!?
温泉街を巡り終えて、宿で豪華な和食料理を食べて、最後に屋内露天風呂に入ることなったのだが……!!
「俊典さん、お背中、流しますよ」
顔を真っ赤にして、バスタオルを巻いただけのアリス君が乱入してくると言う急展開によって!!

本当にどうしてこうなった!?

第十四話　温泉旅行の夜

一体何が起きているんだ？
と言うか、これは今までで一番ヤバい状態ではないだろうか？
もはや緊張の極致に至っている所為か、逆に冷静になってきたぞ。
「どう、ですか？　気持ちいい、です？」
ごしごしと背中を洗ってくれているアリス君が聞いてくる。
「あぁ、気持ちいいよ」
「よかった、です」
どうやらアリス君は凄く緊張しているようだ。
敬語になっている、と冷静に分析できるくらいには今の私は冷静だ。
そして、絶対に前は見せられない状態である事もまた事実である。
私は男として枯れていないからな！
好きな人の裸体が後ろにあると考えたらこうなるのも当然だ。
当然だとわかっている。
だが、この状態はまずいのだ。

……だから、我が分身よ……君も少し落ち着いてくれないだろうか……？
と言うか、何故アリス君は一緒に露天風呂に入ろうと考えたのだろうか？
そんなことを考えていると、背中にタオルとは違う感触がした。
「ッ!?　あ、アリス君……どうしたんだい……!?」
まさか手で背中に触れてくるだと!?
君は私を試しているのかい!?
すべすべしたアリス君の手が、私の背中を撫でまわしている!!
「……大きな、背中、ですね……」
聞こえてきたアリス君の声色に、私が感じていた緊張は一気に心配へと変わった。
今のアリス君の声には、何かに怯えている様な気がしたのだ。
よくよく考えてみれば、今のアリス君の行動はどこかおかしい。
確かにいつもは異性に対してどこか無防備な所があるが、ギリギリの所で一線は引いていた。
だというのに、今のアリス君にはそれがない。
「どうしたんだい？　今のアリス君は、どこか変だよ？」
「……」
私の問いかけに、アリス君は黙り込んだ。

何を考えて、こういった行動に出たのだろう。
君はまだ、何かを抱えているのだろうか？
「私で力になれる事ならなんでも言ってくれ。私は、いつでもアリス君の力になりたいと思っている」
「……ずるいなぁ……」
「ずるい？」
アリス君が背後で苦笑する気配を感じながら首を傾げた。
「俊典さん、私の背中も流してもらえます？」
「なっ!?」
思わず振り向きそうになったが、今アリス君の方を見るわけにはいかなかった。
「ダメ、かな？」
「……わかった」
少し悲し気な声色に私は、覚悟を決めるしかなかった。
私は腰にタオルを巻く……我が分身の所為でタオルが意味をなさないが……アリス君の気配が座るのを感じてからその背後へと移動した。
軽く深呼吸してから、目を開けた。
「ッ！」

アリス君の肌を隠していたバスタオルは外され、アリス君が前を隠すようにして持っている。

白く、綺麗な肌だ。

タオルが外されたせいで、普段は絶対に見ることがないだろうお尻まで見えてしまう。

ごくりと唾を呑みこんでしまった。

先程までアリス君が使っていたタオルで、その肌が傷つかないようにゆっくりとその背中を洗った。

「ンッ……ちょ、っと……くすぐったい……もっと強くて大丈夫だよ」

「ッ……す、すまない」

ピクンと身を震わせて、笑いを堪える様に言うアリス君の言葉に従って、もう少し強く背中を擦る。

無心だ、今は無心になるのだ。

アリス君がなぜこんなこと言いだしたのか問いかけたいが、今だ臨戦状態分身を鏡に映らないようにすることが先決である。

次いで言うと、鏡を見ないようにするのも大事だ。

タオルは白いのだ。

二重にしていなければ、絶対に透ける。
私の視神経は全て、アリス君の背中しか見てはいけない。
その下のやわらかそうなお尻とか気にしてはいけない。
いけない、いけないのだ。

そうして、私は戦い抜いた。
私はすぐさま自身の体を流して、露天風呂へと逃げ込んだ。
過去最大の試練だった。
濁り湯で助かった。
臨戦状態の分身の姿を完全に隠すことに成功したのだ。
……風呂から出ればよかったのではないだろうか？
いや、今のアリス君を放置して逃げるわけには……いや、風呂に逃げてしまったが。

そんなことを考えてると、チャプンと言う音とアリス君の気配がした。
アリス君の気配が、近い。
「あ、アリス君……近くないかい？」
「そう、かも」

は、離れるつもりはないようだ。
私の試練はまだ続くというのか!?
少しすると、パチンという音がして明かりが消えたのがわかった。
「俊典さん、空、すごい綺麗だよ」
アリス君の言葉に私は顔を上げてから瞼を開いた。
「……すごいな」
満点の星空だった。
今日は新月なのか月明りもなく、星しか見えない。
まだ宿の明かりはあるはずなのに、ここまではっきりと見えるのか。
「ちょっとずるして、私達には星が良く見えるようにしてみた」
「ハハハ、確かに少しずるいかもしれないが、これも露天風呂の醍醐味だね」
どんなふうに個性を使ったのかわからないが、風呂に浸かりながらこの空が見えるとはすごい贅沢な事だ。
人工の明かりがある町では、こういった星空は見ることができないだろう。
風呂の明かりも消されているお蔭か、落ち着いてきた。
「……ねぇ、俊典さん」
「なんだい？」

星空を見上げながら、アリス君の言葉を待つ。
「もしかして……なんだけどね？　その……わ、私の事……恋愛的な「ま、まってくれ!!
アリス君！」ハ、ハイ、ナンデショウカ？」
予想外の言葉が飛び出てきて、私は咄嗟にその言葉を止めてアリス君を見た。
カタコトになりつつ、私から目を逸らすアリス君を見て冷や汗を流す。
暗い中でもわかる、アリス君の顔が赤い！
これは完全に気付かれてる!?
アピールして意識させる事には成功した様だが、まさか早々に確かめに来るとは!?
これはもう行くしかない。
そうでなければ、アリス君から確認を取られてしまう！
もう手遅れな気がしないでもないが、伝えるなら男である私からだと決めているのだ！
大きく深呼吸して、アリス君に向き直る。
「アリス君」
「……はぃ……」
アリス君は消え入りそうな声を発して、赤い顔で私と目を合わせた。

「私は」
さぁ、覚悟を決めろ私。
「アリス君の事が」
後の事は考えるな。
今は、私が抱いてきたありったけの想いをこの声に乗せて
「好きだ」
伝えるのだ。

「……私も……」
「ッ！」
顔を赤くして、潤んだ瞳で私見て、嬉しそうに笑った。
「私も、俊典さんが、好きです」
「……よかった……」
ハァーと大きく息をついた。
一緒に風呂に入っているから嫌われていることはないだろうとは思っていたが、それでも非常に心臓に悪い時間だった。
ほんの数秒でしかなかったはずだが、告白とは思いのほか勇気がいるものだな。

そんなことを思っていると、アリス君が手を重ねて、寄りかかってきた。
思わず固まった。
私の手にはアリス君の手が重ねられているが、それだけじゃない。
腕に、やわらかいものが当たってる。
しかもタオルの感触がないだと!?
不用意に腕を動かせば……柔らかさの中にある硬いものを見つけてしまうかもしれない……!!
私の試練はまだ終わってなかったのか!?
再び臨戦状態になり始めた分身に嘆きつつ、アリス君に声を掛けた。
「あ、アリス君」
「なぁに?」
甘い、声が聞こえた。
声を掛けない方が良かったかもしれない。
「ねぇ俊典さん」
「な、なんだい?」
アリス君の声に戸惑いながら、返事をすると予想外の言葉が飛び出してきた。
「防音に除き防止の結界、それから今から一時間経つか、ヴィランについての連絡がある

まで私の個性は一切使えない様にしたわ」
「なっ!?　なぜ!?」
思わずアリス君の方を見ると、胸の先にあるピンク色の物が目に移り、即座に視線をアリス君の顔に固定した。
よ、予想外に体を湯の外に出していた!!
そしてアリス君!!
その劣情を催す様な色気に満ちた表情はやめてくれないだろうか!?
「私は、俊典さんの為なら何でもするって……いったよ?」
「い、いや、待ちたまえ、アリス君!」
「こうして、一緒にお風呂に入ったのも、俊典さんの気持ちを知る為だった。だから、こうして煽るような事をしたの」
「そ、そうか。だが、それで私は思いを伝えられたんだ。結果的に見ればＯＫではないだろうか?」
「でも、辛いでしょ?」
アリス君の視線が、濁り湯の中にある私の下半身へと向けられる。
「いやいやいや!　大丈夫だ!　何も問題はないよ!?」
私がそういうと、アリス君は恥ずかし気に微笑んだ。

「好きに、して、いいよ？　抵抗、しないから」
「ぐはぁ!?」
や、やめてくれ!!
いくらなんでも早すぎるだろう!?
気持ちが伝わって即合体は……って何考えてるんだ私は!?
「私、少し感じやすいから、するなら、手加減して、ね？」
アリス君は最後まで言い切ると、逃げる様に目を閉じた。
煽るような事を言うなああ!!
というか、感じやすいとか言うんじゃない!!
襲いたくなってしまうだろう!!
開いている片手で自分の頭を鷲掴みにする。
痛みで何とか冷静になれないだろうか!?
この状態からどうやって逃げればいい!?
助けてくれ脳内の二人!!
私がそう願うと、脳内のナイトアイと直正がサムズアップしてボードを掲げた。
『ヤっちまえ！　ヘタレ！』
できるかあああ!!

脳内の二人まで敵だった！
だ、だがこのままだとアリス君に恥をかかせるのではないか!?
男からでも勇気がいる行為だろうに、女性にさせてそのまま放置は心に傷をつけてしまうのではないだろうか!?
な、何かせねば!!
そうして、焦っている内にアリス君が目を開けようとする気配を感じた。
ええい!!男は度胸!!
私は瞬時にそう決心して、アリス君の肩を掴み、その唇へとキスをした。
「っ」
アリス君の息を飲む気配を感じた。
ただ唇と唇を合わせているだけなのに、頭が真っ白になる気がした。
心臓が痛いほどに高鳴っているのに、私の神経はアリス君の唇に集中していた。
ただ、甘く感じた。
ずっとこうして居たいと思えるほど、不思議な時間だった。
唇を離すと、アリス君が小さく息を吸った。
目の焦点が合わず、どこかのぼせたようにぼーっとしている。
それは私も同じかもしれない。

何処か現実味がなく、夢心地だ。
「……もう、いっかい……」
「……わかった……」
何故、キスだけでこんなにも暖かな気持ちになれるのだろう。
先程の様に唇をただ合わせるだけの行為が、なぜこんなにも心に響くのだろう。
「……っはぁ……」
アリス君が唇を離して小さく息継ぎをする。
目じりからは涙が流れている。
「……ふしぎ、なんで、なみだがでるんだろう……」
どこか幼い口調で、涙を流しながらアリス君は呟いた。
その問いの答えを私は持っていない。
だが、私もアリス君と同じ気持ちだった。
「としのりさんも、ないてるの……？」
「あぁ……なぜだろうね……胸が苦しいんだ」
「わたしも、すごく、くるしいよ」
アリス君がぎゅっと私に抱き着いてきた。
私もアリス君の体を逃がさないように強く抱きしめた。

何なんだろうこの気持ちは。
先程まで感じていた劣情が何処かへ消え去り、代わりに感じるのは狂おしい程にあふれ出す幸せの感情。
思いが通じると、誰もがこんな気持ちになるのだろうか？
ただ、今だけは。
アリス君をこうして抱きしめていたい。
そう思った。

その後、正気に戻った私達は顔を真っ赤にして床に就いた。
あまりの恥ずかしさに、お互い背を向けて横になっていた。
あまりにも恥ずかしくて、二人して朝まで眠れなかったのは言うまでもないことだろう。
明らかに寝不足な顔で外湯に向かう私達を見た従業員が、直正たちの様な笑みを浮かべていたが気にする事じゃないはずだ！

第十五話　温泉旅行の終わり

「……全然眠れなかった」
カーテンの隙間から入り込んでくる朝日に目を細める。
少しだけ眠ることができたが、全然眠り足りないな。
とりあえず、起きて支度しよう。
「……んぅ」
「……」
身体を起こそうとして、右手に何かやわらかいものに触れた。
一瞬で冷や汗が吹きでる。
この柔らかさ……覚えがある……!!
ギギギギと音がしそうな感じで首を横に動かすと、何故かアリス君が私と同じ布団で寝ていた。
「……」
そして、私の手は現在、彼女の胸に乗せられている……!!
離さなければ!!

そう思うのに、体は全く反応する事なく固まっている。
アリス君が起きる前に！
起きる前に離さねば大変なことになるぞ私!!
脳内では二人がそのまま『ヤッちまえ！』なんて叫んでいるが、そんなことできるか!!
というか、何故体が動かない!?
「……とし、のり……さん？」
そうこうしている内に、アリス君が目を覚ました。
アリス君の視線が驚きの所為か、目を大きく見開き、視線が自分の胸を触っている私の手と私の顔を行き来して、顔を赤くして涙を浮かべ始めた。
「あ、アリス君……これは、その……」
未だに全く動こうとしない右手に、私は絶望した。
アリス君は、涙目のまま私を見て……
「……えっと……その、さ、流石に朝からスるのは……」
「否定したいのだが否定できない状況だなこれは……!!」
と言うかこの状況でそんなことを言わないでくれ!!
本当に襲ってしまうじゃないか!!

そんな朝のハプニングから一転して、お互い真っ赤な状態で朝食を取って外湯へと向かった。

見送りをしてくれた女将さんの笑みが、直正と同じような笑みだったのは気にしてはいけないのだろう。

そんなことをグダグダと考えながら、この状況をどうにかしなければならないと、内心で頭を抱える。

「……」

「……」

無言である。

圧倒的無言である。

完全無欠の無言である。

私とアリス君は無言で温泉街を歩いているのである。

アリス君の顔を見てしまうと、昨日の温泉でのことや朝の出来事を思い出してしまい、顔が熱くなるので視線を向けないようにしている。

こ、恋人相手にどうかと思うが、浴衣で臨戦態勢になったら隠す術がないので仕方ないのだ……そう言う事にしておいてほしい。

……想いが通じ合ったはずなのに、何故か事態は前よりも後退している気がする……なぜだ。

脳内では直正達が大ブーイングしている。

やれ、手を繋げ、話をしろ、恋人を放って何してんだなどなど……いや、これは私自身が思っている事だが、あの二人が脳内に出てくるのはなぜだ。

特にナイトアイ……君ってそんなキャラじゃなかっただろう。と脳内の彼にツッコミを入れてみるが、意味のない事だ。

ちらりとアリス君を見てみると、アリス君も私を見ていたらしく視線が合った。

次の瞬間には顔を赤くして、胸元を押さえながら俯いていく。

非常に可愛らしい仕草だが、その胸元を押さえているのは朝の出来事の所為かな？

あ、いかん。

思い出すな私。

あの感触を思い出してはいけない。

何とか自制する事が出来た私は、やはり内心で頭を抱える。

私は今までどうやってアリス君に接していた!?

普通ってどんなだ!?

脳内が大混乱である。

どうすればいい!?

そんなことを考えていると、手にアリス君の手が当たった。

「ッ」

心臓が跳ねた。

アリス君は遠慮がちに私の小指を握ってきた。

アリス君を見れば、顔は見えないが、見えている耳からうなじまでが真っ赤だった。

「うぅ～……なんだこれ……いつもの私はどこ行った……どうやって話してた……？

朝の出来事の所為？　いやいや、昨日自分で迫っときながらそんな訳が……あれ、思い返すとなんか凄く恥ずかしい……そんなバカな!?」

小さな声でそんなことを言っているのが聞こえた。

どうやら今更ながらに、混浴したことが恥ずかしかったようだ。

……これなら今後迫られることはなさそうだ。

正直、昨日みたいな感じで迫られると本当にいつか襲ってしまいそうだったので助かる。

さて……いい加減このままにもしておけない。

せっかく旅行に来ているのだから、楽しんでいかねば。

その為には……年長者であり、男である私から何かうまい話題を……!!

「し、仕事は、どうだい？」
「う、うん、順調、です」
「そ、そうか」
「……」
駄目だ！
誰か助けくれ!!
脳内の二人!!
やれやれと首を振らずに私に話題を!!
今こそ君たちの助けが必要なんだ！
そう願っていると、直正が何かが書かれたホワイトボードを掲げた。
『普通に話せよ』
それができたら苦労していない!!
そしたら次はナイトアイが何かを書いた。
『ヤったれ』
ぐあああああ!!
や、やはり脳内の二人ではだめだ!!
どうにかこの状況を打破しなくては!!

温泉に浸かっては感想を言って、無言。
そんなことを繰り返していてら、あっという間に夜になってしまった。
食事も終わり、今度はアリス君が風呂に突撃してくることもなく、就寝するだけになってしまった。
……いくら何でもヘタレすぎるだろう……
気が付けば、二人して布団の上で正座して向かい合っていた。
だがしかし、視線は相変わらず天井を見ていたり、俯いていたりと相手を見ていなかった。
「大丈夫、大丈夫、恥ずかしくない、恥ずかしくない、むしろのこのままの方がイヤ、女は度胸、度胸」
天井のシミを数えていると、アリス君が何かを呟いていた。
それが気になって視線を向けると、アリス君も私を見ていた。
今度は赤くなりつつも、視線を外さない。
その視線に私の方が視線をそらしてしまった。
『ヘタレ!!』
脳内の二人に叫ばれた。
返す言葉もない……

「俊典さん」
そんなことを考えていると、アリス君が歩み寄ってきて声を掛けきた。
流石に目を逸らしたまま会話するのは失礼だ。
「な、なんだい」
声を返しながらアリス君を見上げた瞬間、布団に横になる様に押し倒された。
「……アリス君?!」
「……」
突然の事態に思わず声を上げるが、アリス君は真っ赤になったまま私の胸に顔を押し付けてきた。
「あ、アリス君……?」
「こ、このまま、いっしょに、ねよ?」
「んなぁ!?」
真っ赤で潤んだ瞳で、甘える様に言うアリス君にこっちまで顔が熱くなった。
そんな私を見て、アリス君は縋りつくように抱き着いてきた。
「ねむる、だけだから、ね?」
「あ、あぁ……わかった」
私が了承すると、アリス君は少し安心したように笑って、指を振るった。

すると、カチッと言う音と共に部屋が暗くなった。
「……便利な物だね」
暗くなったおかげで、少しだけ冷静になった私の口から言葉が漏れた。
クスッと小さく笑う声が聞こえた。
「何でもできるからね」
行き場のなくなった腕をどうしようかと彷徨わせていると、アリス君が腕を捕まえて自分の頭の下に持ってきた。
こ、これは腕枕と言うやつではないか!?
「……いい？」
「あ、あぁ、構わないよ」
「ありがとう」
暗くなった視界でもアリス君が微笑んでいるのがわかった。
「大丈夫？　しびれとかない？」
「全然ないな……何かしているのかい？」
「？　何もしてないよ？」
軽すぎではないだろうか？
「ひゃっ!?」

左腕でアリス君の背中に手を回して、抱き寄せてみる。
やっぱり軽いな……
「アリス君、ちゃんと食べてる……ね。もっと食べた方が良いんじゃないかい？」
「……女に重くなれって、叩かれても知らないわよ」
可笑しそうに笑いながら、軽く胸を叩かれた。
「それはすまない。けど、君は軽すぎとおもうのだが……」
「こら、それ以上言わない。大丈夫だから」
「わ、わかった」
「……」
「……」
いつの間にか普通に喋れていた。
その事に安心する。
流石に、ろくに話もできない状態になってしまうのは、私としても嫌だからな。
「……これでもダメだったら、忘れさせようと思ってたわ」
アリス君が小さく呟いた言葉が聞こえた瞬間、左腕でアリス君の肩を掴んで思わず叫んでいた。
「それは駄目だ!!」

「ふえっ!?」

暗闇に慣れ始めた目にはアリス君が、驚いて目を丸くしていた。

ヘタレな私の行動の所為だが、それでも今の言葉だけは許容できなかった。

「アリス君、私は君と両想いになれて幸せなんだ。だから、忘れさせるなんて言わないでくれ。私は君と過ごした日々を一日たりとも忘れたくない。絶対だ。君と初めて出会った日も、友人として過ごした日々も、君を想っていた日々も、昨日の出来事も、全て私の大事な、宝物で大切な記憶なんだ。だから、何があろうと絶対に忘れさせるなんて言わないでくれ……!」

「わ、わかったわ……その、ごめん、なさい……」

真剣にアリス君にそう頼むと、アリス君は顔を赤くして目を逸らした。

ふと気が付いた、いつの間にか私はアリス君に覆いかぶさるような格好になっている。

『おー、押し倒すとはなかなかやるね、オールマイト!』

『ついにオールマイトも男になる日が来たんですね』

脳内の二人がそんな会話をしていた。

冷や汗が流れる。

「……ふふふ、全く……」

そんな私に気が付いたのか、アリス君は小さく微笑んで、私の浴衣の襟をつかんだ。
チュッと言う音と共に、アリス君の顔が離れていく。
「待ってるから」
慈愛の籠った笑みでそう言われ、私も自然と笑みをこぼしていた。
「ヘタレですまない」
「いいの。そんな所も……その、すき、だから」
頬を赤く染めながらも、真っ直ぐ見つめられながら言われては、照れてしまうじゃないか。
「……あまり煽るようなことは言わないでくれ」
「ヤダ。その理性の牙城いつか崩してやるわ」
悪戯気に笑うアリス君に苦笑する。
「お手柔らかに頼むよ」
アリス君にまた腕枕をして、抱き寄せる。
腕の中でアリス君が目を丸くしていた。
「早速その気になった?」
「寝るだけだよね?」
「ふふふ、そうね。寝るだけだわ」

そう言って、私たちの会話は終わった。
しばらくして、すーッという寝息が聞こえてきた。
少しだけ体を離して、アリス君の顔を見る。
あどけない寝顔に小さく笑みが浮かぶ。
それと同時に、この幸せを護る為に、けじめをつけなければならない。
オール・フォー・ワン。
彼との決着を早々につけなければ。
彼と決着をつけた時、その時にはアリス君を……

★　★　★　★

V月D日　温泉旅行たのしかった
2泊3日の温泉旅行から帰ってきた。
まさか、オールマイトと恋人になる日が来るとは思わなかった。
オールマイトの事は好意的に思ってたし、なんかこっちに好意ありげな行動するもんだから意識して仕方なかったぜ。
流石は原作屈指のヒロイン、あざといぜ。

あっさりと落とされた俺はチョロインですかね。
さて、恋人になったのは良いんだけど……何すればいいんだろ？
家政婦みたいなことしてたけど、それって押しかけ女房みたいな感じだよね。
今更ながらに。
えっちなことは、残念ながらあっちがヘタレちゃったのでしばらくはないだろうし。
いや、正直な所助かったんだけどね。
俊典さんってガタイが良いから、きっとあっちもデカい。
もしかしたらエロ同人みたいなマグナムしてるかもしれない。
……俺って耐えられるのだろうか？
女は男の2倍気持ちいいとか聞いて一度試してみたけど、ヤバかった。
一度自家発電してみた時感度がヤバくて、徐々に上ってくる感覚が怖くなって途中でやめた。
言うなれば、今の俺は性的経験ＬＶ１である。
知識ならめっちゃあるけど。
……破瓜の痛みに耐えれるだろうか……
それ以前に、俊典さんの愛撫に耐えれるだろうか……
漫画みたいに意識が飛んだりする？

いや、でもあれは現実には……いや、そもそもこの世界は漫画の世界……（以降意味のない考察が延々と続いている）

第十六話　色々大変です

○月▽日　頑張ろう

俊典さんを誘惑するために、色んな服装を試してみることにした。

とりあえず、今回は前世で好きだったクリーム色のハイネックでノースリーブたてセタ、紺色のロングスカート、後、黒いストッキングをつけてみた。

鏡で見た感想は、前世だったらドストライクな格好だった。

肩口まで曝け出された白い腕が眩しいぜ。

せっかくなので長い金髪も編み込んで左肩から前に垂らす感じにしてみた。

ますます好みです。

前世でお知り合いになりたかった……どっちも自分になるわけだけど。

けど、自分が好きだったからと言って俊典さんが好きかどうかはわからないのだ。

顔赤くして、似合うって言ってくれたけど。

えへへへ、可愛いっていってくれた。

ちょっと年齢的に若作りしすぎかなとも思ったけど、よかったぁ。

はっ！

いかんいかん、音声認識による自動書記だからいらんことまで記載されてしまった。
……まぁいいか、前の日記とか読んでて面白かったし。
今度はどんな服装すればいいかな。
雑誌とか見てるけど、正直よくわからない。
客観的に見て、可愛いなって思うものを着ていくしかないかな。
俺の好みにしかならないけど……
……そろそろ俺っていうのも言い辛くなってきたなぁ……
けど、前世からずっと同じ自我を持ち続けてる自分としては、前の自分も否定したくないんだよね……
前世は前世、今は今だけど、俺の視点ではずっと続いている訳だし、想現アリスは前世の自分が居たからこそ成り立っているんだ……
……だから、俊典さんには、いつか俺が転生していることを、打ち明けたいな……
男だった俺も、女になった私も、全部含めて、受け入れてくれるかな……？
……やっぱり、気持ち悪いって思うかな……？
もしかしたら、拒絶されるかもしれない、嫌われるかもしれない……
それでも、私の全てを知ってほしいって思うのは……バカな事なのかな……？
自分だったら、どうだろう……付き合ってた子が私は前世で男だったんだって言われ

たら……
仮に俊典さんの前世が女だったら……あ、やっぱりってなりそうだわ（笑）
……こわい、なぁ……
○月■日　なんで気付かれた
久し振りに俊典さんが、イズくんの修行を見に来た。
普通に修行を見ていたはずなのに、休憩の時にいきなりイズくんに「おめでとうございます」って言われた。
突然すぎて「何の事？」って聞いたら「お二人共お付き合いされるんですよね？」って笑顔で言われたよ。
なんで気付かれたんだろう？
イズくんに聞いても「誰でも見ればわかると思います」って苦笑されたし。
なにかおかしなことしたかな……まったく覚えがないんだけど。
けど、イズくんの言う通りだったらしい。
まさか、かっちゃんにまで「……おめでとう」って言われると思わなかった。
その時の俺は凄い驚いた顔してたと思う。
正直、自分の耳を疑ったよ。
だって、かっちゃんが顔背けながらも祝福してきたんだよ？

自分の耳の異常じゃないとわかったら、天変地異の前触れかと思ったよ。
なんとか、ありがとうって言えた自分を褒めてあげたいね！
けど、今思うとかっちゃんの精神の成長をほめてあげたい気分だな。
会ったばかりの彼ならそんなこと全く気にしなかったと思うし。
ちょっとは敬ってもらってるのかな？
最初の頃の彼なら何も言わなかったと思うし。
イズくんが成長する事で、かっちゃんが負けじと成長する。
かっちゃんが成長する事で、イズくんも負けるかと努力する。
何この無限ループ。
実際彼らの実力が半端ない。
戦闘力で言えば、プロヒーローにも劣らないと思う。
実際俊典さんも同じ意見だったし。
……こんなチートな二人が入学試験受けるの？
原作と同じ試験だとしたら、彼らだけで殲滅できそう。
……入学試験、シミュレータールームを使う様に申請しておこう。
追記
見ればわかるって言ってたから、俺の行動に何かあると見た。

これから気を付けておこうと思う。

○月@日　勘弁してください

……どうしてこうなった……

いや、シミュレーターの利点を考えればわかっていた事ではある。

けど、だからって、なんで連名で要請が……

防衛省長官、警視庁、消防庁、国家公安委員会……どれもこれもビックネームで、胃が……!

別口からは世界各国の病院からシミュレーターを使った新教育の相談、学界からもシミュレーターでどこまで研究可能なのか、現実と全く変わらないのなら是非とも利用権をなんて来ている。

校長からも他のヒーロー養成学校から同じシミュレーターを設置してほしいって話が来ているって……

というか、どこから病院に話が漏れた!?

来年……いや、あと数カ月もすれば俺は教師になるのだから、その準備をしたいのだが……!

……しばらく、俊典さんとは会えないかな。

まずは、国家公安委員会と話をして、その次は防衛省長官、病院、養成学校って流れかな。
流石に全国に一つっていう事は無理。
っていうか、そうしたら時間が足りない。
そこら辺の案もまとめて……これ、絶対に他の国からも来るよね。
先進国からは要請が来るかも。
シミュレーターは使い方によっては戦争も想定できるから、設置は国に相談って事になる……？
あ、ヤバい。
ちょっと考えただけで頭痛い。
……俺って教師できるのか？
なんか、このままだとまずい気がする。
いや、いざとなれば本気で個性使って逃げるけど。
……責任が重い……!!
いや、これで平和になるならやるけど！
付き合い始めて仕事に付きっ切り？
……絶対分身使って休む。

せっかく両想いになれたのに、仕事の所為で破局とか絶対ヤダ。
とにかくやってやるわよチクショウメェ！

◎月×日　つかれたよ
分身を使って、記憶共有も使って、個性で疲れもとってるのに、精神的に非常に疲れてまーす。
あはははははは、俊典さんの膝かたーい。
アリス君、なんで本に向かって喋ってるんだい？
これ？音声認識を使った自動書記の日記ですよー、これ使ってその日の出来事を記録してるのー。
音声認識……それって今私が喋っていることも記録されているってことかな？
そうだよー、後で読み返した時、こんなこと呟いてたんだーってこともあって面白いの。
そうか……しかし、日記をつけるなら一日の終わりにするものでは？
今日の私の仕事はもうおわりでーす。もう仕事したくない。あたまいたい、つかれた。ただ単に利用されないように色々としてるのだー、おかげでせいしんはいっぱいいっぱいですよー。

あー、それは見ればわかるよ……大分参っているみたいだね。
わたしの精神はつよくないのだー、アハハハハハ
これは重症だな……日記は後にして今は寝ておきなさい。
としのりさんがおかあさんみたいなこといってるー、あ、気持ちいい、もっと撫でてー。
そこはせめて父にしてくれ……ほら、撫でてあげるから眠りなさい。
けど、せっかくとしのりさんと、いるんだ、から……もう少し、しゃべりたい……
……全く、嬉しい事を……起きてから話そう。アリス君は頑張りすぎだ。
だって……としのりさん、とやく、そく、した、か、ら、もっと、がん、ばるぅ……
スゥー
ッ……寝たか……かなり疲れていたみたいだな。今日のアリス君は子供みたいだったな、ハハ。
……アリス君、私との約束を守ろうとしてくれるのは嬉しいが……もっと自分を大事にしてくれ。
約束も大切だが、それよりも君の方がずっと大事なんだ。
……起きている時に、こんなこと言えないな……ッ!?
しまった！本が開いていると言う事は今の言葉が!?

消すことは……人の物を勝手にできん……諦めるしか、ないか……

◎月□日　黒歴史確定

なんてこったい……昨日の私の痴態が完全に記録されてる……

俊典さん、やたらと日記を気にしてたのはこの所為かー。

どうせなら、直接聞きたかったな……

……昨日の記録、破り捨てたいけど、俊典さんの言葉がすっごい嬉しかったから消したいけど消したくない……何というジレンマ！

結局葛藤した結果、残すことにした。

個性で自分の会話の部分だけ消すのはズルいと思ったので、黒歴史もそのまま。

きっと未来でこういうこともあったなーって楽しむ時が……きたらいいなぁ……

よし、とりあえず昨日の痴態は忘れておこう、忘れよう、忘れた、うん。

俊典さんと過ごしたからか、大分すっきりした。

個性で疲れは取れても、ストレスはたまる物。

いや、多分個性使えばストレスもとれるけど。

元気になったので明日からも頑張ろう。

面倒な設置の話はもうしたくない。

日記くらい楽しい事残したいよね。
……そもそも一日中設置の話しかしてないから、楽しい話ってないや。
アハハハハハ……馬鹿か私は……
今日はもう寝よ。
愉しい事がある日まで日記はやめておこう。
ストレスたまる話ばかり記しても面白くないし、思い出してむかむかするだけだからな。

●月○日　弟子が人間やめてる
イズくんが俊典さんから一本取った。
中学二年生の彼が本気の全力ではなかったとはいえ、オールマイトから一本取ったのである。
っていうか、むしろ負傷させた。
イズくんは凄く強くなってる、それは認める。
けどまさか、神速みたいな技を覚えるとは思わなかったけどな！
なに、脳と身体のリミッターを外した？
普通そんなことできません……って言いたいけど、あの師匠達なら普通にできそうで

ある。
けど、あの師匠達がそれを許可するとは思えないんだけど……
個性使って検査してみたけど、反動らしきものは一切なし。
リミッターを外して、思いっきり動いて、反動なし。
完全健康体です、どういうことなの。
イズくん、おめでとう。
君は人間をやめました。
近い内に身体測定しよう。
人外に踏み込んだ君の身体能力を俺は楽しみにしてます。
かっちゃんは、俊典さんから一本取って負傷させたイズくんを見て更なる闘志を燃やしてた。
最近のかっちゃんは足も爆破できるようになったみたいで、裸足で戦ってます。
うん、君も人間やめてきたね？
アイアンマンみたいに空を飛ばないでくれる？
両手両足から爆炎がジェットみたいに出てるんだけど、どういうコントロールしてるの？
俺の弟子たちが人間をやめました。

試合形式だったら、俺、何もできないで負けると思います。

★　★　★　★

「「ッ！」」
オールマイトと僕の拳がぶつかって、周りに衝撃波が発生する。
拳がぶつかり合った場所から地面に円形状にヒビが広がる。
ぶつかり合っても、僕は吹き飛ばされることなくその場で拮抗していた。
遂にここまで来た。
『頭は冷静に、心は熱く』
オールマイトとの組手では、オールマイトが攻めてくることはない。
オールマイトは守りで、その守りを抜いて一撃入れることがこの組手の目的だ。
ガマクでフェイントをかけて、上段回し蹴り、けどオールマイトの腕に防がれる。
ガンッと人と人とのぶつかり合いでは鳴りえない音がする。
防がれたと同時に跳び上がって反対の足で飛び後ろ回し蹴り！
心力強化で思いっきり強化されたこの蹴りなら、受け止められても体勢を崩すことができる。

オールマイトは流石に防げないと思ったのか、頭を伏せて攻撃を避けた。
避けたんだ、オールマイトが僕の攻撃を。
つまり、受けるのは危険だと判断された！
「ＨＡＨＡＨＡ！　中々やるようになったね！」
「まだまだ！」
オールマイトが伏せて避けたことで、僕の体は隙だらけ。
けど、体が空にあっても動けない訳じゃない。
空を蹴って、オールマイトの上空へ、そしてアッパーに対して、かかと落としで対応する。
流石に空中じゃ押し負けるよね。
けど、僕にもダメージはない。
アッパーの反動を利用して、一気に距離を取る。
オールマイトは不敵な笑みを浮かべながら、僕を見ている。
けど、その頬に一筋の汗が流れているのを僕は見た。
着地して、すぐさま縮地。
オールマイトと打ち合う！
「それは蛮勇と言うものじゃないかな!?」

「ッ！」

オールマイトの言葉に何も答えず、ただ拳と拳をぶつけ合う。

一回打ち合うごとに、衝撃波が地面を破壊していく。

それでいい。

心力強化も全力で使って、打ち合う。

足場となっていた大地は砕けて、ボロボロになる。

けど、この程度でオールマイトが体勢を崩す訳がない。

いつもの笑顔の向こうで、僕を観察しているのを感じる。

『何を企んでいる』

目がそういっていた。

この攻撃の間にも、僕はその準備を着々と進めている。

これをうまく使えば、オールマイトに一撃を入れることができる。

先生から習った、あの技を。

攻撃をしながら呼吸を整える。

オールマイトがどう動くかが、うっすらと見え始める。

オールマイトと戦い続けた事でできた僕のイメージによる虚像と、オールマイトが徐々に重なる。

胴体を狙えば、腕を払われる、肩を狙えば拳で相殺される。
オールマイトは僕の攻撃をなるべく相殺で対応している。
だからこそ、この瞬間が勝負！
脳と身体のリミッターを外す。
視界がモノクロになり、オールマイトの動き、周りの動きが、遅くなる。
知覚領域が広がって、全ての動作が遅くなる。
その中で、僕だけが普段通りに動ける。
オールマイトと拳を合わせる瞬間、僕はオールマイトへと深く踏み込んだ。
時が遅くなったこの世界でも、オールマイトは僕の動きを察知して、驚くことに普段と変わらない速度で防御の構えを取った。
迎撃でなくてよかった。
この一撃は今までの攻撃の中でも一番威力のある一撃。
多くの武術を修めた先生が教えてくれた最強の一撃。
先生曰く、空手、柔術、中国拳法、ムエタイの４種類全ての全身運動の要訣を纏める事でできる必殺の一撃。
「無拍子」
「ぐぅ!?」

ドガンッとまるでトラックがぶつかった様な音がして、オールマイトの体勢が崩れ、足元が一気に崩壊して、更にバランスを崩す。
この時を待っていた!!
ここを逃したら勝機はない！
意識をもっと加速させろ、もっと早く動くんだ!!
僕はここでオールマイトに……
「勝つんだ!!」
「!?」
オールマイトの動きが少しだけ遅くなった。
驚いているのがわかる。
ここでダメージを与えれば、僕の勝ちだ!!
エロ先生から教わった防御してもダメージを与える必殺技！
「浸透水鏡双掌！」
「ぐぅッ!?」
胴体へ放った必殺技は、オールマイトの腕に防がれた。
遅くなった時間が、再び元の時間に戻る。
勝利宣言がされていないので、すぐさまオールマイトから距離を取った。

「そこまで、勝者はイズくんよ」
「……」
「ＨＡＨＡＨＡ、まさかもう一本取られるとは思わなかったよ」
師匠がそう宣言すると、オールマイトは腕をプラプラさせながら歩み寄ってきた。
……一本取った？
え、本当に？
「あ、あわわわ、ほ、本当に!?」
「正直、オールマイトの体勢を崩した一撃で一本にしてよかったんだけどね……それよりも、オールマイト、腕出しなさい」
「あぁ、すまないね」
師匠がオールマイトの腕に手をかざして、顔をしかめた。
「……無拍子を受けた右腕が骨折、浸透水鏡双掌を受けた手は見た目は大丈夫そうだけど、内部はボロボロよ？　筋肉断裂、血管損傷、おまけに神経も少し傷ついてる。私が居なかったら、死んでるわよ」
うわぁ……先生の必殺技でそんなことに……
確かに、先生たち『必ず殺す技』って言ってたけど、ヤバすぎです。
「ＨＡＨＡＨＡ、怖いこと言わないでくれないか？」

「言っとくけど、冗談でも嘘でもないんだからね。イズくんも、その技ちょっと危険すぎ。少なくとも、リミッター解除と心力強化と一緒に使ったらだめよ、ヴィラン死ぬから」

引き攣った笑いをするオールマイトを睨みつけて、真剣な顔で僕にも注意してきた。

「はい、ごめんなさい」

僕もヒーローになるつもりだけど、人殺しをするつもりはないから気を付けよう。

「けど、凄いわね。あのオールマイトから一本どころか負傷させたのよ？　イズくんも凄い成長しているわ、おめでとう！」

「あぁ、凄まじい攻撃だった。やるじゃないか、緑谷少年！」

師匠とオールマイトに褒められて、凄く嬉しくなった。

「はい！　でも、今度は対等な条件で勝てる様に頑張ります!!」

「その意気だ！　だが、私もそう簡単に負けないぞ！」

「どこまでのぼるのかしら、イズくんは……。所で俊典さん、割と悔しかったりする？」

「……そんなことはない」

師匠がオールマイトに何やら耳打ちして、オールマイトは目を逸らしてた。

お付き合いしてから二人のパーソナルスペースってほとんどなくなってるよね。

今もほとんど抱き着いている様な形になってるし。

「師匠、オールマイト、仲が良いのはわかりましたけど、もう少し人目を気にしてください」
「え？　何かおかしかった？」
「……気を付けよう」
きょとんとした師匠とは対照に、オールマイトは神妙に頷いていた。
師匠は天然、間違いない。
さて、今日も修行頑張ろう！

番外　夢の中で

テレビで夢に関する事が取り上げられているのを見て、ふと思ったことを呟いた。
「明晰夢か……本当に見れる物なのだろうか？」
「気になるの？」
視線を横へと向ければ、コーヒーカップを二つ持っているアリス君がいた。
「はい、どうぞ。ココアだけど」
「いや、ありがとう」
アリス君からココアを受け取って、口に含む。
優しく暖かな甘さが口に広がり、ほっと息をつく。
「ん……おいし」
フーっと息を吹きかけて、少しずつココアを飲んでいるアリス君の姿に小さく笑みが浮かぶ。
両手でコップを持つアリス君の姿はどこか幼く感じて、思わずその頭を撫でていた。
突然頭を撫でられてびっくりしたのか、アリス君は目を丸くしていた。
「どうしたのいきなり？」

「いや、なんでもないよ」
最後にもう一度頭を撫でて、ココアを口に含む。
「変なの……それで、明晰夢見てみたいの？」
「あぁ、私はあまり夢を見る方ではなくてね。見たとしても全く覚えてないから、本当に明晰夢と言うものがあるのか、と思ってね」
まぁ、アリス君の個性があれば簡単に明晰夢を見る事ができるだろう。
明晰夢と言うか、夢の世界で緑谷少年に鍛錬させているからね。
こんな話をしてしまえば、見てみるかと言う話になるのはわかっているがね。
「それじゃあ、見てみる？」
案の定返ってきた言葉に思わず苦笑する。
「興味はあるが、アリス君の個性なら明晰夢でなくても見れるだろう？」
「まぁね、それじゃあ、俊典さんが深層心理で思っている事を夢として見るのはどう？」
「深層心理？」
それは私が心の奥底で望んでいることを夢に見せると言う事だろうか？
「貴方が心の奥底で望んでいることを、夢で見るのよ。どう？」
当たっていた様だ。
だが、確かに気になるな。

私が深層心理でどういうことを望んでいるのか……

「お願いしてもいいかい？」

私がそういうと、アリス君は嬉しそうに笑った。

「任せて！」

場所を移して寝室へ。

まさかアリス君を自分の寝室へ招くことになるとは……

思わず吹き出る煩悩を理性で押さえつける。

「俊典さん、ほらほら」

ポンポンと自分の膝を叩くアリス君に、顔が赤くなるのがわかる。

今日のアリス君はふんわりとした白いワンピース着ているのだが……何故裾を捲り上げているんだ!?

白い足が眩しくて、非常に気恥ずかしい！

だがアリス君の表情が実にキラキラしているので断り辛い……！

気恥ずかしいが、せっかく恋人が膝枕をしてくれると言うのだ。

ここは大人しくアリス君の膝を枕にさせてもらおう。

アリス君の膝に頭を乗せると、アリス君が楽しそうに、嬉しそうに笑っていた。

「俊典さん、顔真っ赤だよ。可愛い」

「グッ、あ、あまりそう言う事は言わないでくれ」
「うん、ごめんなさい。それじゃあ、後は眠るだけだけど、催眠誘導する？」
「そうだな……頼んでも良いかな？」
正直、このままだと眠れそうにない……心臓が非常にうるさいのだ。
「ふふふ、それじゃ、おやすみなさい」
アリス君がそういうと、私の意識はすぅっと落ちて行った。

ぼんやりとした視界が、徐々にクリアになる。
どうやら私は寝室にいる様だ。
周りを見渡すと、私の拠点にある寝室だった。
「んん？　私は深層心理で何を思っているんだ？」
なんの代わり映えしない寝室を見渡す。
もしかして、ただ休みたいと言う欲求があったのだろうか？
そんなことを思っているとガチャッという音がして、寝室の扉が開いた。
「俊典さん、さ、流石にこれはちょっと恥ずかしいニャア……」
「ん？　んん!?」
そこから入ってきたのはアリス君……だったんだが、明らかにおかしい所があった

……というか、おかしい所しかなかった！
何故なら今寝室に入ってきたアリス君は、髪と同じ色をした猫みたいな耳を生やしており、その上胸元を大きく露出させ、スカートの丈も非常に短い白黒のメイド服を着たアリス君がいたのだ。
よくよくみれば、スカートの下から金色のしっぽが揺らいでいる!?
「ニャァ……個性まで使わせるにゃんて、俊典さんって意外と鬼畜にゃッ……！」
「な、な、なぁ!?」
アリス君は恥ずかしそうにスカートの裾を抑えながら、私を睨みつけてきた。
だが、正直私はそれどころじゃない。
というかなんて格好をしているんだ!?
「な、なんて格好をしてるんだ!?」
思わず考えていた事がそのまま言葉になった。
アリス君は涙目になって私を睨みつけてきた。
「酷いニャ！　俊典さんがコスプレしてくれって言ったにゃ！」
「私が!?」
「っていうか、なんでこんな服持ってるにゃ?」
コテンと首を傾げるアリス君から目を逸らすために、体ごと反転した。

な、なんだあの服と言葉は!?
何故か思いっきり抱きしめたくなったのだが!?
私は一体深層心理でアリス君にこんなことをしたいと思っているのか!?
これはマズイ!
早く目を覚まさなければ!!
どうすれば目を覚ますことができる!?
「俊典さん、これはどう?」
「うん?　お、おぉ!?」
顔を上げれば、アリス君の服装が青いドレスに変わっていた。
イメージとしては不思議の国のアリスだろうか?
「意外と似てるところあるから、こっちはあまり恥ずかしくない、かな」
少し照れたような笑みを浮かべるアリス君。
確かに似合っている。
とても可愛らしくて、こっちは安心して見ていられる。
「それで、どうかな?」
軽く裾を摘まむ姿は非常に可愛らしい。
「あぁ、似合っているよ」

「よかった、それじゃあ次ね！」
「は？」
アリス君がそういうと同時に、アリス君が黒い闇を纏って姿を変えた。
「こ、こっちは少し露出が多くて恥ずかしいぃぃ……！」
「……」
私は何も言えずにポカーンと口を開けていた。
アリス君の今度の姿は、恐らく悪魔のコスプレだと思われる。
が、露出が非常に多い！
メイド服より露出が多いってどういうことだ!?
黒のビキニの様な物に、悪魔の翼としっぽが生えているが！
なんでそんな服装なんだ!?
私は一体何を望んでいると言うのだ!?
そんなことを考えていると、アリス君が涙目のまま私を見た。
なにか、くるぞ！
瞬時にそれを察して、私はどんな言葉が来ても耐えれる様に身構えた。
「……す」
す？

「……精……吸っちゃうぞ……！」
「……ぐふぅ」
こ、これは夢魔……夢魔のコスプレか……！
思わず変なことを想像してしまい、前かがみに崩れ落ちた。
これはヤバい……！
あの涙目で恥ずかしそうに言う姿に、何故もっと虐めたいなど……！
私は一体どんな性癖をしているんだ……
「いかがなさいましたか？　俊典様」
「様付け!?」
突然様付けで呼ばれて思わず顔を上げると、今度はシスターの格好をしたアリス君が微笑みを浮かべていた。
先程まで抱いていた劣情が、まるで浄化される様になくなっていくのを感じた。
今のアリス君は、とても神聖な雰囲気を纏っており、後光がさしている所為か幻想的だった。
アリス君は名残惜し気に、寂しそうに、微笑んだ。
呆然とアリス君を見ている私に背を向けて、光に向かって祈る様に手を組んだ。
「貴方様に神のご加護がありますように」

その瞬間、光が溢れてアリス君の姿が見えなくなる。
光がアリス君を飲み込んだ様だった。
アリス君が消えてしまう、そんな焦燥に駆られ私は光へと手を伸ばした。
「アリス君!!」
「きゃっ!?　と、俊典!?　い、いきなりなにすんのよ!?」
「……は?」
光を超えた先にいたのはシスター服を着たアリス君ではなく、セーラー服を着たアリス君だった。
勢いがついていた所為か、私はアリス君をベッドへと押し倒していた。
押し倒したせいで、服が乱れて凄い……その、なんだ……端的に言えば凄くエロい状態になっている。
「はっ!?」
状況を理解した私は、即座に跳び上がってアリス君から距離を取った。
先程から状況が目まぐるしく変わりすぎてて、何が何だか!?
ただはっきりとわかることが一つだけある。
私はヘタレだが変態だったようだ。
「何よ……ヘタレ、意気地なし、押し倒したなら最後までやれっての……」

「そんなこと言わないでくれ!?」
というか、最初のコスプレからひどく雰囲気が変わっているんだが!?
思わず頭を抱えて、その場に屈み込んだ。
もうなにがなんだか……
「もういいわよ、直正の所に行くから!」
「は?」
何故直正がここで出て来るんだ?
「俊典なんか知らない! 直正と付き合ってやる――――――!!」
そんな捨て台詞を残して、アリス君は扉を開けて走っていった。
事態を理解して、私はすぐ動き出した。
「それだけは駄目だ!!」
いつの間にか知らない寝室に変わっていたが、そんなこと構っていられない。
私は扉を開けて走り出そうとしたら、小さい子が目の前にいて急停止した。
「としのりおにいちゃん」
「お兄ちゃん!?」
目の前の女の子の言葉に、改めて目を向けるとアリス君を小さくしたような少女がいた。

「おにいちゃん、だっこしてー！」
「あ、あぁ」
小さくなったアリス君だと思われる少女を抱き上げる。
これは、また場面が変わったんだな……そう理解して、私は深い溜息をついた。
「としのりおにいちゃんだいすきー！」
「そ、そうか。ありがとう」
私がそう返すと、女の子は不満そうに頬を膨らませた。
「ありすのことだいすきっていってくれないのー？」
やはりこの子はアリス君だったらしい、私は心は一体何を願っているだろうか……
「あぁ、いや、大好きだよ」
そんなことを思いつつも、アリス君に笑顔を向けてあやす。
「じゃあ、いつもみたいにちゅーして！」
「……私は、ロリコン、だったのか……」
返ってきた言葉に、私は天を仰いだ。
と言うか、私は一体アリス君をどうしたいんだ……
アリス君をコスプレさせていると思ったら、学生、その次は5才くらいの子供……
ちょっとずつ時を遡っていってるな……ハハハ、起きたらどんな顔でアリス君を見れ

ばいいんだ……

次はなんだ、もう何が来ようと驚かんぞ。

腕の中にいたアリス君は気が付いたら消えていた。

「俊典さん」

「アリス君」

今度は横から声が聞こえたので今度はなんだと、顔を向けて、言葉を失った。

そこにいたのは純白のドレスを纏ったアリス君が、顔を少し赤く染めて微笑んでいたのだ。

咄嗟に周りを見渡せば、教会の様だった。

気が付けば、私の服装も白いタキシードだ。

「これは、結婚式、か？」

『寝ぼけている奴に誓いの言葉は必要ないな。言葉よりも行動で示してもらおうじゃないか。ということで細かい事は一切抜きにして、誓いの口付けを』

聞き覚えのある声に前を向けば、直正が神父服を着て微笑んでいた。

「色々と飛ばしすぎだろう……」

「……ふふふ……」

隣を見れば、アリス君が楽しそうに笑っている。
これは私が望んでいる未来だ。
オール・フォー・ワンの事があるから今はまだ無理だが、いつかは辿り着きたいと願っている未来だ。
ベールを外せば綺麗な化粧を施されたアリス君が、とても嬉しそうに笑う。
現実でもアリス君はこんな風に微笑んでくれるだろうか。
そう考えて、それ以外の表情を想像できなかった。
そう思えるくらいには、愛情を向けてくれていると自覚している。
私は彼女と同じくらいの愛情を返せているだろうか……？
私がもっと愛情を表せば、彼女はもっと笑ってくれるのではないだろうか？
そう考えると同時に、世界が徐々に形をなくしていくのに気が付いた。
どうやら時間切れの様だ。
「そっか……ここは貴方の夢だったのね」
アリス君を見ると寂しそうな笑顔を浮かべていた。
そんな顔をするアリス君に、私は手を取った。
「アリス君、待っていてくれ。必ず、迎えに行く」
「……うん、待ってる……けど……」

アリス君が最後に何かを言っていたが、私は聞き取ることができず、唇に柔らかいものを感じて、目が覚めた。
「おはよう、どうだった？」
「中々、面白い夢が見れたよ」
アリス君を見上げながら、私は夢を思い出していた。
前半はともかく、最後の部分は間違いなく私の願いだと言える。前半はともかく。
そんなことを思いながらアリス君を見上げた。
「？」
不思議そうな顔をして首を傾げる彼女に思ったことをそのまま伝えよう。
「アリス君は、可愛いね」
「っ!?　い、いきなりどうしたのっ？」
顔を真っ赤にして、目を泳がせるアリス君が凄く可愛く見える。
そんなアリス君の頬に手を伸ばすと、ビクッとしたものの、すぐさま手にすり寄ってきた。
まるで猫の様だな……と考えて、前半の夢を思い出す。
……なんだかんだで私は色んな格好をしたアリス君が見たいのかもしれない……。
意図せず自身の性癖を知ってしまい、内心で項垂れるがアリス君と戯れる手は止まら

ない。
「……にぅ」
アリス君から小さく漏れた声に、私は上体を起こしてアリス君を捕まえて、そのまま一緒に横になった。
「わっ!?　な、なにっ!?」
「少し昼寝しようか」
突然の事に目を白黒させているアリス君を抱き寄せる。
最後の夢の所為か、今の私は少し積極的だな、なんて心の中で笑う。
「……一体どんな夢見たの？」
「……それは黙秘させてくれ……」
流石に夢の内容を言う気にはなれないが、今はこうしていよう。
アリス君の温かさを感じながら私は目を閉じた。